

先生方とともに  
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉  
高校版  
2019  
Volume 3

8月

# VIEW21

## 好機か、脅威か

特集

# Society 5.0

—— 高校教育のこれから ——

改革事例から選く！

「学校教育デザイン」を描く道標

岡山県立瀬戸高校

主体的・対話的で深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

農業 青森県立三本木農業高校 佐々木秀幸

化学 東京都立清瀬高校 岩淵 寛

指導変革の軌跡

大分県立大分豊府中学校・高校

沖縄県立久米島高校



## しなやかな心で

**生徒** 先生の授業は、2年生の「物理」からペースが断然速くなりましたよね。小テストも毎回あるので、以前にも増して緊張感を持つようになりました。

**生徒** 席が成績で決まるから気が抜けない！ただ、入試に向けてはそうであるのがよいと思っています。

**先生** みんな、授業を変えた私の意図を受け止めて、「物理」を選択した覚悟を持ってきてきたようだね。

**生徒** 授業は難しいけれど、先生の「物理基礎」の授業で物理の面白さに目覚め、物理のことをもっと知りたいと思って、今の授業に臨んでいます。

**生徒** 私は、1年生の文理選択の時、先生に何度も相談し、締め切り後に無理を言って理系に変更して「物理」を選んだので、志望校合格に向けて頑張り抜きたいです。

**先生** 最終的に、自分のやりたいことに向き合い、人生に責任を持つと覚悟を決めた姿に感動したよ。

**生徒** 入学直後の集会で先生が話されていた「しなやかマインドセット」\*がずっと心にあったんです。何事も前向きに捉えるその考え方に最初は否定的でしたが、本気で将来に向き合ったら、まだ勉強を始めてもいないのに諦めては駄目だと思うようになりました。

**生徒** 先生の言葉には力があるよね。私が難関大学への挑戦を決めたものの自信を持たずにいた時、「授業内容は最低限として、より高みを目指そう。その力はあるから」と先生に言葉をかけてもらい、勇気が湧きました。

**生徒** 私も先生から「学習習慣が定着して、模擬試験の結果も好調だから、生活リズムが整ったらもっと上をねらえるよ」と言われて、今も頑張っています。

**生徒** 私は逆に、先生に自分が勉強をおろそかにしていた科目をずばっと指摘されて、苦手から逃げていた自分を見つめ直すことができました。

**先生** 褒められて伸びる人、厳しく言われて頑張る人と、様々だからね。みんなにはまだまだ力が秘められているのだから、自分に負けずに前に進めるよう後押ししていくよ。

**生徒** 実は、先生に提案があって、超難問に取り組むグループワークをしたいんです。物理の強者ぞろいだから、いろいろな考えが出てきて楽しそうと思って。

**先生** 先生も同じことを考えていて、単元の最後に行おうと計画なんだ。みんなの志望校の入試問題から、議論が盛り上がるような超難問を出すよ。期待していて！

**津田将史先生** 教職歴7年。同校に赴任して7年目。進路指導・選抜対策部副部長。2学年担任。

**北海道・私立札幌第一高校** 全日制/普通科/共学/1学年約400人/2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、京都大、大阪大、札幌医科大などに213人が合格。私立大は、上智大、東京理科大、早稲田などに延べ730人が合格。

\* アメリカのスタンフォード大学で発達心理学を教えるキャロル・S・ドゥエックが提唱する Growth Mindset のこと。

## 2 特集

# Society 5.0 — 高校教育のこれから —

- 4 **イントロダクション — 教師と生徒の未来トーク —**  
変化する社会に向けて私たちは今、何をどのように学ぶのか
- 6 **課題整理**  
Society 5.0にかかわる各種提言はどんな方向に向かっているのか
- 10 **先進事例**  
文理分断したカリキュラムを転換し、生徒の学びを広げ、高めていく
- 11 **先進事例 1 埼玉県・国立筑波大学附属坂戸高校**  
国内外のフィールドワークを軸としたカリキュラムで、国際社会の一員としての自覚を持たせる
- 14 **先進事例 2 長野県飯田OIDE長姫高校**  
地域に出て、地域を教材にして学ぶ「地域人教育」で、社会を形成する力を育む
- 18 **座談会**  
Society 5.0時代を学校現場はどう捉えるか  
大谷大学 文学部 教授 荒瀬克己 / 東北大学大学院 情報科学研究科 教授 堀田龍也 /  
ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 営業本部長 吉野隆弘

### 今月の表紙メッセージ

#### 好機か、脅威か

◎新学習指導要領の告示以来、教育再生実行会議や文部科学省、経済産業省等から、次なる教育のあり方が相次いで発信されています。それらに共通するキーワードの1つが「Society 5.0」という未来社会の姿です。そこでは、高度化した人工知能等によって新たなビジネスやサービスが生み出され、劇的に便利で快適な生活になると言われています。一方で、人間の仕事が機械に奪われるといった不安を持つ人も少なくありません。新しい社会の到来を学校はどう捉えればよいのか。本特集を材料に、先生方、生徒同士で考えてみるのはいかがでしょうか。

『VIEW21』高校版  
編集長 柏木崇

## 22 改革事例から導く！「学校教育デザイン」を描く道標

- 22 **岡山県立瀬戸高校**  
地域連携を重視した「総合的な学習の時間」を中心に、イノベーターを育てる教育活動の実現を目指す

## 26 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

- 26 **農業**  
青森県立三本木農業高校 佐々木秀幸  
データや新聞記事を活用したグループ討論で、地域や農業の課題に向き合う志を高める

- 30 **化学**  
東京都立清瀬高校 岩瀬 寛  
生徒主体の実験を通して、協働しながら問題を解決し、事象の理解を深める力を育む

## 34 指導変革の軌跡

- 34 **大分県立大分豊府中学校・高校**  
多様な資質・能力の育成  
「世界標準の学力」の育成に向け、中・高の教師が目標を合わせた指導改善を推進

- 38 **沖縄県立久米島高校**  
地域と連携した学校づくり  
「選ばれる学校」を目指し、学校と地域が一丸となって魅力ある教育活動を実現

## 42 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

2年生2学期 ポートフォリオ

## 46 学校を飛び出し、学びを巡る 高校教師 study-tour

通信制高校の授業  
好きなこと、苦手なことを認め合い、個に応じた学びを深める

## 48 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

- 48 **東北芸術工科大学 デザイン工学部**  
コミュニティデザイン学科  
地域を元気にする仕組みや人のつながりをデザインする力を育成
- 50 **デジタルハリウッド大学**  
デジタルコミュニケーション学部  
デジタルコンテンツ学科  
1年次からデジタル領域を横断して学び、未来を生き抜く力を身につける

## 52 これからの会議・研修のあり方、つくり方

実践者に聞く！  
茨城県・私立明秀学園日立高校  
丁寧な準備と進行で、校内会議に対話の文化を醸成

## 56 VIEW'S REPORT

- 56 次期学習指導要領に向けた埼玉県の取り組み  
多様な資質・能力の育成を目指す  
指導と評価の確立に小・中・高合同で取り組む
- 60 国際シンポジウム「教育を科学する—エビデンスやデータで考える、2030年の教育の姿—」開催  
エビデンスやデータを基にした教育改革の推進が必要

## 68 Reader's VIEW

### 巻末 教師を育てた言葉たち

「目標—現状=課題」  
秋田県立秋田高校 土門高士

# Society 5.0

## — 高校教育のこれから —

2016年1月に閣議決定された「第5期科学技術基本計画」の中で、狩猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続く、目指すべき新たな社会の姿として「超スマート社会 = Society 5.0」が提唱された。教育再生実行会議や文部科学省、経済産業省などの各所から Society 5.0 にかかわる発信がされているが、Society 5.0 とは具体的にはどのような社会で、これからの高校教育にどのような影響をもたらすのだろうか。今号では、Society 5.0 と高校教育にかかわる情報について整理した上で、学校現場は新しい社会の到来をどのように捉えていく必要があるのかを考えていく。

イントロダクション	教師と生徒の未来トーク	P.4
課題整理	Society 5.0にかかわる各種提言はどんな方向に向かっているのか	P.6
先進事例	埼玉県・国立筑波大学附属坂戸高校／長野県飯田 <sup>まかど</sup> OIDE長姫 <sup>おまひめ</sup> 高校	P.10
座談会	Society 5.0時代を学校現場はどう捉えるか	P.18



先端技術の  
進歩によって  
大きく変化する社会を、  
高校教師や高校生は  
どう考える？

Society 5.0 って  
どんな社会なのですか？  
楽しみだけど、  
少し不安も……。

## Society 5.0 にかかわる各所からの発信

2016年 「第5期科学技術基本計画」閣議決定

\*第2章(2)「世界に先駆けた『超スマート社会』の実現(Society 5.0)」で「Society 5.0」について言及

2017年

### 文部科学省

12月 Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会 開始

2018年

### 経済産業省

1月 「未来の教室」とEdTech研究会 開始

6月 「第1次提言」公表

### 教育再生実行会議

8月 教育再生実行会議ワーキング・グループ開始

6月 Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会「Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」公表

11月 「新時代の学びを支える先端技術のフル活用に向けて～柴山・学びの革新プラン～」公表

2019年

1月 「第十一次提言中間報告」公表

5月 「技術の進展に応じた教育の革新、新時代に対応した高等学校改革について(第十一次提言)」公表

3月 柴山・学びの革新プランを踏まえた「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(中間まとめ)」公表

4月 リーディング・プロジェクトの事業化「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」開始(採択機関の公表)  
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」開始(指定校の公表)

6月 「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」公表

6月 「未来の教室」とEdTech研究会 第2次提言『未来の教室』ビジョン」公表

### 中央教育審議会

4月 「新しい時代の初等中等教育の在り方について」諮問

6月 諮問を受けて「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」開始

## 高大接続改革

中央教育審議会による新学習指導要領にかかる答申

「大学入学共通テスト」実施方針の策定・公表/試行調査(プレテスト)実施

新学習指導要領・告示

各大学の2021年度入学者選抜方法等の予告・公表

「大学入学共通テスト」試行調査(プレテスト)実施

「高校生のための学びの基礎診断」の実施開始

「大学入学共通テスト」実施大綱の策定・公表

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

Society 5.0は、  
これからの教育を考える上でも  
大事なキーワードの一つです。  
君たちの高校生活にも  
既に関係しているんですよ。

岡山県立和気閑谷高校の皆さんに  
「Society 5.0と高校での学び」について  
語り合っていました!



# 変化する社会に向けて私たちは今、何をどのように学ぶのか

Society 5.0 に向けたこれからの教育のあり方の検討が進められている。

今後、高校で学ぶ生徒たちは、変化の激しい社会を生き抜くために、何をどのように学ぶべきなのか。

中央教育審議会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」のメンバーでもある

岡山県立和気閑谷高校の香山真一校長が生徒たちと語り合った。

## Society 5.0 で実現する社会

これまでの社会

地域の課題や高齢者のニーズなどに十分対応できない

これからの社会

イノベーションにより、様々なニーズに対応できる社会



これまでの社会

年齢や障がいなどによる、労働や行動範囲の制約

これからの社会

ロボットや自動走行車などの技術で、人の可能性が広がる社会



岡山県立和気閑谷高校 校長  
**香山真一**  
こうやま・しんいち  
教職歴 38 年。  
同校に赴任して 7 年目。



岡山県立和気閑谷高校 2 年生  
**妹尾駿一** せのお・しゅんいち



岡山県立和気閑谷高校 2 年生  
**太田美羽** おおた・みわ



岡山県立和気閑谷高校 1 年生  
**井上健太** いのうえ・けんた



岡山県立和気閑谷高校 1 年生  
**恵美まりん** えみ・まりん

### 岡山県立和気閑谷高校

◎ 1670 年、岡山藩主・池田光政が開校した閑谷学校をルーツとし、日本で最も長い歴史と伝統を誇る。探究学習として「閑谷学（しずたにがく）」を実施し、生徒はフィールドワークを通して地域の活性化に取り組む。2019 年より文部科学省の地域協働推進校（地域魅力化型）の指定を受ける。

◎ 設立 1670（寛文 10）年  
◎ 形態 全日制／普通科、キャリア探求科／共学  
◎ 生徒数 1 学年約 120 人  
◎ 2019 年度進路実績（現役のみ） 4 年制大学は、尾道市立大、大阪商業大、くらしき作陽大、就美大、ノートルダム清心女子大、広島修道大などに 22 人が進学。短大、専門学校進学 52 人。就職 35 人。  
◎ URL <http://www.wakesizu.okayama-c.ed.jp/>

AI にはできなくて、人間だからできることは？

**香山** AI などの先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れる Society 5.0 と呼ばれる社会について、どのようなイメージを持っていますか。

**妹尾** 農作業が楽になったり、遠隔医療が普及したりと、便利になることはたくさんありそうですが、機械に任せて大丈夫かなと不安な部分もあります。ただ、朝起きて冷蔵庫に話しかけたら、自分の体調などに関するデータを基に、お勧めの朝食メニューを提案してくれるような未来の生活には、やはりワクワクします。

**恵美** 以前、母が、「私が 20 代の頃の携帯電話は、肩にかけて持ち歩くくらい大きかったのよ」と教えてくれました。でも、今は薄く小型化していますよね。この先さらにどんなふうに進化するのか楽しみです！

**井上** でも、いろいろな仕事を AI などが行うようになった時、自分の役割を見つけれられる人と、見つけれない人に分かれてしまうのではないかと気がします。

**妹尾** 独創的な発想をしたり、様々



探究学習「閑谷学」の成果を発表する生徒。答えが1つとは限らないテーマについて考え、自分の考えを語ることで未来をつくるために必要な力が育まれる。

な考えを組み合わせたたりして、自分の考えをつくることは、AIではできないことだと思おうので、そうしたことが求められる職業はこの先も残っていくと思います。僕が残ると思うだなどと思う職業は、身近なところでは教師です。和気閑谷高校の先生たちは、生徒の能力や個性に合わせて教えてくれたりしています。それは、AIにはできない仕事だと思います。

**太田** 保育士や幼稚園の先生の仕事もAIには奪われない気がします。子どもは、時に大人が想像もしない行動をします。そういった想定外な状況に柔軟に対応することが求められる仕事は、人間にしかできないと

\*内閣府「Society 5.0『科学技術イノベーションが拓く新たな社会』説明資料」を基に編集部が作成。

**これまでの社会** 知識・情報の共有、連携が不十分

**これからの社会**

IoTですべての人とモノがつながり、新たな価値が生まれる社会



**これまでの社会** 必要な情報の探索・分析が負担  
リテラシー（活用能力）が必要

**これからの社会**

AIにより、必要な情報が必要な時に提供される社会



### 対話し、認め合う力を 高校の授業で育む

**妹尾** 「AIに仕事を奪われてしまう」と心配するばかりではなく、人間だからこそのできる仕事って何だろうと考えられる人になりたいです。

**香山** Society 5.0の到来を考えた時、私は、これまで以上に学校に「対話の時間」を増やし、人間らしい学びをつくっていくことが大切だと思います。特に、教師と生徒、生徒同士が「あなたはここをよく頑張ったね」と語り合い、認め合う時間

す。AIは、何に、どれだけ取り組んだのかは評価できませんが、どんな思いで、どのような工夫、挑戦をしたのかは、人間にしか評価できません。本校の三者面談では、生徒がタブレット端末を使って、自分の成長を担任、保護者にプレゼンテーションしますが、それも対話し、認め合う力を育む時間なのです。

**井上** 先生や家族の前で自分の考えを述べることで、自分を深く理解できるようになった気がします。プレゼンテーションの経験も、将来仕事できっと役立ちますよね。

**太田** タブレット端末は、授業で調べものをする時や、探究学習「閑谷

学」での成果を学校のブログなどで公開する時にとっても役立ちます。そうした先端技術を活用する力ももっと高めていきたいです。

**恵美** 自分の考えを自分なりの言葉にすること、それを先端技術などを使って多くの人に効果的に伝えること、その両方がこれからは大切なのだと思います。

**妹尾** 学校は、いろいろな人と接することで、自分の人間性や社会性を磨く場だと思います。だから授業でも、僕は教科書の内容だけでなく、教科書の内容を通してさらにほかのことを学んでいる気がします。

**香山** 先生たちとは、「教科書の内容を教えるだけでなく、生徒が社会や人間について考えるような授業にしましょう」とよく話をしています。それは、皆さん一人ひとりが自分なりの課題を発見して、よりよい社会をつくっていくこうとする探究的な人

になってほしいからです。いくら先端技術が進歩しても、誰もが「自分は幸せだ」と心から思える未来を描き、つくることは、私たち人間にしかできません。学校では、皆に未来をつくる力を育む教育を行っているんですよ。

# Society 5.0にかかわる各種提言は どんな方向に向かっているのか

IoT (Internet of Things)、ロボット、人工知能 (AI) 等の新たな技術を産業や社会生活に取り入れて、新たな価値が生み出される Society 5.0。少子化や過疎化といった課題を克服し、持続可能な社会の創出に貢献する人材を育成するため、高校現場には今、何が求められるのか。文部科学省初等中等教育局に話を聞いた。

## Society 5.0に対応する 学校のあり方の議論が続く

文部科学省では、2017年11月から Society 5.0 時代に必要な資質・能力と求められる人材についての議論が始まり、同年12月から「Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会」が開催された。18年6月にはそれまでの議論を踏まえて、Society 5.0における学びのあり方や求める人材像、今後の教育政策の方向性等がまとめられた(図1)。そこでは、AIが発達して定型的な仕事を担うため、人間には、現実世界に合わせた意味づけをしたり、板挟みや想定外と向き合ったり、責任を持って遂行したりといった、「人間の強み」を発揮することが求められるとされている。また、Society 5.0における学校のあり方として、生徒の個別



文部科学省初等中等教育局  
企画官(併・学びの先端技術  
活用推進室長)  
**桐生 崇**  
きりゆう・たかし



文部科学省初等中等教育局  
参事官(高等学校担当)  
**田村 真一**  
たむら・しんいち

の学びの状況に応じた支援や、異年齢・異学年集団での協働学習、地域や家庭などの連携が予想されている(図2)。

Society 5.0を生き抜くために必要な資質・能力は、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力と合致するものだ。また、P.3の「Society 5.0にかかわる各所からの発信」で示した通り、文部科学省だけでなく、経済産業省、そして政府与党などでも、技術革新を伴う新しい時代に求められる教育についての議論が積み重ねられてきた。19年5月には、安倍内閣の私的諮問機関である教育再生実行会議においても、Society 5.0やグローバル化に対応し、活躍できる人材育成という観点から、「技術の進展に応じた教育の革新」及び「新時代に対応した高等学校改革」をテーマとした提言が取りまとめられた(P.8図3)。今後、中央教育審議会(以下、中教審)等で制度化に向けた検討が進められていく。

## スクールポリシーに基づく 特色ある教育が求められる

文部科学省初等中等教育局の田

村真一参事官(高等学校担当)は、Society 5.0に向けて取り組むべき政策の方向性(図1下段右側)の1つで、特に高校教育にかかわるものとして、文理分断からの脱却を挙げた。それを具体化する先駆的な取り組みとして「Society 5.0に向けたリーディング・プロジェクト」に触れ、文理両方を学ぶ高大接続改革や地域人材の育成の推進を掲げた。

「高校生の7割が学ぶ普通科では、大学入試に合わせて多くの生徒が2年生以降、文系・理系に分かれます。しかし、一部の教科を勉強するだけでは、Society 5.0で求められる資質・能力は育まれないでしょう。様々な学問分野において必要となる、数学や理科、地理歴史・公民科の基礎的分野を必修とする新学習指導要領を確実に習得させるとともに、微分方程式や線形代数といったより高度な内容を学びたい生徒のための条件整備などを行い、文理両方を学ぶ人材を育成することが大切です。高度かつ多様な内容を、個人の興味・特性等に応じて履修可能とする学習プログラム・コースをW・L・W(ワイド・ラーニング)・コンソーシアムとして創設することなどはそ

\*プロフィールは2019年6月時点のものです。

図1 Society 5.0の社会像・求められる人材像、学びのあり方と取り組むべき政策の方向性

Society 5.0の社会像

AI技術の発達

→ 定型業務や数値的に表現可能な業務は、AI技術により代替が可能に  
→ 産業の変化、働き方の変化

日本の課題

AIに関する研究開発に人材が不足、少子高齢化、つなごりの希薄化、自然体験の機会の減少

人間の強み

現実世界を理解し意味づけできる感性、倫理観、板挟みや想定外と向き合い調整する力、責任を持って遂行する力

Society 5.0における学びのあり方、求められる人材像 / Society 5.0に向けて取り組むべき政策の方向性

求められる人材像、  
学びのあり方

現状・課題等

取り組むべき政策の  
方向性

学びのあり方  
の变革

共通して  
求められる  
力の育成

新たな社会  
を牽引する  
人材の育成

【すべての学びの段階】

・ 基盤的な学力を確実に定着させながら、他者と協働しつつ自ら考え抜く自立した学びが不十分。

【小・中学校】

- ・ OECD/PISAでも高い到達水準。
- ・ 他方で、家庭環境、情報環境の変化の中で、文章や情報の意味を理解し思考する読解力に課題との指摘。
- ・ 貧困の連鎖を断ち切り、すべての子どもたちに Society 5.0 時代に求められる基盤的な力を確実に習得させる必要。

【高等学校】

- ・ 普通科7割(80万人)・専門学科等3割(30万人)。
- ・ 普通科は文系7割(50万人)といった実態があり、多くの生徒は第2学年以降、文系・理系に分かれ、特定の教科については十分に学習しない傾向。
- ※例えば普通科全体のうち「物理」履修者は2割(14万人)
- ・ 学年にとらわれない多様な学び(高等教育機関や産業界等との連携)の可能性。

【高等学校卒業から社会人】

- ・ 四年制大学は、人・社系5割(30万人)、理工系2割(12万人)、保健系1割、教育・芸術系等2割。
- ※諸外国は、理工系にドイツ約4割、フィンランド・韓国等約3割。
- ・ 教育におけるSTEAMやデザイン思考の必要性。
- ※ STEAM = Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics

I 「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供

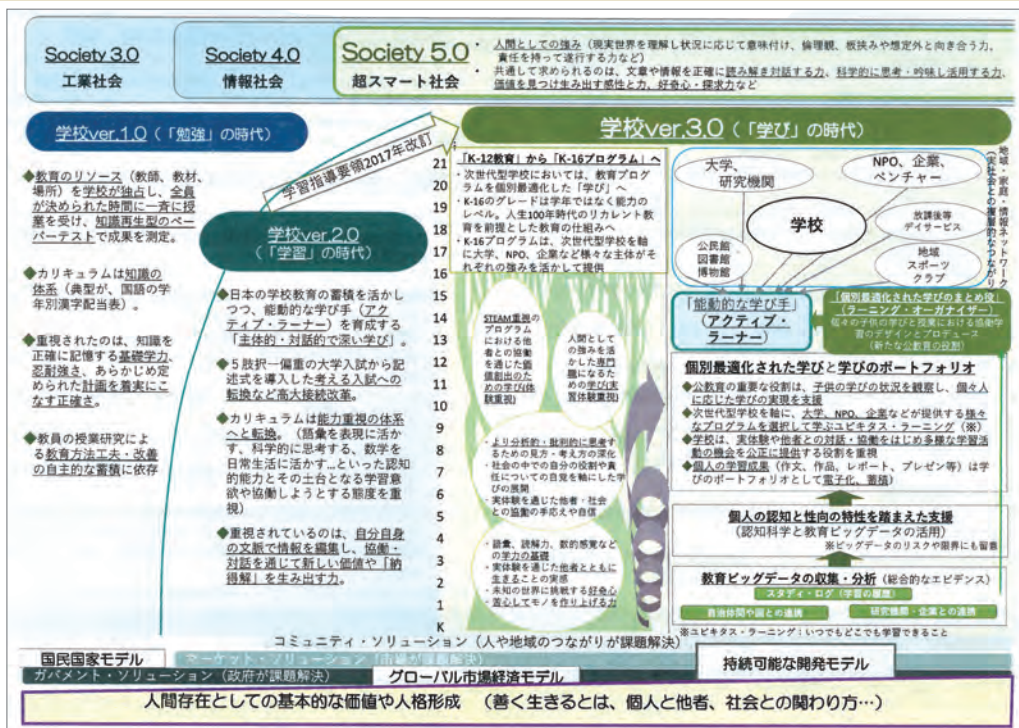
II 基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力をすべての児童・生徒が習得

III 文理分断からの脱却

- ⇒リーディング・プロジェクト(先駆的な取り組みとして)
- ・ 文理両方を学ぶ高大接続改革:WWL(ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアムの創設
- ・ 地域の良さを学びコミュニティを支える人材の育成:地域との協働による高等学校教育改革の推進

\* 文部科学省「Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」を基に編集部で作成。

図2 Society 5.0に向けた学校 ver.3.0



Society 5.0の学校のあり方として示された学校 ver.3.0では、人間としての強みを発揮できる学校集団の中で、生徒が自身の学力や興味・関心に応じて「個別最適化」された「学び」を展開する学校像が描かれている。

\* 文部科学省「Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」よりそのまま掲載。

1. 技術の進展に応じた教育の革新

背景

- 技術革新は、社会構造全体までも変えるインパクト。教育においても、一人ひとりの能力等に応じて公正に個別最適化された学びや、場所や時間に制約されずに主体的に学び続けることができる環境を実現し得るもの。教育内容、教科書、教員養成など、全般的な対応が急務。
- 一方、学校のICT環境は脆弱であり、危機的な状況。ICTは教育の「マストアイテム」であるとの認識を関係者が共有し、整備の加速化が急務。

主な提言事項

- ① Society 5.0 で求められる力と教育のあり方 ② 教師のあり方や外部人材の活用
- ③ 新たな学びとそれに対応した教材の充実 ④ 学校における働き方改革
- ⑤ AI 時代を担う人材育成としての高等教育のあり方 ⑥ 特別な配慮が必要な児童・生徒の状況に応じた支援の充実 ⑦ 新たな学びの基盤となる環境整備、EBPM (エビデンスに基づく政策立案) の推進 ⑧ 生涯を通じた学びの機会の整備の推進 ⑨ 教育現場と企業等の連携・協働

2. 新時代に対応した高等学校改革

背景

- 高等学校は中学校を卒業したほぼすべての生徒が進学。一方、高校生の能力、適性、興味・関心、進路等が多様化。高等学校が対応すべき教育上の課題は複雑化。
- 少子高齢化、就業構造の変化、グローバル化、AI やIoT などの技術革新の急速な進展による Society 5.0 の到来など、高等学校を取り巻く状況は激変。
- これからの高等学校においては、生徒一人ひとりが能動的に学ぶ姿勢を身につけさせるとともに、文理両方をバランスよく学ぶこと等を通じ、Society 5.0 をたくましく生きる力を育成。

主な提言事項

- ① 学科のあり方 ② 高等学校の教育内容、教科書のあり方 ③ 定時制・通信制課程のあり方
- ④ 教師の養成・研修・免許のあり方 ⑤ 地域や大学等との連携のあり方 ⑥ 中高・高大の接続
- ⑦ 特別な配慮が必要な生徒への対応 ⑧ 少子化への対応

\*教育再生実行会議 第十一次提言 概要「技術の進展に応じた教育の革新、新時代に対応した高等学校改革について」を基に編集部で作成

の一環です」(田村参事官)

新学習指導要領では、社会に開かれた教育課程の実現が求められているが、高校生が実社会の課題に取り組むためには、地域との連携も不可欠だ。だが、現実には、高校の地域連携は学校によって大きく状況が異

なり、小学校や中学校に比べると総体として十分とは言えない。

「すべての高校には今後、スクーリングを明確に定めて、その実現のために地域や海外と連携したり、学校設定科目を検討したりしながら教育課程の改革を進めていくこ

とが求められるでしょう。教育再生実行会議で議論されてきた普通科改革も、時代の変化に対応できる生徒を育てるために、文理に分けず、画一的なカリキュラムから脱していくという問題意識が根底にあると理解しています。今後は、校長のリーダーシップの下、スクーリングを打ち出しながら学校改革を進めていくような制度改革も、中教審で議論されていくことになるでしょう」(田村参事官)

新学習指導要領で目指す教育を  
先端技術を活用して実現

Society 5.0 に向けて、教育に先端技術を活用するための環境整備の方向性も示されている。それが19年6月に文部科学省が公表した「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」だ(図4)。文部科学省初等中等教育局の桐生崇企画官(併・学びの先端技術活用推進室長)は、「多様な子どもたちの『誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び』を実現する上で、ICTを基盤とした先端技術や教育ビッグデータの効果的な活用に

大きな可能性がある」と語る。

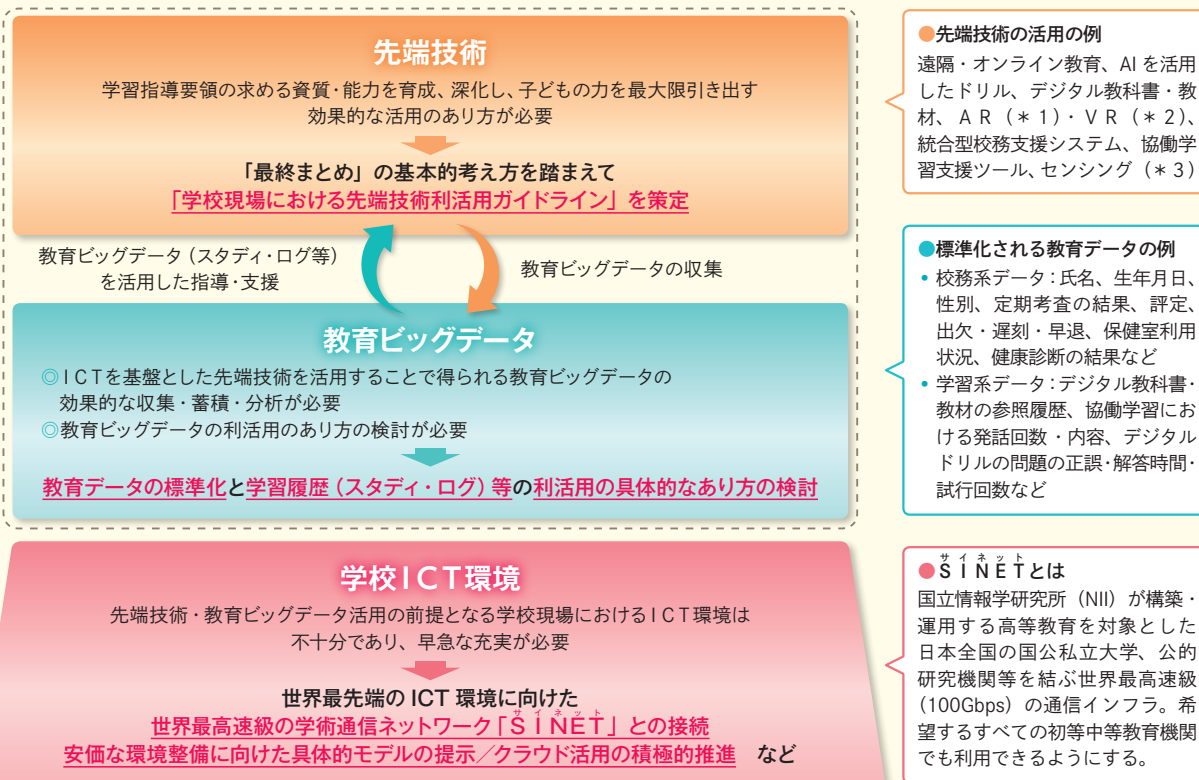
「遠隔技術を活用した大学や海外との連携授業、意見・回答の即時共有を通じた効果的な協働学習など、先端技術の活用で生徒の学びは豊かになります。また、定型的作業をAIに任せることで、先生方の業務負担も軽減され、教師ではないとできないことにより時間をかけていただけるようになります」(桐生企画官)

2020年代には、教育ビッグデータの活用も進むと予想される。その土台になるのが、教育データの標準化だ。学習内容と教材に共通のコードが設定されると、生徒が学習でつまづいた時などに、関連教材などが瞬時に取り出せるようになる。

「教育ビッグデータの解析によって、『ここですまづく時は、この単元が理解できていなかったケースが多い』などと、これまでベテランの教師の知見であった学習プロセスが可視化され、多くの先生方の共有知になるでしょう」(桐生企画官)

ICT環境の整備も進む。国立情報学研究所の通信インフラを、希望する初等中等教育機関が利用できるようにすることで、大容量データのやりとりが円滑になり、大画面を

図4 先端技術・教育ビッグデータの効果的な活用とICT環境の整備について取り組むべき方策（全体像）



\*文部科学省「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」を基に編集部で作成。

図5 「新しい時代の初等中等教育の在り方について（諮問）」での審議事項

- 1. 新時代に対応した義務教育のあり方**
  - 基礎的読解力などの基盤的な学力の確実な定着に向けた方策
  - 義務教育9年間を見通した児童・生徒の発達段階に応じた学級担任制と教科担任制のあり方や、習熟度別指導のあり方など今後の指導体制のあり方
  - 年間授業時数や標準的な授業時間等のあり方を含む教育課程のあり方
  - 障がいのある者を含む特別な配慮を要する児童・生徒に対する指導及び支援のあり方など、児童・生徒一人ひとりの能力・適性等に応じた指導のあり方 等
- 2. 新時代に対応した高等学校教育のあり方**
  - 普通科改革など各学科のあり方
  - 文系・理系にかかわらず様々な科目を学ぶことや、STEAM教育の推進
  - 時代の変化・役割の変化に応じた定時制・通信制課程のあり方
  - 地域社会や高等教育機関との協働による教育のあり方 等
- 3. 増加する外国人児童・生徒等への教育のあり方**
  - 外国人児童・生徒等の就学機会の確保、教育相談等の包括的支援のあり方
  - 公立学校における外国人児童・生徒等に対する指導体制の確保
  - 日本の生活や文化に関する教育、母語の指導、異文化理解や多文化共生の考え方に基づく教育のあり方 等
- 4. これからの時代に応じた教師のあり方や教育環境の整備等**
  - 児童・生徒等に求められる資質・能力を育成することができる教師のあり方
  - 義務教育9年間を学級担任制を重視する段階と教科担任制を重視する段階に捉え直すことのできる教職員配置や教員免許制度のあり方
  - 教員養成：免許・採用・研修・勤務環境・人事計画等のあり方
  - 免許更新講習と研修等の位置づけのあり方など教員免許更新制の実質化
  - 多様な背景を持つ人材によって教職員組織を構成できるようにするための免許制度や教員の養成・採用・研修・勤務環境のあり方
  - 特別な配慮を要する児童・生徒等への指導など特定の課題に関する教師の専門性向上のための仕組みの構築
  - 幼児教育の無償化を踏まえた幼児教育の質の向上
  - 義務教育をすべての児童・生徒等に実質的に保障するための方策
  - いじめの重大事態、虐待事案に適切に対応するための方策
  - 学校の小規模化を踏まえた自治体間の連携等を含めた学校運営のあり方
  - 教職員や専門的人材の配置、ICT環境や先端技術の活用を含む条件整備のあり方 等

\*文部科学省「新しい時代の初等中等教育の在り方について（諮問）」を基に編集部で作成。

使った遠隔授業などがこれまでよりも格段に実施しやすくなるだろう。以上の各種提言で示された課題は、2019年4月に中教審に諮問された「新しい時代の初等中等教育の在り方について」（図5）に集約されるような形で今後審議されていく。その答申は20年末に予定され、先端技術を活用した教育のあり方も盛り込まれるはずだ。

「新学習指導要領公示後に発信された各種提言は、新たな教育の目的を示したものでなく、いずれも高大接続改革や新学習指導要領が指す新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目的とするものです。Society 5.0という社会の変化を踏まえ、それにかかる課題を明確化し、それらに取り組む上での具体的な方策を考えるために各種提言が示されたものであるという理解の下、学校現場には新学習指導要領を確実に実行していただきたいと考えています」（田村参事官）

\*1 Augmented Reality（拡張現実）。現実世界にコンピューターで生成した仮想現実を拡張（反映）させる技術。  
\*2 Virtual Reality（仮想現実）。コンピューターで現実似た仮想世界を生成する技術。  
\*3 センサーを活用して、モノに触れることなく量や音、光、温度などを計測したり、識別したりする技術。

# 文理分断したカリキュラムを転換し、生徒の学びを広げ、高めていく

文部科学省が取り組むべき政策の方向性として示した3つの中で、高校教育に深くかわるのが、「Ⅲ 文理分断からの脱却」だ（P.7図1）。多様かつ複雑な社会課題に向き合い、新たな社会を牽引するためには、文理両方の学びが必要不可欠と考えられる。そうした学びの実現を支援するため、2019年度、文部科学省は先駆的な施策「Society 5.0に向けたリーディング・プロジェクト」として、2つの事業を始めた。

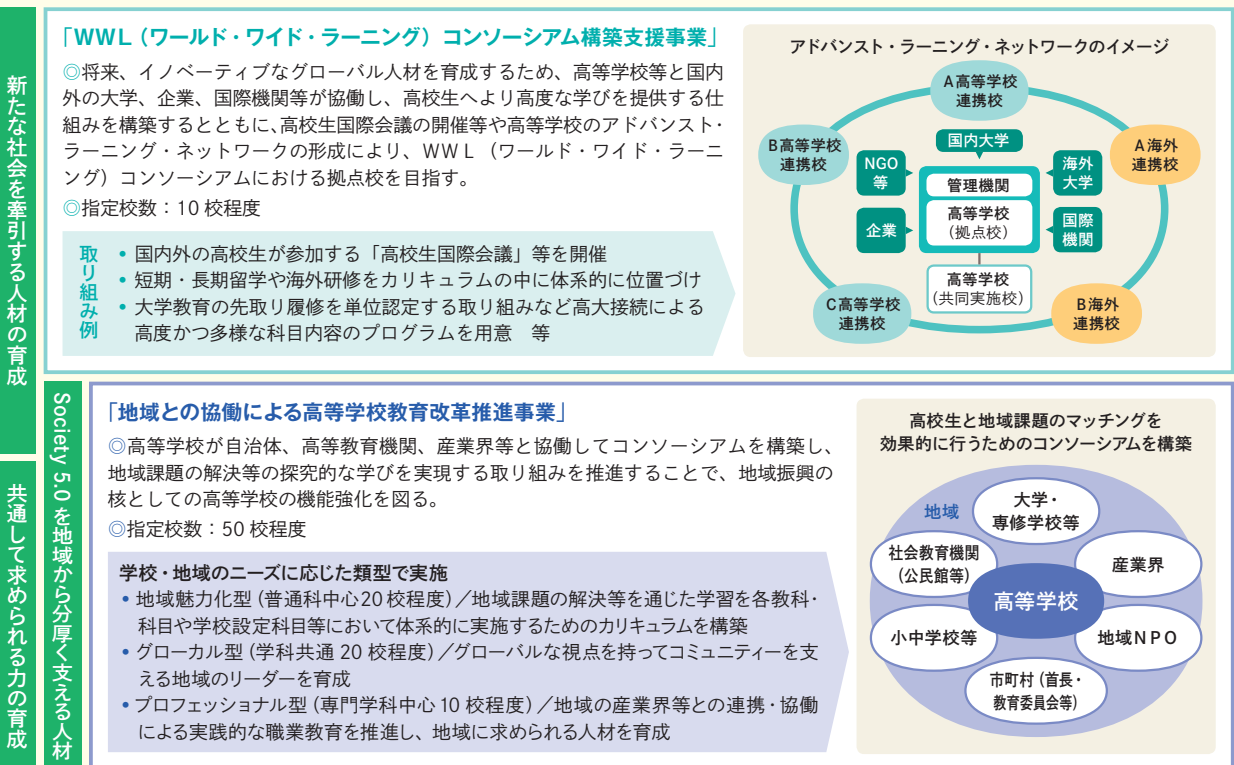
Society 5.0における学びでは、文理両方の学びやSTEAM教育を推進し、より高度な学びを可能とする環境を整備するとともに、Society 5.0を地域から支える人材を育成するために地域と連携することが必要だと考えられる。そうした高校教育の実現に向け、2019年度、文部科学省は2つの事業を始めた（図1）。

「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」では、高校を管轄する教育委員会や大学を、事業実施の責任を負う管理機関として指定。他機関との連携の構築、事業継続のための資金面での支援が期待されている。また、SGH等での取り組みの実績を活用することが想定されている。

Society 5.0を地域から支える人材の育成を目指す「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」は、「地域の、地域による、地域のための高校」の構築がねらいと言える。

次ページからは、その2つの事業を推進する高校の事例から、文理両方の学びなど、Society 5.0に向けた学びを構築するためのヒントを探る。

図1 「Society 5.0に向けたリーディング・プロジェクト」



\*文部科学省「2019年度予算（案）主要事項」を基に編集部で作成。

先進事例 1 「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」幹事校(\*1)

埼玉県・国立筑波大学附属坂戸高校

国内外のフィールドワークを軸としたカリキュラムで、国際社会の一員としての自覚を持たせる

埼玉県・国立筑波大学附属坂戸高校は、5年間にわたるSGHでの取り組みを基に、SDGs(\*2)を研究テーマとした国内外でのフィールドワークなどを展開。生徒に国際社会の一員としての自覚を持たせるとともに、多様な人々と協働して問題解決に取り組む経験させ、持続可能な国際社会をつくる人材の育成を目指している。

日常生活に密接にかかわるSDGsを研究テーマに

埼玉県・国立筑波大学附属坂戸高校は、2014年度から5年間、SGHの指定を受けて、「持続可能なASEAN社会を創るグローバル人材の育成」を目標に掲げ、国内外でのフィールドワークを軸とした探究学習や、海外の高校生を招いた国際シンポジウムなどを行ってきた。

総合学科である同校は、社会課題を研究テーマとした課題研究活動や、インドネシアの高校と連携した国際教育を進めていた。さらに、SGHでは、生徒に自分も世界の様な課題にかかわっているという「当

事者性」を持たせることを重視し、

国内外の課題に取り組むフィールドワークを軸としたカリキュラム開発を進めた。当事者性を重視する理由について、深澤孝之副校長はこう説明する。

「総合学科では、1年次の『産業社会と人間』で自己理解を深めます。しかし、それだけで将来を考えさせると、生徒は自分の経験を基にした興味・関心だけで職業や学問を選びがちでした。そこで、社会の一員としての自分に気づかせた上で、将来に向き合わせようと思いました」

フィールドワークを軸としたのは、学校外の学びを用意するのも学校の役目だと捉えたからだ。進路

指導部で主幹教諭の藤原亮治先生は語る。

「グローバル化が進み、今後、生徒が生きていく場所は日本にとどまらないでしょう。生徒のコミュニケーションを学校内にとどめず、外へと広げていかなければなりません」

そうしてSGHでの取り組みで構築した教育活動を整理し、発展させようと、2019年度、文部科学省の「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」(以下、WWL事業)に申請し、幹事校の指定を受けた。

WWL事業での目標は、「国際フィールドワークを通して持続可能な国際社会を創る人材の育成」とし

埼玉県・国立筑波大学附属坂戸高校  
 ◎1994年度、全国初となる総合学科を開設。2011年、ユネスコスクールに加盟。14年度から、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」の指定校。17年度、国際バカロレアの認定を受け、18年度入学生から、2・3年次を対象とした「Bディプロマプログラム」を導入した。  
 ◎設立 1946(昭和21)年  
 ◎形態 全日制/総合学科/共学  
 ◎生徒数 1学年約160人  
 ◎2019年度入試合格実績(現役のみ)  
 国立大は、福島大、東京海洋大、長崎大、国際教養大、埼玉県立大、首都大学東京に7人が合格。私立大は、青山学院大、津田塾大、東京理科大学、日本大、法政大、明治大、立教大、近畿大などに延べ104人が合格。  
 ◎URL <http://www.sakado-s-tsukuba.ac.jp/>



副校長  
 深澤孝之  
 ふかざわ たかし  
 教職歴25年。同校に赴任して22年目。



主幹教諭(研究部)  
 建元喜寿  
 たもと よしかず  
 教職歴21年。同校に赴任して19年目。農業科。



主幹教諭(進路指導部)  
 藤原亮治  
 ふじはら りょういち  
 教職歴18年。同校に赴任して7年目。保健体育科。

た。そして、探究学習の共通テーマは、日本の達成度が低いと評価されているSDGsの目標(\*3)の中から、同校が設置する教科・科目に関連のある5つを中心とした。SD

\*1 事業に参加する拠点校のうち、事業全体の情報共有及び成果普及のための取り組みを主催・実施する学校のこと。 \*2 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。 \*3 持続可能な開発ソリューション・ネットワーク(SDSN)とドイツのベルテルスマン財団は、SDGsが発効された2016年から毎年、国別の達成度をランキングで発表している。2019年のランキングでは、日本は162か国中15位だった。

Gsの目標はいずれも日常生活に密接にかかわるため、生徒は当事者性を持って国際社会の課題を捉えやすいと、研究部で主幹教諭の建元喜寿先生は語る。

「総合学科の特徴は、自分で科目を選択できることです。当事者性を持つからこそ、『問題解決に必要な知識は何か』という視点で学びを捉えるようになり、得意・不得意や文理に関係なく、自分に必要な科目を選択していきます。また、SDGsの内容は分かりやすいため、教科の授業で自身の専門性に結びつけて話す教師が増えました。そうした面でも、生徒は国際課題を当事者性を持って捉えやすくなりました」

### 生徒が課題に気づく環境を できるだけ多く設ける

3年間のカリキュラムは、SGHでの実績を基に、1年次の「産業社会と人間」「グローバルライフ」、2年次の「T-GAP」、3年次の「卒業研究」を柱とした(図2)。1年次では、生徒に日常生活と社会課題の結びつきを考えさせ、国際社会の一員としての自覚を促す。2年次で

は、生徒たちに課題を設定させ、問題解決に取り組むグループワークを行い、3年次では、個人で課題を設定し、探究学習に取り組む(図3)。加えて、1年次では日本の農村部でのフィールドワークを新たに行うことにした。

「社会課題には、国内外の地域や分野にかかわらず共通する課題もあれば、固有の課題もあります。1. 2年次には、課題を自分事と捉えられる環境を与えらるとともに、課題を発見できるスキルを磨く場をできるだけ多く設けようと思いました」(藤原先生)

生徒が社会課題に気づくためには、教師の働きかけも重要だ。

「『グローバルライフ』では、例えば、菓子に使われるパーム油が、インドネシアやマレーシアの森林を伐採した農地で生産されていることを説明し、日常生活がどんな問題に結びついているのか、生徒に問いかけます。海外が抱えている課題もぐっとう自分に引き寄せて、考えられるようになっていきます」(建元先生)

同校は総合学科であることから、農業や工業など実技系の科目が設けられている。それらの授業でも、教

図2 3年間のカリキュラム

育成する人材像 SDGsの課題解決、広い視野と専門性、新たな分野同士の融合によりイノベーションを起こす、世界の架け橋



\*学校資料を基に編集部で作成。

### お知らせ

11月7日(木)、「第8回高校生国際ESDシンポジウム」が筑波大学東京キャンパスにて開催予定。9月初旬頃、筑波大学附属坂戸高校のホームページで受付開始。2020年2月14日(金)15日(土)、「第23回総合学科研究大会」が筑波大学附属坂戸高校にて開催予定。詳しくは、[筑坂](#) [検索](#)

図3 WWL事業に関する主な科目、及び活動

	科目名・活動名	概要
1年次	グローバルライフ (「家庭基礎」を特例申請。必修科目)	「調理」「被服」「共生」「日常生活とグローバル課題」の4分野について、家庭科、国語科、農業科など複数の教師が担当。教師がそれぞれの教科・科目の専門性と社会課題を関連づけた講義をし、生徒は、教師が提示した課題について、グループで調べ学習や話し合いなどを行う。
	国内フィールドワーク (「産業社会と人間」で実施。全員参加)	7月、新潟県阿賀町で行う3泊4日の体験学習。民泊しながら現地の中高中生との交流、職場体験、地域貢献活動などを実施。
	アセアンフィールドワーク (全員参加)	インドネシア、タイ、シンガポール・マレーシアの3コースの中から、自分の関心や希望進路に応じて1つを選択。現地の高校生との交流、探究学習、ホームステイなどを行う。
2年次	T-GAP (つくさかグローバルアクションプログラム) (必修科目)	興味・関心が同じ分野の4~6人でグループを組み、自分たちで課題を設定して、高校生としてできる解決策を考え、実行する。大学や企業、自治体など外部機関と連携しながら、企画立案や活動を進める。
	国際フィールドワーク (希望者から7人を選抜)	夏季休業中に約3週間、インドネシアを訪れ、現地の2つの高校の生徒と混合した3つのグループとなり、それぞれ環境教育、地域開発、エコツーリズムをテーマにフィールドワークを行う。
	連携校合同国際フィールドワーク (参加者を選抜予定)	オーストラリア等で、事業連携校の生徒も含め、現地の高校生と協働でフィールドワークを行う。
3年次	卒業研究 (必修科目)	個人でテーマを設定し、調査やフィールドワークを行い、その結果をまとめて発表。テーマに応じて、筑波大学などの大学教員から指導を受ける。10月に1・2年生も参加する卒業研究発表会を実施。

\* 学校資料を基に編集部で作成。

師は生徒に当事者性を持たせる工夫をしていると、藤原先生は語る。「授業で野菜や製品を作る難しさや苦労を経験した生徒は、生産者や流通のことまで考えられるようになります。また、私が担当する保健の授業では、労働と健康、生活習慣など、教科に関連する社会課題をテーマに探究学習をさせています。それ

らの学びの積み重ねが、2年次以降の探究学習での課題設定につながっていきます」

### 異なるスキルを持つ生徒が1つの目標の下に協働

同校では、2年次から生徒が自分の関心に応じて履修科目を決める

が、そうして取得した知識・技能が異なることも、探究学習に好影響をもたらしている。

「『T-GAP』は、異なるスキルを持つ生徒が1つの目標の下に集まります。生徒同士で意見がぶつかり合いながらも、各自の強みを生かして協働し、1つの物事を達成させる経験は、国籍や文化が多様な人が集う国際社会で活躍するために生きる力となるでしょう」(深澤副校長)

国内外でのフィールドワークや国際シンポジウムなども、生徒の当事者性、実行力を育てている。中でも、インドネシアで行う「国際フィールドワーク」は、解決策の提案にとどめず、計画の実行までをプログラムに組み込み、そのために滞在期間を3週間としている。

「本校と現地の高校2校の生徒による混合チームで、課題設定、調査、計画立案、実行を、すべて生徒たちで行います。生徒が将来直面するであろう、海外の人との協働を経験する貴重な機会となっています。インドネシアの高校生にとっても日本人と協働する経験は重要であり、両者のニーズに合致しているからこそ、活動が継続しています」(建元先生)

### 将来像を明確に持ち、積極的に学びに向かう生徒たち

そうした一連の取り組みで、生徒は、学びたいことや将来像を明確に持つようになり、学習により意欲的になっている。各大学のオープンキャンパスに足繁く通い、自分の希望に合った大学かを確認して志望校を決めていく。同校の大学進学者の約8割が、探究学習などでの実績を生かし、AO・推薦入試で進学する。

「大学入学後も学びに積極的で、教授に直談判して1年生からゼミに入った卒業生や海外でのインターンに参加した卒業生もいます。進学生先の大学からは、卒業生がゼミや研究室を引っ張るリーダー的存在になっていると評価いただいています。また、ソーシャルアクション(\*4)を起こす生徒が増えました。そうした生徒の成長を大学に積極的に発信したいと考えています」(藤原先生)

加えて、英語の資格・検定試験の受験者数も増加。毎年3~5人がアメリカやインドネシアなどに1年間の長期留学に行く。

「海外からの短期的な訪問者も積

\* 4 世論を喚起するなどして立法・行政機関に働きかけ、政策・制度の改善を目指す組織行動。

極的に受け入れており、生徒は頻繁に海外の人と交流しています。筑波大学が目標に掲げる『国際性の日常化』が実現しています」（深澤副校長）

## 高大連携を生かし、 大学や海外へと学びを拡大

今後は、筑波大学と連携し、大学教育の先取り履修の体制を整えていく。具体的には、SDGs関連の学位プログラム（\*5）の一部について単位を付与できるよう調整中だ。また、卒業研究において、筑波大学の教員から指導を受けられる機会も増やす。

筑波大学のネットワークを活用し、ASEAN以外の国にも連携先を拡大していく。そのため、相手国と関係を構築するスキルやマインドを持てるよう教員研修を計画 중이다。現在、主担当の建元先生は、08年度から2年間、青年海外協力隊の現職教員特別参加制度でインドネシアに派遣された経験を生かして、同国との関係構築を担ってきた。

「本校も海外の連携校も基本的に異動がなかったため、同じ担当者同士で信頼を深めてきました。本事業

名にもある『コンソーシアム』は、一緒に学び合えるパートナーの関係だと思えます。一方的に依頼するのではなく、両者がともに学びのある事業とすることが大切です」（建元先生）  
さらに、ほかのSGH指定校や海

外の連携校と共同でシンポジウムも開催し、今後も積極的に研究の成果を国内外に発信していく。  
「生徒は、5年後、10年後に社会を築いていく人材です。生徒自身がそれに気づき、自分はどうしたいの

か、大学で何を学ぶのかを考えられるような高校教育を今後も展開していきます。それが、高大接続にも重要な役割を果たし、ひいては持続可能な社会の構築につながると考えています」（深澤副校長）

### 先進事例

#### 2

### 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」指定校

## 長野県飯田OIDE長姫高校

# 「地域に出て、地域を教材にして学ぶ」「地域人教育」で、社会を形成する力を育む

2013年度に2校が統合して開校した長野県飯田OIDE長姫高校では、統合前の飯田長姫高校で商業科が始めた地域連携教育「地域人教育」を推進している。行政が仲介して地域と学校とを結び、フィールドワークを中心とした探究学習を展開。社会を形成する力を育み、地域を支える人材を育成している。

### 高校・大学・行政の三位一体で 地域連携教育に取り組み

「まちじゅうが教室」をキャッチコピーに掲げ、社会の変化に対応できる「人財」の育成を目的とした「地域人教育」を、長野県飯田長姫高校の商業科が導入したのは2012年度のことだ。そのきっかけは、

11年度に同校に赴任した浅井勝巳先生（現・長野県白馬高校）が、前任教での地域連携教育の経験を生かして、自分が担当するクラスの「課題研究」の授業で、生徒と地域に向き、高齢者などのいわゆる「買い物弱者」の救済のためのリヤカー販売を始めたことにある。その様子を見た有賀浩先生（現・長野県諏訪実業

高校教頭）が、活動を商業科全体で行うことを提案した。

「商業教育は、実務教育であり、社会との連動性が強く求められます。ところが、就職に有利だからと資格取得を偏重する風潮がありました。その点に疑問を感じていた時に、浅井先生の授業を拝見しました。生徒が地域に出て、視野を広げることで、

\*5 学士・修士・博士といった学位の水準と養成する人材像に応じて達成すべき能力を明示し、その能力を学生が修得できるように体系的に設計された教育プログラムのこと。



長野県白馬高校  
前・飯田OIDE長姫高校  
**浅井勝巳** あさい・かつみ  
教職歴16年。同校に赴任して3年目。国際観光科3年担任。



長野県諏訪実業高校教頭  
前・飯田OIDE長姫高校  
**有賀 浩** あるが・ひろし  
教職歴30年。同校に赴任して2年目。



長野県飯田OIDE長姫高校  
地域人教育担当  
**國松秋穂** くままつ・あきほ  
教職歴16年。同校に赴任して7年目。商業科主任。

**長野県飯田OIDE長姫高校**

◎2013年度、飯田長姫高校と飯田工業高校が統合して開校した県内初の総合技術高校。校名のOIDEはOriginality（独創）、Imagination（想像）、Device（工夫）、Effort（努力）の頭文字。

◎設立 2013（平成25）年

◎形態 全日制・定時制／機械工学科・電子機械工学科・電気電子工学科・社会基盤工学科・建築学科・商業科（以上、全日制）、普通科・基礎工学科（以上、定時制）／共学

◎生徒数 1学年約280人（全日制）

◎2019年度進路実績（全日制、現役のみ）  
4年制大は、名古屋工業大、高崎経済大、日本大、金沢工業大、松本大などに43人が合格。短大専門学校進学76人。就職149人。

◎URL <http://www.nagano-c.ed.jp/oidesa/>

社会で求められる資質・能力を育む。それこそが本校が行うべき教育だと考えました」（有賀先生）

有賀先生は、地域連携の共同研究で親交のあった松本大学に協力を依頼。12年度、飯田長姫高校・松本大学・

飯田市がパートナーシップ協定を結び、地域全体で生徒を育む教育に着手した。当初は、各地域の公民館の協力を得ながらリヤカー販売をしたり、地域行事に参加したりした。13年度に飯田長姫高校が飯田工業高校と統合して飯田OIDE長姫高校となった後も、3者のパートナーシップ協定は継続。連携先の企業や商店街を増やしてフィールドワークを拡充させるとともに、「地域人教育」を学校設定科目として独立させ、商業科1学年80人の生徒全員が、3年間を通して系統的に地域連携に取り組むカリキュラムを整備した。

そして、19年度、取り組みをさらに発展させようと、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」プロフェッショナル型に申請し、指定を受けた。

**学びに向かう力の育成に  
地域は最適な教育の場**

地域連携が生徒に与える影響を、有賀先生はこう語る。

「高校時代は、人間形成において大変重要な時期です。生徒に自分を見つめさせて、将来の生き方を深く

考えさせたいのですが、同年齢の集団で多くの時間を過ごし、接する大人は教師だけといった環境では、生徒の視野は広がりません。そこで、地域の方々に人生の先輩として生き方や地域の課題などを示していただくことで、社会への関心を深め、自分の将来をしっかり考えられるようになってほしいと考えました」

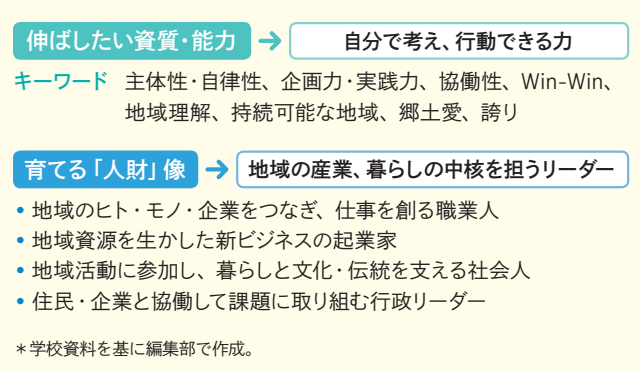
地域人教育担当の國松秋穂先生は、非認知能力（\*6）の育成においても地域連携は有効だと語る。

「私は、非認知能力は『社会を形成する力』だと捉えています。地域連携によって、世代の異なる様々な職業に就く人、社会的弱者、外国人などと協働することで、生徒は社会と向き合い、かかわる術を体感的に学んでいきます。加えて、資質・能力の3つの柱の1つである『学びに向かう力』を育成する上で、身近であり、課題が山積している『地域』は最適な教育の場でした」

同校の商業科では、卒業生の約半数が就職し、その多くが地元に残る。そのため、当初は地域を担う人材の育成が目的にあったが、今はそれにとどまらないう、國松先生は言う。

「自分が住む地域を教材にして学

図4 「地域人教育」で育成を目指す資質・能力



ぶことで、社会や世界を見る目を養い、どの地域においても課題を発見し、問題を解決する力を養うことが、『地域人教育』の目的です（図4）」

**事前・事後活動にも時間を  
かけ、学びをメタ認知させる**

3年間のカリキュラムを見ていく。その特徴は、講義とフィールドワークをうまく融合させている点にある。1年次は、探究学習に必要な知識や技能などを学ぶ比重を高く

\* 6 忍耐力や協調性、意欲といった、一般的な学力テストなどでは測れない能力のこと。ほかに、自己抑制、目標への情熱、社会性、敬意、思いやり、自尊心、楽観性、自信などが挙げられる。

図5 「地域人教育」の3年間のカリキュラム



し、2年次から年間を通して地域行事に参加、3年次にはグループごとにテーマを設定し、通年でフィールドワークを実施する(図5)。

「1年次に探究学習に必要な知識を身につけて、地域課題を把握し、目的意識を醸成しておくことで、地域に出た際に、生徒の行動力や主体性がすぐに発揮されます(國松先生)」

自分の経験を内省し、成果と課題を客観的に把握させるため、フィールドワークの事前準備や事後の振り返りも重視。フィールドワークの前には、必ず地域の実情や活動に関するデータを調べて、計画を立てさせる。活動後は、住民の話聞いた上で活動内容を振り返り、活動をよりよくするための提言をレポートや発表資料にまとめさせる(図6)。

### 生徒の成長が 教師や地域の意識を変える

今は軌道に乗った「地域人教育」だが、初めからすんなり推進できたわけではない。11年度に、商業科全体で地域連携教育に取り組む方針を伝えた時、多くの教師がその利点を見いだせずに戸惑っていた。そこで、有賀先生は、「生徒の姿を一度見てほしい」と声をかけ、教師にリヤカー販売に同行してもらった。すると、生徒が地域の人にとったら喜ばれるかと工夫する姿を見て、地域連携の効果を実感し、「地域人教育」に率先して取り組むようになった。

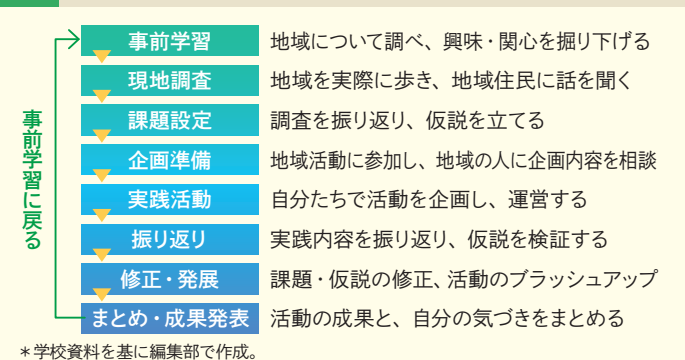
「生徒を社会で立派に通用する人材に育てたいという思いを、どの教師も持っています。そうした人材が備える資質・能力を生徒が身につけられる活動だと実感できれば、自分の負担が多少増えても、喜んで協力していただけるのです」(有賀先生)

また、連携先の地域の理解を深めることも課題だった。生徒の活動を「無償の労働力」として受け取る住民もいたからだ。活動する生徒は毎年変わるため、その都度、活動内容を教えることに負担感も見られた。

「地域にもメリットがなければ、学校に協力する意味を見いだせません。そこで、企業や地域が、それぞれの理念に沿った活動を行う中で、学校と地域と一緒に未来の地域を担う人材を育てているという意識を持つるよう心がけました」(浅井先生)

そのために、まずは地域の信頼を得ることに努めた。地域行事には可

図6 「地域人教育」での活動の進め方



能な限り生徒を参加させた。生徒には、地域の無償協力で常に感謝の気持ちを持たせたいようにと伝えた。そうして、一生懸命に行事に取り組んでいくうちに、地域の人々も生徒の成長に喜びを感じるようになった。「生徒のできるものが少しずつ増えたり、以前より真面目に取り組みようになつたりといった変化が、地域の人々に人材育成の楽しさややりがいを感じさせたのだと思います。今では『次はどんな生徒が来るのだろう』と、新たな出会いを楽しむ霧

囲気さえあります」(浅井先生)

### 地域に根づいた機関が学校と地域の仲介役に

「地域人教育」が浸透した背景には、社会教育が活発な飯田市の特性もある。同市の20地区すべてに公民館があり、そこを拠点に住民主体の活動が頻繁に行われている。各公民館には、市役所の若手職員が公民館主事として常駐し、地域に根づいた活動をしている。その地域を熟知した公民館主事が同校と地域の仲介役を担うことで、生徒の地域行事への参加、外部講師の学校派遣、フィールドワークなどが実現している。

「異動のある教師では、地域との関係を深めていくのは難しいのが現状です。そこで、公民館と連携することで、町内会や商店街、地元企業とのパイプができ、学びの場が広がりました」(浅井先生)

公民館がなくても、地域に根づいた機関と連携すれば、「地域人教育」は実現可能だという。有賀先生の現任校では、各町とつながりのある社会福祉協議会を仲介役として、19年度、地域連携を開始。浅井先生の現

任校では、まちづくり団体や地元企業と協力して地域連携を推進中だ。

「根気強く活動を続ければ、地域との信頼関係が生まれるのはもちろん、その人たちが協力を紹介してくれることで、新しい活動に発展することもあります。その過程で教師も経験を重ね、コーディネーターの役割を果たせるようになれば、異動先の学校でも地域連携策を打ち出すことができるのです」(國松先生)

### 主体性や協働性などを高めていく生徒たち

「地域人教育」を通して、生徒は大きく成長している。入学時と1年次末に行う、自己肯定感、自己有用感、及び経済産業省が提唱する「社会人基礎力」(主体性、計画力、協働性など)についての生徒による5段階の自己評価では、すべての項目の数値が伸びている。その結果からも、同校が育成を目指す資質・能力(P.15図4)が順調に育成されていると言える。

実際、生徒自ら次の活動を提案するようになったり、人前で堂々と活動内容や自分たちの思いを発表する

ようになったりと、活動後には大きな成長が見られる。さらに、17年度の「第25回全国高等学校生徒商業研究発表大会」では、市の伝統工芸品「飯田水引」の需要拡大をテーマとした研究で優秀賞(2位)を受賞するなど、具体的な成果も上げている。

今後の課題は、教育効果の測定方法の確立だ。現在、松本大学との共同研究によって、学校と地域それぞれの変容を測定・評価する方法を開発中だ。また、「地域人教育」を教科の学力や学習意欲の向上に結びつけていくことにも取り組んでいる。ただ、「地域人教育」の本当の成果は、進学率や就職率の向上といった短期的な成果で評価できるものではない。生徒がどのように成長し、社会に貢献しているのかを知る必要がある。卒業後も追跡調査を行いたいと、國松先生は考えている。

『「地域人教育」で育む『社会を形成する力』は、社会に出てすぐに発揮できるものではないでしょう。『地域人教育』は、生徒が社会の中心となって活躍する10年後、20年後に効果が表れる教育だと思います。長期的な視点で取り組みの検証をしていきたいと考えています』

# Society 5.0時代を 学校現場はどう捉えるか

Society 5.0 へと向かう社会の変化を、学校現場はどう受け止め、何をすべきなのだろうか。中央教育審議会の委員であり、教育再生実行会議のワーキング・グループのメンバーとして、同会議の第十一次提言にもかかわった2人の識者が語り合った。



## 先端技術の活用により進む 教育基盤の整備

**吉野** Society 5.0はどのような社会で、学校教育にはどのような変化をもたらされるとお考えでしょうか。

**堀田** Society 5.0では、インターネット経由ですべての人とモノがつながる（IoT:Internet of Things）ことで、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出したり、イノベーションによって少子高齢化や過疎化といった現代社会の課題や困難を克服したりすることが期待されています。少子高齢化が進む日本では、働き手不足をAI（人工知能）やロボットの活用で対応せざるを得ないでしょう。金融機関などのATMのように、技術の進歩による変化はこれまでも生活の様々な場面で起こっていたのですが、Society 5.0ではその変化のスケールが大きく、私たちには社会の発展がまるで非連続のように感じられると言われています。

学校現場においては、文部科学省の「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」でも示されている通り、教育基盤の整備

が進むと考えられています。先生方の中には、クラウドにデータを置くことに抵抗感を持つ方もいらっしゃるかもしれませんが、日常生活ではもはやクラウド活用は珍しいことではありません。国も、政府情報システムを整備する際には、クラウドサービスの利用を第一候補とする「クラウド・バイ・デフォルト原則」を打ち出しています。教育現場でも、クラウド活用によって、生徒が多様な教育コンテンツでの協働学習に取り組みやすくなりますし、学習記録の蓄積によって生徒のつまづきが見しやすくなることで、授業改善が進むと考えられます。学術通信ネットワーク「SINET（P.9図4）」の初等中等教育への開放は、そうした環境整備の大きな一歩です。

**荒瀬** これまで、教育現場における新しい技術への対応は決して迅速ではありませんでした。それは、学校現場へのICT機器の普及やネットワーク環境の整備が遅れていたという理由からだけではなく、生徒の学びの質を保証するために十分に検証が行われてから導入しようという現場の知恵でもあったと思います。ただ、大切なのは、「これまではこう

「だったから、これからもこうだ」といった思い込みは横に置き、これからの学校はどうありたいかを教師が議論しておくことです。議論し、考えておけば、環境が変わった時にしなやかに対応できます。

**吉野** テクノロジーの進化を受け止めて高校教育を再構築していく心構えが、先生方一人ひとりに求められるということですね。

**堀田** スマートフォンが誕生したのは約10年前で、当時は、スマホに縛られる生活になるのではと危惧する声もありました。しかし、現実はどうでしょうか。スマホのおかげで快



大谷大学文学部教授  
**荒瀬克己** あらせ・かつみ

京都府・京都市立堀川高校校長、京都市教育委員会教育企画監を経て、2014年度から現職。第10期中央教育審議会委員、初等中等教育分科会長、新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ主席などを務める。

適に生活できていると実感している人の方が多くはまずです。先生方の業務には、ICTに任せてもよいものもあるでしょう。例えば、生徒の学習ペースや習熟度に合わせて学習教材や動画を提供するというたことをClassi（\*1）などに手伝わしてもらい代わりに、人間は何をすべきかを考えることで、先生方はより教師らしさを発揮できる時代が来ます。

**荒瀬** 教師らしさという点では、AIの活用でできた時間を生かして、先生方には生徒の評価をさらに充実させていただきたいと思えます。生徒自身が気づいていないような自分



東北大学大学院情報科学研究科教授  
**堀田龍也** ほりた・たつや

文部科学省「学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議」座長、第10期中央教育審議会委員、初等中等教育分科会委員、新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会委員などを務める。

の魅力に気づけるように、生徒と対話を重ねることはAIにはできません。さらに、スタディ・ログなどを蓄積した学びのポートフォリオを活用し、一人ひとりの能力や適性に

応じて個別最適化された学びが実現されれば、生徒はより自信を深めやすくなります。そのようにして生徒の自己肯定感を高めることで、生徒は自分を信じるだけでなく、他者の可能性も信じ、他者とかかわり続けることができるようになるはず

です。**吉野** 個別最適化された学びによって自己肯定感が育まれることで、人のあり方も他者とかかわり方も変わり、ひいては社会をより豊かにしていく、そうした教育が今後求められると感じました。

### ICTを活用して 多様な価値観に触れさせる

**吉野** 今後、整備されていくICT環境の中で、現場の先生方はどのように授業改善を進めていけばよい



ベネッセコーポレーション  
学校カンパニー  
営業本部長  
**吉野隆弘**  
よしの・たかひろ

でしょうか。

**荒瀬** 先日訪問したある中学校の国語の授業では、ノートパソコン上の付箋アプリを使って意見を整理し、社会の授業では、パソコンは情報検索ツールで、項目の分類には本物の付箋を使っていました。既に現場では、各教科・科目、単元の特性を踏まえ、さらに教師の持ち味を生かした多様なICT活用ができるようになってきたと感じます。

**堀田** 授業におけるICT活用を考える上では、価値観そのものの多様性を生徒に気づかせることが大切です。高校生であれば、ICTを活用することで社会課題についての多様な意見を集め、納得解を探すような授業を展開することができます。

これまでの授業では、他者の価値観や考え方を可視化する場面はあまり多くはなかったのではないのでしょうか。今後は、授業でのSNSなどの活用が、同時に、そして手軽に意見交換することを可能にし、それによって他者の価値観や考え方が可視化されやすくなります。EUの一部の国では、授業中の議論にSNSを活用したところ、学びがとても活性化したそうです。日本の高校生

\* 1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

事象から意味や価値を見いださせるような  
「問い」を生徒に投げかけることが  
これからも変わらず大切です

堀田龍也



にもSNSが普及していますが、それは多様な価値観や考え方の出合いのツールにはなっておらず、クラスや部活動の人間関係がそのままSNSでのつながりになっていくだけです。いろいろな価値観や考え方を持った人たちとネット上で意見交換し、認め合う経験は、授業の中でも必要になってくると思います。

### 挑戦し続ける教師チームで、生徒に合った授業をつくる

**吉野** 先端技術の教育現場での活用は、教材やスタディ・ログの蓄積・共有にとどまらず、先生方のノウハウや指導観の伝承のあり方にも影響を与えそうです。

**堀田** 同じ教科書で同じ単元を16人の小学校教師がどのように教えているかを調査したところ、ICTの活用場面や活用意図も含め、全員が違う教え方をしていることが分かりました。教師の専門性やキャラクターによって教え方が異なるのは当然なのかもしれませんが、だからといってほかの教師の授業を知らないままだと、授業改善のヒントが得られません。その点においてもICTを活用し、例えば、授業を動画として記録すれば、忙しい先生方も学び合いの機会が作りやすくなります。

**荒瀬** 先端技術の活用に関しては、先生方にも授業内外でICTを活用していくようなチャレンジが求められています。新しいチャレンジは1人ではなく、考え方も経験も多様なチームで行うことで大きな価値を生みます。そのようなチームづくりを校長に期待したいですね。

**堀田** 私が先生方にもお願いしたいのは、先端技術を活用しながら、いろいろな教え方や支援の方法を学び、挑戦していただきたいということです。ほかの先生の授業の動画をみて話し合ったり、生徒のスタディ・ログをどのように分析して生徒の自己肯定感を高めるかを議論したり、先生同士がつながりながら挑戦していただきたいと思っています。

### 改革・改訂に共通するのは 資質・能力の育成という目的

**吉野** Society 5.0は「人間中心の社会」であると言われていますが、これまでの先生方のお話を踏まえ、と、Society 5.0に向けた教育におい

ても、AI等の先端技術は生徒のよりよい学びやその実現を支援する教師をサポートする手段であり、中心に存在するのは、生徒や教師、すなわち人間だと改めて感じました。そうした人間中心の教育を通して、先生方には何を目指すことが求められるのでしょうか。

**荒瀬** 私たちの社会は、グローバル化の進展や技術革新、生産年齢人口の急減など、大きな変動の中にあります。高大接続改革は、「混沌とした状況の中に問題を発見し、答えを生み出し、新たな価値を創造する力」を育むことを目指しており、それはまさにSociety 5.0に向けた教育と言えるでしょう。

また、新学習指導要領では、一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す「キャリア教育」が重視されています。私たちは、他者や社会とのかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員など、様々な社会的・職業的役割を担いながら生きていますが、これからの社会では、一人ひとりが担う役割も人生の中で多様に変化していきます。そのような社会



生徒が自分のよさや可能性に気づけるように  
生徒と対話を重ねていけるのは、  
AIではなく、人間の教師です

荒瀬克己

において、自立し、自分を成長させていくために必要な資質・能力を、新学習指導要領では3つの柱で捉え、その育成と評価が現場の先生方に求められています。

**堀田** 変化が激しい社会では、企業が求める力も刻々と変化し、働く人たちの流動性が高まるため、学び続けることが重要です。一人ひとりが学び続け、自分の人生をデザインし、キャリアを発展させていくことが求められます。新学習指導要領の中には「Society 5.0」という言葉は出てきませんが、Society 5.0に向けた人材育成の理念は、既にインストールされているわけです。

**吉野** Society 5.0に向けて、高校は、生徒の学習意欲を喚起し、資質・能力を最大限伸ばすための普通科改革やSTEAM教育の充実、地域や大学等との連携強化などが求められています。そうした高校教育改革も、新学習指導要領が目指すところと一致しているわけですね。

**荒瀬** 2001年に生まれた3万人の子どもを対象にした「21世紀出生児縦断調査（\*2）」では、高校生になると、学習意欲も学習時間も減少することが明らかになりました。

高校は、生徒に混沌とした時代を生きていく力を育むための場であるのに、残念です。どんな生徒に育てるのか。そのための教育課程や入学者受け入れをどうするのか。スクールポリシーを明確化しなければなりません。普通科改革も、必修科目はきちんと履修させ、総合的な探究の時間や選択科目、学校設定科目を充実させて、「学校教育目標に基づき、このような資質・能力を育成するため、このような教育を行う」と、生徒にはもちろん、中学生にも、明確に示して取り組むことが重要です。

### テクノロジーが進化する中 より重要になる教師の役割

**吉野** 環境整備は今後進んでいきませんが、Society 5.0に向けて先生方にもこれからも大切にしてほしいことは何でしょうか。

**堀田** Society 5.0において求められるのは、意味を見つけたり、価値を解釈したりする力であり、そうした力を育む「問い」が今後も重要です。例えば、参政権について学んだ時に、「なぜ、この時代に参政権を得たのだろうか」などと問いかけることで、

生徒は事象から意味や価値を見いだそうとします。そして、そうした答えが1つではない問いに対して自分が見いだした意味や価値を、教師と生徒、生徒同士での対話を通じてやり取りすることで、見方・考え方が広がっていきます。Society 5.0における学校では、生徒には個別最適化した学びが提供されますが、個別最適化した学びと、教師がクラス集団とともにつくる学びは、決して二項対立するものではありません。先端技術を活用した個別最適化した学びが広まっても、授業中の教師の知的な話や生徒が協働して探究する時間は変わらず大切なのです。

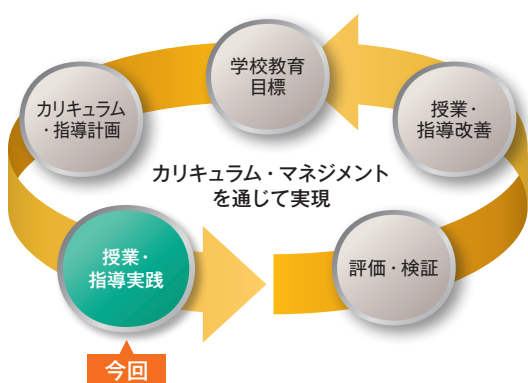
**荒瀬** 人間の社会は、狩猟社会、農耕社会、工業社会、そして情報社会と変遷してきたと言われます。ただ、それぞれの社会は、後にその時代を振り返った時に、確かにそういう時代だったと人々に認知されるものでしょう。Society 5.0と言われるこれからの時代が、後世の人から「確かに人間中心の社会だった」と振り返られるように、テクノロジーの力を活用しながらも「人が人を育てる」教育を、これからは先生方が追究していけることを願っています。

\* 2 21世紀出生児縦断調査（平成13年出生児）は、同一客体を長年にわたって追跡する縦断調査として、平成13年度から実施している統計調査。第16回調査から、少子化対策のみならず、教育面を含む国の施策に活用することを目的として、文部科学省を実施主体とする厚生労働省との共管調査として実施している。

**改 革 事 例**

**地域連携を重視した「総合的な学習の時間」を中心に、  
 イノベーターを育てる教育活動の実現を目指す**

**岡山県立瀬戸高校**



◎「尚学・自主・健康・協調」を校訓に、学区に根ざした進学校として、“自ら学ぶ生徒”“リーダーシップを発揮する生徒”“表現力のある生徒”の育成を目指す。第12回キャリア教育に関する文部科学大臣表彰受賞。

◎設立 1909(明治42)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約160人(全日制)

◎2018年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、大阪大、岡山大、九州大、大阪市立大、岡山県立大などに37人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、岡山理科大などに延べ183人が合格。

◎URL <http://www.seto.okayama-c.ed.jp/>



図1 「瀬戸高 6つの力」

**① 受けとる力**

- ・聴く
- ・メモする

**② 伝える力**

- ・言葉で伝える
- ・記述する
- ・プレゼンする

**③ つながる力**

- ・仲間とつながる
- ・地域とつながる
- ・世界とつながる
- ・考えと考えをつなぐ

**④ 考える力**

- ・論理的思考力
- ・批判的思考力
- ・課題を解決する

**⑤ 見つける力**

- ・課題を見つめる
- ・強みを見つめる
- ・新たな価値を見つめる
- ・発想する

**⑥ より良くなるようにする力**

- ・向上心を持つ
- ・学び方を学ぶ
- ・価値を学ぶ

\*学校資料を基に編集部で作成。

**総合的な学習の時間において  
 育成を目指す資質・能力を定義**

岡山県立瀬戸高校が、総合的な学習の時間(以下、総合学習)に、地域での学びを取り入れたのは2016年度。前年度に赴任した乙部憲彦校長が、「真面目だが受け身がちな生徒に、地域での活動を通じて自信をつけさせたい」と考え、1学年の総合学習の改革に着手した。「初年度は『地域調べ・地域貢献』をテーマに、シンキングツールなどを活用して地域の魅力や課題を確認しながら、地域にどのような発信や

貢献ができるかを考えさせる取り組みにしました」(乙部校長)

総合学習における活動内容は、教室内で行われる発想法や発表方法の学習、地域に足を運んでのフィールドワークなど、多岐に及んだが、具体的な活動とともに「伝える力を手に入れよう」「比べる力を手に入れよう」などと、「手に入れた力」も明らかにし、生徒に伝えた。乙部校長は、生徒の出身中学校がある自治体すべてに足を運び、行政に協力を要請。21人のゲストを招いた「地域振興関係者を囲む会」を開いて、意見交換と生徒たちの活動成

\*「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。

果の発表を行った。

「地域振興関係者からは、『地域をともにつくっていくために、高校生にもっと地域について調べ、深く考えてほしい』と、率直な要望もいただきました」(乙部校長)

広範な地域との連携を土台に、翌



校長  
乙部 憲彦  
おとへ・のりひこ

教職歴34年。同校に赴任して5年目。



教頭  
三澤 宏之  
みさわ・ひろゆき

教職歴32年。同校に赴任して4年目。



教務課長  
那須 仁司  
なす・ひとし

教職歴30年。同校に赴任して8年目。



指導教諭  
絹田 昌代  
きぬた・まさよ

教職歴28年。同校に赴任して3年目。進路指導課。



3学年主任  
古市 秀治  
ふるいち・ひではる

教職歴25年。同校に赴任して4年目。



2学年担任  
景崎 大喜  
かげさき・だいき

教職歴4年。同校に赴任して5年目。進路指導課。

17年度、1年生の総合学習は、「セト☆ラボ(地域研究室)」とネーミングされ、さらに改革が進められた。その中心となったのは、17年度から赴任した絹田昌代先生だ。

「セト☆ラボの『☆』は、自らを『陰キャ』という生徒を輝かせたいという思いを表しました」(絹田先生)

絹田先生は、総合学習を軸に学校として生徒に育成を目指す資質・能力「瀬戸高 6つの力」を定義した(図1)。その際、よりどころになったのが、前年度の総合学習の中で明記された、活動を通して手に入れた力や、校訓、学校経営目標だ。それは、総合学習を教育活動の中核として位置づけるための作業だったと絹田先生は振り返る。

「本校の生徒は真面目でコツコツと努力するタイプですが、生徒自身の自己評価では、『シャイ』『地味』と、必ずしも前向きなものではありません。生徒も、変化の激しい時代に『真面目でおとなしい』だけでは駄目だと分かっているのです。そんな生徒の気持ちに答えながら、思いきってイノベーションを起こす教育をデザインしたいと思ったのです。まず、それを実現するために、育成を目指

す資質・能力を管理職とともに検討しました」(絹田先生)

翌18年度からは、「瀬戸高 6つの力」を学校経営目標に明記し、学校で育成を目指す資質・能力として校内外に周知している(図2)。

### 地域の視点も借りながら 生徒の資質・能力を見る

総合学習は、現在、次のような内容で各学年、展開されている。

・1年次「セト☆ラボ」 「未来をよりよくするために地域の課題を知ること」をテーマに、フィールドワー

クを含む探究的な学びを展開。地域振興関係者から地域の課題や魅力、今後の展望などを聴き取り、地域課題の解決方法などをポスターセッションで提案する。

・2年次「S☆ラボ」 「2030年を見通した地域の課題について、学問分野、SDGs(\*1)から何を考えるか、提案できるか」をテーマに探究的な学びを展開。学びたい学問領域と地域課題をSDGsでつなぐために、SDGsに先進的に取り組む岡山大学の教員の講義や企業ワークを行ったりしながらチームで

図2 学校経営計画と育成を目指す資質・能力(19年度)

#### 1. 実現しようとする本校のビジョン(将来像、目指す姿)

- ① 上級学校へ進学できる学力と社会人として必要な6つの力を身につけた生徒の育成(受けとる力・伝える力・つながる力・考える力・見つける力・より良くなるとうとする力)
- ② 主体的な学びを身につけ、自信を持ち意欲的に行動することができる生徒の育成
- ③ 実践的コミュニケーション能力を身につけ、健全で良好な人間関係を築く生徒の育成
- ④ 地域の方から支持され、将来にわたって、郷土・地域に貢献できる生徒の育成

#### 2. 具体的な学校経営目標 ( )は校訓

瀬戸高ならではの特徴ある取り組みを進め、これからの社会に必要な6つの力を育成する(受けとる力・伝える力・つながる力・考える力・見つける力・より良くなるとうとする力)

- ① 授業改善を進め、各教科の指導を通して、生徒の主体的な学びを実現する。(尚学)
- ② 生徒が自らの価値に気づき、自信を持って意欲的に行動し、より良くなるとうとする力の育成を行う。(自主)
- ③ 活気溢れ、健全で良好な人間関係を築き、その関係を基にした実践的なコミュニケーション能力の育成を行う。(健康)
- ④ 地域との連携を進め、郷土・地域の将来を考え、地域貢献を行う力と社会変革の担い手として、イノベーションを起こす力の育成を図る。(協調)

\*学校資料を基に編集部で作成。

\*1 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

追究する(図3)。地域課題に貢献できる提案をK P法(\*2)を用いて発表する。

「自分の気づき、仲間の言葉、岡山大学の講義などがつながり新しい価値を見つけた瞬間、生徒の顔が輝きます。そのひらめきをよりよくするために地域、大学に出かけるようになった時には、チームは自走し始めています」(絹田先生)

・3年次「D☆ラボ」 1、2年次の活動を卒業後の進路につなげる探究的な進路学習を展開。「D」はDream・Discover・Designの頭文字で、自分の夢を見つけデザインするといった意味を込めている。自身の進路実現と結びつけながら志望理由書や自己推薦書を作成する。

1年次の活動では特に「受けとる力」の育成が重視されるが、それは、受け身がちであることを生徒が持つよさとして認めた上で、次の段階に進んでもらいたいという学校の願いが込められている。そのため、地域行政の関係者や地元新聞社の記者などの話を聴き、ひたすらメモをしていくことから活動は始まると、3学年主任の古市秀治先生は説明する。

「地域課題と言っても、生徒が知っ

ているのは過疎化、少子化の言葉の意味くらいで、自分の住む町でそれがどのように進行し、どんな影響が暮らしに生じているのかまでは分かっています。現状を知るためには、話を聴いて受けとる力が必要だと考え、メモの取り方や話の聴き方を学んでいくようにしたのです」

「6つの力」は年に2回、ルーブリックを基に生徒が自己評価する。地域の人々にもルーブリックは公開されているため、他者評価に外部の視点も加わっている(図4)と三澤宏之教頭は説明する。

「文化祭、体育大会などの活動の冒頭に校長が『今日は6つの力のうち、特に「つながる力」を意識しよう』などと生徒に呼びかけるのですが、それを聞いた地域の方が生徒に対して『今日は大きな声で挨拶ができているね』『二つの異なる考えをうまくつなげることができたね』などと声をかけてくださる場面も目にするようになりました」(三澤教頭)

「6つの力」を生徒に強く意識させるため、2学年担任の景崎大喜先生は、総合学習の指導案を生徒に配布している。

「事前にグループリーダーの生徒

図3 総合的な学習の時間におけるSDGsの視点例

**Seek 探究する**  
私たちの未来は 私たちで変えられる  
集まれ！ イノベーター！ 瀬戸高は想像以上に楽しい！！

**瀬戸高 × SDGs**  
瀬戸高校はSDGsの学びを通して6つの力の育成に力を入れています！その取り組みの一例を紹介します。

**受けとる力** (8) 子どもを持つお母さんたちにアンケートしたら「子連れ出勤したい」って！未来をつくるのはBaby。岡山トヨタ社長に「子連れ出勤」共感していただきました！

**つながる力** (12) 「お肌ピチピチチ」(落ちた紙を有効活用できるんじゃないか説) 岡山大学田口教授 × SDGs × ストライプインターナショナル × 日本オーブ × 冬美白 とってもかわいい！ハンドクリームを作ったよ！大学でカネ・ヒト・モノをつなぐ経済を学びたい！

**考える力** (13) 「防災 CAN DO!」で被災地岡山から発信することを考えました 英訳・韓国語訳・中国語訳・タイ語訳で海外の方にも防災意識の大切さを伝えたい。

赤磐市長・岡山市長・真庭市長と商談！

地域と強く結びつきながらスタートした瀬戸高校の「総合的な学習の時間」は、現在、SDGsの視点も取り入れている。持続可能な世界を実現するための17の目標を地域の具体的な課題と関連づけ、その解決方法などを提案。さらに地域の企業と協働して新商品開発やブランドづくりなどへと発展させる。生徒にとっては、地域を変えるイノベーターとして成長を遂げる機会となっている。

\*学校パンフレットをそのまま掲載。

\*2 紙芝居プレゼンテーション法。公益社団法人日本環境教育フォーラムの川嶋直氏が開発した思考整理とプレゼンテーションの手法。



### 資質・能力の育成を 意識することで 自分の授業にも変化が

景崎大喜先生

総合学習の改革が始まった3年前、校内だけでなく校外の人とも教師がつながることで、学校全体が変わっていくエネルギーが生まれることに感動しました。私自身は、人を動かしたり、人とつながったりすることがそれほど得意ではありませんでしたが、岡山大学の研究者や企業の方々と連携しながら、伝える力や受けとる力を生徒と同様に高めていったと思います。

育成を目指す資質・能力が明確になったことで、数値化できない力をどのように評価するかを日々考えるようになりました。総合学習でのプロセス評価の仕組みづくりも学び始めていますが、担当する数学の授業でも、ただ解答を書かせるだけではなく、なぜその定理を使うのかといった理由を説明させることが増えるなど、自分の授業の変化を実感しています。

### 各教科でも資質・能力の 育成に向けた授業改善に着手

総合学習から始まった「6つの力」の育成は、各教科の授業のあり方にも変化をもたらして始めている。同校では、若手教師14人が教科横断で4チームを形成して授業改善に取り組みプロジェクトを19年度からスタートさせた。具体的には、知識構成型

に指導案を渡し、その日のどの活動でどんな資質・能力が育まれるのかを説明し、各活動が円滑に進むように役割を与えています。生徒自身が資質・能力を意識することで、各活動の質が高まります」（景崎先生）

ジグソー法（\*3）、STEAM教育（\*4）など、生徒の主体的な学びを促し、「6つの力」の育成に寄与すると考えられるテーマをチームで研究し、特定の教科で公開授業に臨むという取り組みだ。

「総合学習で生徒が発想豊かに活動できるよう、ジグソー法を始め様々な手法を導入しました。それらの多くが教科の授業でも活用できると気づいた若手教師が自主勉強会を開くようになり、やがて組織的な授業改善へと発展していきました」（三澤教頭）

教務課長の那須仁司先生は、「教科の枠を取り外したことで、『6つの力』の育成という目標を明確にした

ことが、従来の授業改善の動きとの大きな違いだ」と語る。

「年2回の公開授業では、単元目標に加え、態度目標として『6つの力』のどれを重視して授業を展開するかを明らかにします。『6つの力』の育成を明確にすることで公開授業に参加した教師の授業のあり方に直接的に影響を与えます」（那須先生）

プロジェクトメンバーの景崎先生も、「授業を見る際に、『6つの力』のどの力の育成を重視している授業なのかを知ること、授業を見る視点が定まる」と話す。同校では現在、一部の教科で「6つの力」のルーブリックの作成も始まっている。

生徒のレポートに「地域は自分たちで変えられる」といった言葉が見られるようになるなど、生徒は自身をイノベーターとして大きく変えている。資質・能力の育成を意識した同校の取り組みがさらに多くの教科で展開していくことで、生徒の成長は一層加速していくだろう。

### 導かれた道標

育成を目指す資質・能力を地域と共有し、  
教科を超えて育成することで生徒を大きく育てる

図4 ルーブリック

総合学習では、育成を目指す「6つの力」のルーブリックを作成。ルーブリックは、地域からの参加者が生徒の様子を評価する際にも提示され、生徒の活動を理解する材料として活用されている。  
\* 学校資料をそのまま掲載。ルーブリックの全文は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME →教育情報→高校向け」をご覧ください。

\*3 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。  
\*4 STEAM教育は、科学 (Science)・技術 (Technology)・工学 (Engineering)・芸術 (Art)・数学 (Mathematics) に重点を置いた教育、人材育成のこと。

13:35 グループ分け



教室に入る際、生徒は番号の書かれたくじを引き、該当する番号の席に座った。1グループは4～5人。グループ内では役割が書かれたくじを引き、司会・書記・発表・事務・片づけ役を決めた。事務係が佐々木先生から受け取ったプリントをメンバーに配布したところで、授業が始まった。くじ引きは毎時間行い、メンバーや役割はその都度変わる。

授業  
ハイライト

●植物科学科2年生が履修する、教科「農業」の「野菜」は、2時間連続で行う科目だ。今回は、単元「野菜生産の役割と動向」の全6時間のうちの5・6時間目。データや新聞記事を基に東北の農業の特徴について話し合った。(P.29に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で  
深い学びへ

実践  
アクティブ・ラーニング

農業

データや新聞記事を活用した  
グループ討論で、地域や農業の  
課題に向き合う志を高める

人口減少や高齢化、農産物の輸入増加に伴い、中小規模の農家の自立、中山間地域の保全、農村資源の維持などが課題となっている自治体は多い。中でも青森県は、人口減少率が全国でも高く、このままでは県内の市町村の多くが消滅する可能性が指摘されている。そうした状況を

地域や農業の課題への関心を高め、  
未来の地域の担い手を育成

佐々木先生のアクティブ・ラーニング



青森県立三本木農業高校

佐々木秀幸 ささき・ひでゆき

教職歴28年。同校に赴任して8年目。

植物科学科主任。農場部副主任。

2017年度に有志の教師が行う放課後の勉強会「農可尊熟」を立ち上げ、主体的・対話的で深い学びを实践。同勉強会や授業で、青森県の農業・地域の課題を生徒に伝え、考えさせている。

### 青森県立三本木農業高校

◎校訓は、「自主協同・自律責任・質実剛健・言行一致」。植物科学科・動物科学科の1年生は全員、寄宿舎での寮生活が必須。地域活性化につながる取り組み「高校生農力開花事業」や、県内の動物の殺処分ゼロを目指す「命の花プロジェクト」などを実施し、地域を支える「人材」の育成を図る。

◎設立 1898(明治31)年

◎形態 全日制/植物科学科・動物科学科・農業機械科・環境土木科・農業経済科/共学

◎生徒数 1学年約170人

◎2019年度進路実績(現役のみ)

4年制大は、弘前大、酪農学園大、八戸学院大、東京農業大、日本大などに35人が合格。短大、専門学校進学49人。就職76人。

◎URL <http://www.sanbonki-ah.asn.ed.jp/>



次に、東北各県の農業産出額について、特に東日本大震災の前後のデータを比較し、気づいた点を話し合った。発表では、「福島県の減少が大きい」「電気を使って育てる野菜の産出額が減っている」など、東北各県の農業の特徴について様々な意見が出た。話し合いの途中で1時間目が終了。休み時間中も生徒からの佐々木先生への質問が絶えなかった。



授業は、佐々木先生が提示した課題について、各グループで3~4分間話し合い、その内容をまとめて発表する形式で進められる。本時の最初の課題は、前回の復習として、2012年と2016年の農業産出額の違いについてだった。佐々木先生は、「感想だけでもいいよ」「よい意見だったね」などと声をかけることで、生徒が発表しやすい雰囲気をつくっていた。

背景に、植物科学科主任の佐々木秀幸先生は、農業教育への思いを次のように述べる。

「本校の卒業生の多くは地元で就職し、地域の未来を担っていきます。そうした現状から、地域の課題を自分の将来と重ね合わせ、地域の発展を担う人材を育てていくことが、本校の使命だと捉えています」

ただ、同校の生徒の多くは、農家の後継ぎではなく、農業問題への関心は決して高くない。そうした生徒に課題意識を持たせ、地域の将来を担う志を育むために、2017年度、有志の教師が立ち上げたのが、生徒同士での勉強会「農可<sup>のうか</sup>尊<sup>そんじゆ</sup>熟」だった。毎週月曜日の放課後に1時間程度、学年や学科を問わず希望者が集まり、農業を取り巻く課題について学び、生徒同士で議論している。

勉強会では、アクティブ・ラーニング(以下、AL)の視点を取り入れた。同校で既にALを授業で実践していた前進路指導主事の鈴木康夫先生(現・青森県立五戸高校教頭)が、生徒同士の主体的な議論を促そうと提案したのだ。

佐々木先生は、鈴木先生の指導や勉強会の運営を通じて、ALの視点や手法を学んだ。

「最初は、私が一方的に話し過ぎたり、生徒に意見を押しつけてしまったりと、なかなかうまくいきませんでした。教えたいという気持ちを抑え、生徒同士の話し合いを増やしていく中で、生徒が積極的に意見を出し、議論が白熱するようになっていきました」

思考の活性化・深化への配慮

データや新聞記事を基に議論し、課題を自分事として捉えさせる

勉強会でALの実践に手応えを感じた佐々木先生は、19年度、担当する科目「野菜」の授業でもALの視点を取り入れることにした。「野菜」は、講義と農場実習から成る専門科目で、これまで講義の授業では、教科書に沿って知識を教えることが中心だった。それを、佐々木先生が提示した課題について、関連するデータや新聞記事を読み解きながら、4~5人のグループで話し合い、その結果を発表する形式とした。

佐々木先生が生徒の思考を深化させるために特に重視するのが、地域や農業の課題を自分事として捉えさせ、当事者意識を高めることだ。

例えば、今回の授業で取り上げた「GAP(農業生産工程管理)」などの用語も、教科書を読ませ、教師が解説するだけでは、多くの生徒は表面的な意味しか理解しない。しかし、配布された新聞記事を読み、意見を交わす形式にすると、生徒は、諸外国の不当な輸入規制や風評に疑問を持ち、青森県の農家や行政の奮闘ぶりを誇りに思う発言をしたりと、教科書の用語を現実の課題として捉えるようになる。そうして、地域や農業の課題を自分の将来に関係するものとして受け止めることで、自分なりの考えを持つようとする。その過程で、問題解決のためには自分の知識が不足していることに気づき、自ら関連事



本時のまとめとして、「自分が住む市町村では、どの制度を活用するか」をテーマに話し合い、その意見をグループごとに黒板に書いて、発表した。「ハードルの低いG1」の取得から着手し、順次、取得認証を拡大する」「八戸と連携し、農作物と海産物のセット販売をして、観光にも力を入れる」など、各グループからは地域の実態を踏まえた提案がなされた。



「GAP(農業生産工程管理)」「HACCP(危害要因分析重要管理点)」「G1(地理的表示保護制度)」など、農産物の認証・管理制度に関する新聞記事を読み、農産物輸出入に関する制度の必要性やデメリット、「伝統野菜」の今後について話し合った。「国際基準で安全・安心が認められる」「コストの関係で、小規模農家は認証の取得が難しい」といった発言があった。

項を調べるようになり、より深い洞察に至る。

一方で、生徒の課題意識を高めるには、教師の主体性も重要だと、佐々木先生は強調する。

「教師が常に社会にアンテナを張り、課題意識を持つていなければ、生徒に深い思考を促す発問をすることはできません。新聞記事のスクラップを作り、それを勉強会や授業に取り入れる中で、生徒とともに私自身も成長しています」

#### 場づくりへの配慮

### どんな意見も肯定的に受け止め、前向きな気持ちを持たせる

生徒の意見に対して、佐々木先生は必ず肯定的な発言をする。たとえ的外れな意見であっても、即座に否定しない。発言することを恐れさせないためだ。そして、発言後は、周りに拍手を促し、発言自体をたたえる。

「自分は周りに受け入れられているという思いが、『自分にもできる』という肯定感となり、積極的な姿勢につながります」

もちろん、最初からすべての生徒が話し合いの中で意見を述べたり、皆の前で発表したりすることができないわけではない。当初、グループ内の役割分担を生徒に任せたり、特定の生徒だけが意見を述べたり、発表したりしていることに気がついた。そこで、くじ引きで役割分担を決めるようにし、生徒全員が話し合いに参加できるようにした。

また、毎回グループのメンバーを変えることで、誰とも意見を言い合えるようになり、クラスの一休感が高まったという。生徒指導や学級経営の面でも、AIがよい効果を生んでいる。

#### 成果と課題

### 課題意識が高まれば、高いハードルも越えられる

19年度の大学入試では、植物科学科から2人の国立大学合格者が出た。2年生から参加した「農可尊熟」で課題意識を持ち、大学でも勉強したいという意欲が生まれ、努力した結果だった。

「学力やコミュニケーション力に課題が見られた生徒でも、心に火がつけば大きく変わること」を改めて実感しました」

1学期の「野菜」の定期考査では、授業で学んだ知識や生徒同士での話し合いを通して考えたことを表現させようと、青森県の農業の特徴と課題について自由記述させる問題を出した。ほとんどの生徒が解答用紙にびっしりと自分の考えを書いていた。課題意識がしっかりと醸成されている様子がうかがえたという。

今後の課題は、知識習得のための講義と、話し合いのバランスの取り方だ。

「農業は専門性が高いため、教える内容が多く、課題も多岐にわたります。習得すべき知識の量と質を見極め、話し合いのための問いを精選していくことで、授業の質を高めていきます」

## 単元の指導計画

【教科・科目】農業・野菜 【分野・単元】野菜生産の役割と動向 【テーマ】野菜の種類と特徴 【設定時数】全6時間の中の5・6時間目  
 【単元目標】野菜を分類し、多くの種類を体系的に理解するとともに、野菜生産の現状と動向を考察することができる。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法	
1・2	野菜の種類と利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>野菜の種類と分類に関心を持ち、共通点や相違点などを理解する。</li> <li>原産地や来歴、利用の仕方などに興味を持って調べる。</li> </ul> <b>【知識、主体性】</b>	①4～5人のグループをつくる。 ②主な野菜の原産地の地図を用いて、原産地の気候や文化なども考えながら、野菜の種類について話し合う。 ③話し合った内容についてグループごとに発表する。その後、補足説明をして、原産地の気候から見た生育特性や栽培方法について理解する。	<b>【主体的な学び】</b> 質問や疑問点が出たら、その場でインターネットを使って調べ、その結果をスクリーンに映し、視覚的に理解させる（専門的な用語や内容・種類が多岐にわたるため）。 <b>【深い学び】</b> 1年次に行った朝夕の当番実習や、農場での栽培管理実習等から得られた体験を振り返らせ、その根拠や背景について話し合わせる。	<b>【対話的な学び】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>グループのメンバーは、くじを用いて毎時間変える。できるだけ多くのクラスメートと対話する機会をつくり、学級経営にも役立てる。</li> <li>くじを用いて、司会や発表、書記などの役割を割り振ることで、リーダーシップに乏しかったり、表現が苦手だったりする生徒の育成にもつなげる。</li> <li>グループでの話し合いに積極的に参加し、自分の意見を遠慮することなく発言できるように、それぞれの意見には正解も不正解もないことを意識づける。各グループからの発表後には、クラス全体から拍手が出るような助言をする。</li> </ul> ※1～4時間目も同様。	<ul style="list-style-type: none"> <li>プリントへの感想の記入、提出</li> <li>定期考査での記述式問題</li> </ul>
3・4	野菜の分類	<ul style="list-style-type: none"> <li>野菜を分類することが、栽培や利用の面でどのような利点があるのかを考える。</li> <li>分類方法を理解し、いろいろな野菜を分類できる。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、判断力、表現力】</b>	①4～5人のグループをつくる。 ②野菜の分類方法に加えて、「青森県における野菜産出額の順位」「東北各県における野菜産出額の順位」「青森県における農業産出額の構成」などのデータを活用し、各県・各地域における野菜栽培の特徴について話し合う。 ③話し合った内容についてグループごとに発表する。	<b>【主体的な学び】</b> 単年のデータだけでなく、数年、十数年にわたるデータを提示し、その背景にある理由について、「なぜ」という関心を抱かせる。 <b>【深い学び】</b> 青森県と他県のデータと比較させ、自分が住む地域の農業や産業の現状と特徴を「見る」姿勢を身につけさせる。また、その背景にある社会的・国際的な動きについても意識させる。		
5・6	野菜生産の現状と動向	<ul style="list-style-type: none"> <li>データの中から、目的に合った情報を抽出して分析するとともに、野菜生産の推移について論理的に捉え、総合的に考える。</li> <li>新聞記事などの資料を利用して総合的に考え、疑問や問題点に対する解決方法を考える。</li> </ul> <b>【技能、思考力、判断力、表現力】</b>	①4～5人のグループをつくる。 ②東日本大震災前後の「東北各県における農業産出額の順位」のデータや新聞記事を活用し、その背景や問題点を話し合う。 ③「野菜の安全性」の単元で学んだ「GAP」「HACCP」「GI」の意味を確認するとともに、青森県の「伝統野菜」を題材に、当地域における今後の農業のあり方について話し合う。 ④話し合った内容についてグループごとに発表する。	<b>【主体的な学び】</b> 地元紙の新聞記事を中心に、できるだけ多くの話題を提供し、自分の生活に直結する身近なテーマであることを認識させる。 <b>【深い学び】</b> 「GAP」「HACCP」「GI」の制度について議論させ、農業の大規模経営や中小規模経営の特徴、メリットとデメリットを理解させる。その上で、今後の農業の方向性について考える姿勢を身につけさせる。また、教科書では詳しく取り上げていない、農産物の輸出入にかかわる国際的視野も持たせる。		

\*佐々木先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

### 生徒の声



小向優希さん

友人と農業について議論すると、ただ教科書を読むより、専門用語を深く理解できる

ようになりました。野菜の栽培など、授業で学んだことを自宅で実践したくなるのも、知識が自分のものになっていくからだと思います。佐々木先生の授業で、農業がもっと好きになりました。話し合いでは、話すのが苦手な人が司会役になることもあります。そういった時はメンバー同士でサポートし合って、話し合いを進めています。そうした雰囲気が出てくると、植物科学科のよさだと思えます。

卒業までに専門知識をしっかりと身につけて、将来は、農場などで子どもたちと交流しながら、農業の楽しさを教えるような活動をしたいと考えています。



吉田瑠那さん

佐々木先生の授業では、普段あまり交流のないクラスメートともコミュニケーション

を取りながら、一緒に課題を考えていきます。最初は話し合いをうまく進められるか不安でしたが、自分とは違う意見を聞くことで新しい発見をすることも多く、次第に話し合いが楽しくなってきました。

今まで学んだ知識や考え方を基に意見が言えた時、成長を実感します。でも、話し合いがうまく進まない時には、自分の知識不足やデータの見方のつたなさを感じて、もっと勉強しなければと思うようになりました。

将来の目標は、花の栽培や販売の仕事に就くことです。フラワーアレンジメントのコンテストなどに積極的に参加して美的感覚と実務能力を磨き、夢を実現させたいです。



岩淵先生は「プリントと資料集は読んできたね」と生徒に確認してから授業を始めた。先生が用意した表計算ソフト上のシートの使い方を説明した後、実験を行う上で必要な既習知識を質問。それから、予習として課した本時の実験に関する大学入試の過去問題について、「実験中、この問題も見ながら実験で何が分かるのかを考えよう」と指示した。

●3年生の「化学」の「物質の変化と平衡」の全11コマのうち10コマ目（1コマは2時間）。過酸化水素を分解する実験を行い、表計算ソフトによる反応速度の計算やグラフの作成を通して、理論的理解を深めた（P.33に単元の指導計画を掲載）

# 生徒主体の実験を通して、 協働しながら問題を解決し、 事象の理解を深める力を育む

## 岩淵先生のアクティブ・ラーニング

学校でしかできない学びを追究し、  
実験と協働を重視して授業を構成

岩淵先生は、新任の頃から「学校でしかできない学び」を充実させたいと考え、実験や協働学習を重視する授業づくりをしてきた。

「自然界は人知の及ばない世界です。しかし、環境や条件を整え、自然界の一部を操作する実験を行うことで、未知の事象を解明したいとい



## 東京都立清瀬高校

岩淵 寛 いわぶち・ひろし

教職歴15年。同校に赴任して4年目。進路指導部代理主任。理科(化学)担当。剣道部・地学部顧問。私立高校等に務めた後、東京都立高校教諭に。日本理化学協会常務理事、東京都高等学校体育連盟剣道専門部総務委員なども務める。

## 東京都立清瀬高校

◎校訓は、「情熱・誠実・理想」。2019年度は、東京都教育委員会の「アクティブ・ラーニング推進校」「進学指導研究校」「海外学校間交流推進校」「スポーツ特別強化校」などの指定を受け、学校全体で教育活動の改革を推進している。

◎設立 1973(昭和48)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2019年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、北海道大、東京農工大、国際教養大、首都大学東京などに11人が合格。私立大は、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ414人が合格。

◎URL <http://www.kiyose-h.metro.tokyo.jp/site/zen/>

14:00 実験②



実験①が終わったグループは、条件の違いによる酸素の発生量の変化を確かめるため、過酸化水素水の温度と塩化鉄の濃度を変えて別の実験を繰り返した。岩淵先生の授業では使用が許可されているスマートフォンで、プリントに書かれた語句を調べる生徒もいた。途中、10分間の休み時間があったが、大半のグループは実験を継続していた。

13:35 実験①



過酸化水素水に触媒の塩化鉄を加えて発生させた酸素を、水上置換により捕集する実験を行った。グループごとに器具や試薬を準備し、実験の手順が書かれたプリント(図)を見ながら、器具の操作、データのパソコン入力など、グループ内で役割を分担して作業を進めていった。この間、岩淵先生は、各グループの様子を見て回った。

う思いを、生徒に育みたいと考えています。そこで、授業は実験を中心とし、生徒が自分の手を動かして思考する学びを大切にしています。実験で具体的なエビデンスを得ることで、抽象的な概念は自分のものになると考えています」

現在は、「化学基礎」と「化学」の授業で約60回の実験を行う計画にしている。実験の時間を確保するため、授業は2時間連続とし、教科書を読むことを予習として課し、授業では理解が難しい点に絞って解説する。生徒は、予習で分からなかったことを意識して授業を受けるため、理解が深まりやすくなるという。

また、事前に実験の手順やポイントが書かれたプリント(図)を配布し、それも予習として読ませる。実験前の説明は最低限にとどめて、生徒はプリントを見ながらグループで実験を進めていく。1年次は、生徒が実験に慣れていないため、使用器具や薬品についての説明はするが、2・3年次には、安全面を注意する程度にとどめ、分からない点は生徒同士で相談して解決するように指示している。

「高校の授業で行う実験は、大抵結果が分かっているものであり、ともすれば決まった手順をなぞるだけになります。そこで、生徒が自ら考え、問題を解決する場面を設けることで、実験の面白さを感じさせます。同時に、思考力や主体性を育てようとしています」

今回の授業では、触媒を加えて過酸化水素を分解させた際に発生する酸素量を計測する実験

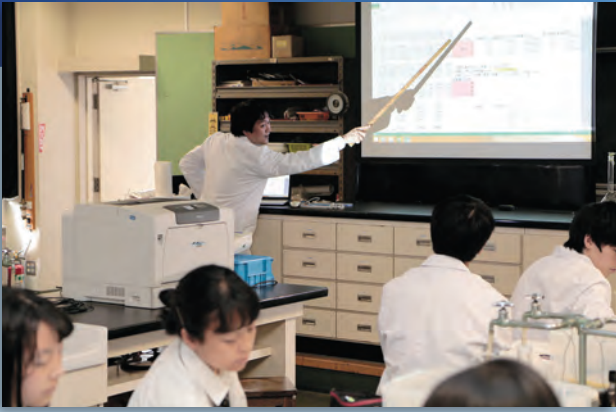
図 実験の手順が説明されたプリント。実験の結果を記入する欄もあり、考察の流れも分かる。\*学校資料をそのまま掲載。

を行った。その目的は、「化学反応の速度は、物質の濃度や温度などが影響する」ことの理解だ。岩淵先生は、その実験の目的を生徒には伝えず、実験中に「この結果を通して何が分かるのか、グループでよく考えて」と何度も声をかけた。そこには、実験に漫然と取り組むのではなく、その目的や意味を考えさせるねらいがあった。

思考の活性化・深化への配慮

答えを教えず自分で考えさせ、自力で問題を解決する力を育て

実験中、特に1年次は質問がよく出てくるが、



「実験で分かったことを考えてみよう」と、岩淵先生は表計算ソフト上のシートに入力したデータと作成したグラフをスクリーンに映して説明した。「表計算ソフトで自動的にできた計算を、人の手で行うように求めているのが、予習として課した大学入試の過去問題です。既に理論は理解できたはずなので、残りの時間で解いてみよう」と、問題に取り組ませた。



表計算ソフト上のシートに各実験結果を入力し、酸素発生量、過酸化水素濃度、過酸化水素の平均分解速度などのデータからグラフを作成して印刷。グループ内でその結果を見ながら考察し、分かったことをワークシートに記入した。岩淵先生は、「資料集や過去問題に同じグラフがあるよ。分かることを考えてね」と改めて問いかけ、生徒の思考や気づきを促した。

### 場づくりへの配慮

## 前提となる知識を予習させて、学び合いを活性化させる

岩淵先生は、生徒同士での協働学習は学校でしかできない学習経験の1つと捉え、主に実験を通じたグループでの学び合いを大切にしている。予習の段階で前提となる知識を共有していることから、授業では各自の考えを伝え合ったり、分からなかった点を確認し合ったりする学び合いが中心となる。そのため、学ぶ内容はレ

岩淵先生は「まずは自分で考えて」とあえて突き放す。すると、生徒は次第に自分で考えて解決するようになり、質問の頻度が減っていく。今回の3年生の授業では、生徒が岩淵先生に質問する場面は見られなかった。

「生徒からの質問の答えは、大抵教科書や資料集に書かれています。まず自分で情報を集めて考え、それでも分からない場合に質問するように伝えていきます」

岩淵先生は、授業中に生徒がスマートフォンで調べものをするのを許可している。インターネットで調べた情報を活用しながら、自分で考える経験を積み重ねることが問題解決力を育むと、岩淵先生は考えている。

「スマートフォンなどをうまく活用し、必要な情報を収集できるようにすることも、これからの時代に求められる資質・能力でしょう」

### 成果と課題

## 生徒同士で相談し、問題を解決して実験が完結できるように

ベルの高いものになることが多いと言った。学び合いが停滞していたら、「あそこのグループは、こんなことに気づいていたよ」などと、岩淵先生がほかのグループの考えや気づきを伝えて、学び合いが活性化するようにしている。

プリントの手順通りに実験を進めても、器具の操作の違いなどにより、予測通りの結果が出ないこともある。そうした場面でも、生徒は考えることをやめたり、すぐに先生に質問したりせず、グループ内で相談したり、資料を見直したりして原因を探り、問題を解決しながら実験を完結できるようにしていく。そうした生徒の姿から、思考力や主体性が着実に育成されていると、岩淵先生は手応えを感じている。

定期考査では、問題の約4分の1を資料などを読んで考える内容にし、思考力の伸びを確認している。

「授業で学習方法を示すことはできませんが、それを基に学びを深めていけるかどうかは、生徒個々の主体性にかかっています。身近なことに疑問を持ち、諦めずに理由を追究できる生徒を育てるために、主体性の育ちをどう数値化して把握するのも検討しながら、今後も授業を進化させていきます」

## 単元の指導計画

【教科・科目】理科・化学 【分野・単元】物質の変化と平衡 【テーマ・作品】化学平衡・反応の速さと仕組み 【設定時数】全11コマの中の10コマ目(1コマは2時間) 【単元目標】概念的な内容を演習や実験で具現化して計算や分析ができる力を育てる。

コマ	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	化学反応の仕組みと活性化状態、活性化エネルギー、反応熱について	<ul style="list-style-type: none"> <li>化学反応の進み方のグラフを理解し、反応熱や活性化エネルギーを求めることができる。</li> <li>化学反応の進み方に関心を持ち、学習意欲を高める。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性】</b>	講義形式とシチュエーション授業によって、化学反応の進み方を分析させる。また、時間変化に伴って濃度変化があることや、分子の衝突回数による化学反応の進行について、関心を持たせる。	<b>【主体的な学び】</b> 化学平衡は、数学的な処理に入ると学習意欲を失いやすいので、この段階では早まった指導をしない。 <b>【対話的な学び】</b> 生徒が分子のように教室を動き回り、生徒同士が衝突する状態から化学反応を考えさせる。 <b>【深い学び】</b> 生徒たちがモデルケースを考えたり、数学的処理をしながら深めたりして実験することで、抽象的なものを具体的に理解させる。	授業での積極的な取り組み
2	結合エネルギーと活性化状態、触媒について	<ul style="list-style-type: none"> <li>反応熱の結合エネルギーを求めることができる。</li> <li>触媒と多段階反応、律速段階について、また触媒の仕組みを理解する。</li> <li>概念的な思考力を高める。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性】</b>	化学反応が、原子の結合をすべて切ってから新たな結合を生み出すのではなく、活性化状態を作って進むことを、模型等を使って導き出させる。また、反応熱は結合エネルギーから求められることを理解させる。	<b>【主体的な学び】</b> 化学反応が活性化状態で進行することは、自分たちの人間関係と似ていると伝える。 <b>【対話的な学び】</b> 人文的な考察と、数理的な考察が結びつけられることを理解させる。 <b>【深い学び】</b> 学びは哲学に近いものだとして理解させる。2年次の復習を行い、本時の学習とつながることを理解させる。	問題を適切なアプローチで解くことができるかを評価
3	温度と濃度の変化による化学反応の進み方の違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>化学変化における温度と濃度の影響を考え、正誤問題が解けるとともに、アレニウスの式を理解する。</li> <li>文章題が解けるようになる。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】</b>	温度と濃度の変化による反応速度の違いについて、グループで考察させる。温度の上昇は分子の運動を早めるだけでなく衝突するエネルギーも大きくなることを、車の衝突をイメージさせて理解させる。反応の速さの式を理解させる。	<b>【主体的な学び】</b> 分子の衝突という抽象的な分野を、視点の違う2つの変数を扱うことで、計算という概念にまで発展させる。 <b>【対話的な学び】</b> 変数と定数のまどめは、生徒間に理解度の差が生まれるため、生徒同士で議論させる。 <b>【深い学び】</b> よい発問は中間指導をしながら拾い上げ、生徒全員に問いかける。また、拾い上げながら、生徒の状態に合わせて軌道修正する。	授業での積極的な取り組み
9	中和滴定曲線におけるpHの求め方と緩衝液	<ul style="list-style-type: none"> <li>中和滴定曲線の水素イオン指数の変化について理解を深め、問題が解けるようになる。</li> <li>加水分解定数を用いる場合と緩衝液を用いる場合の違いが判断できる。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性】</b>	中和滴定曲線について復習し、水素イオン指数の計算について考えさせる。緩衝溶液を導入した場合の水素イオン指数の求め方を問題演習から理解させる。	<b>【主体的な学び】</b> 水素イオン指数を求める必要性を、化学基礎の範囲を復習しながら意義付ける。 <b>【対話的な学び】</b> 前時と本時の内容が中和滴定曲線の中に存在することを気づかせ、生徒の対話を促す。 <b>【深い学び】</b> 数式変化による問題の解法は理解が難しいため、教師が手書きしたノートのコピーを授業の最後に配布し、生徒に安心感を与える。	問題を適切なアプローチで解くことができるかを評価
10	反応の速さの実験と講義・分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>過酸化水素の分解反応から、濃度計算やグラフ作成をパソコンで行い、計算問題を解くことで、理論を理解する。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】</b>	反応速度が濃度に影響することを、過酸化水素の分解反応から理解させる。表計算ソフトを使って複雑な計算とグラフの作成を行う。	<b>【主体的な学び】</b> 数学的処理が多いため、パソコンを利用し、大学生レベルの分析をさせる。 <b>【対話的な学び】</b> 実験内容を事前に予習させ、グループ内で検討を深めさせる。 <b>【深い学び】</b> 表計算ソフトを用意し、情報処理についても理解させる。	実験内の活動と、その内容を取り上げた問題演習をし、入試問題を解けるようにする。 ※11コマ目も「評価方法」は同様。
11	溶解度積の実験と講義・問題演習	<ul style="list-style-type: none"> <li>溶解度積の実験を通して、溶解度積と共通イオン効果を理解し、問題演習を通して理論を理解する。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】</b>	溶解度積を導入し、溶解度積の実験で、共通イオン効果について観察させる。	<b>【主体的な学び】</b> 実験後に解説し、内容を考察させながら理解させる。 <b>【対話的な学び】</b> 実験内容を予習させ、グループ内で検討を深めさせる。 <b>【深い学び】</b> 計算が実験結果と一致すること、抽象的な概念がより具現化されることを理解させ、分野を完結させる。	※11コマ目も「評価方法」は同様。

\*岩淵先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全11コマ分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp/>)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

### 生徒の声



**鈴木 泰生さん** 岩淵先生の授業は、予習することが前提です。毎回しっかり教科書やプリントを読んでから授業に臨んでいます。ただ、内容をすべて理解しておく必要はなく、分かったことや分からないことを把握しておけば大丈夫と、先生に言われています。予習してある程度の知識を持っていると、「きつとこうだろう」と予想しながら学べるので理解しやすく、予想と違った場合は「なぜだろう」と考えを深めていきます。

授業では、時間内に実験を完了させるために、次にすべきことを考えて行動するようにになりました。化学は暗記科目だと思っていました。実験の考察ではしっかりと考える必要があるため、知識と思考力の両方が求められると実感しています。また、メンバーの考えを聞くと、自分の考えが広がる感じがします。



**三浦 玉愛さん** 岩淵先生に初めて質問した時、「まずは自分で考えて」と返されて、とても驚きました。

それまでは、分からないことを質問するのが勉強だと思っていました。でも、自分で調べた後、それを基に考えると、自分で解決できることが意外に多いと気づき始めました。3年生になると、授業中、先生からの問いかけにはっと答えられることが多くなりました。知識が増えたからだけでなく、即座に考える力がついたからだと思います。

実験は、グループで楽しく話し合いながら進めています。もちろん、みんなで協力して進めないと、適正な結果が出ず、予定の時間内に終わりません。メンバー間で役割を分担することで、協力して活動する力もつきました。

大分県立大分豊府中学校・高校

多様な資質・能力の育成

# 「世界標準の学力」の育成に 向け、中・高の教師が目線を 合わせた指導改善を推進

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 2014年度、大分県教育委員会から思考力・判断力・表現力の育成についての研究指定を受けたことをきっかけに、多様な資質・能力から成る「世界標準の学力」の育成を強化することを目指す

### 実践内容

- 「主体的・対話的で深い学び」の推進 全学年の全教科・科目で「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりを推進。思考力・判断力・表現力を評価するルーブリックを作成し、全教科・科目で定期考査の出題を工夫したり、独自のアセスメント「JETテスト」(\*1)を開発したりするなど、指導と評価の一体的な改善に力を入れる
- 6年間を通じた探究学習を導入 生徒の学びに向かう力を高めることを目指し、中高6年間をかけて取り組む探究学習「ミラNavi」(\*2)を始める
- 主体的学習への意識づけを強化 高校では、自分の必要に応じた学習計画をスケジュール帳「きせきノート」(\*3)に立てるよう指導

### 成果と展望

- 自分の考えを練り上げ、適切に言語化する生徒や、自分の強みや課題を意識して学習する生徒が増加

## PROFILE



校訓に「感動 理知 友愛」を掲げる。国際社会で活躍できるよう、高い志を抱き、主体的に学び、行動する生徒の育成に力を入れている。2007年度、同県立大分豊府中学校を併設し、併設型中高一貫校となった。

設立	1986(昭和61)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	中学校1学年約120人、高校1学年約280人

2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、一橋大、京都大、九州大、大分大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ213人が合格。

住所	〒870-0854 大分県大分市大字羽屋600-1
電話	097-546-2222

Web site <http://kou.oita-ed.jp/oitahoufu/index.html>

## 生徒の多様な資質・能力を高め、 グローバル人材の育成を目指す

大分県立大分豊府中学校・高校は、旧帝大などの最難関国立大学に合格者を毎年送り出す県内屈指の進学校だ。国際社会に貢献できる人材を育てるべく、「世界標準の学力」「世界標準の人間力」「凛とした生活態度を基盤とした自律力」の総合的な向上を図っている(図1)。

「世界標準の学力」は多様な資質・能力から成ると、曾根崎靖校長は語る。

「変化の激しい現代社会では、従来にはなかった課題が出現しています。それらの課題に取り組む上で必要な新しいアイデアを生み出すためには、単に知識・技能を習得するだ

\*1 思考力・判断力・表現力を測るアセスメント。「Judgement」「Expression」「Thinking」の頭文字を取って命名。

\*2 「未来 Navigation」の略称。

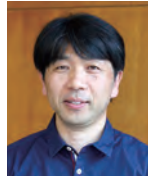
\*3 名称には、「日々の軌跡の振り返りを次の行動に生かすことが、奇跡的な成果につながる」という意味が込められている。

けではなく、知識・技能を臨機応変に活用することが求められます。また、考え方の異なる他者と協働できるよう、多様性への理解を深めたり、目標の達成に向けて試行錯誤を繰り返す粘り強さを身につけたりする必要もあるでしょう。そうした様々な資質・能力の育成を大切にするという方針は、大学入試改革や次期学習指導要領が目指すところとも合致すると考えています」

同校では、2014年度から3年間、同県教育委員会の「思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善についての実践研究」事業の指定を受けたことをきっかけに、「世



**校長 曾根崎 靖** そねざき やすし  
教職歴36年。同校に赴任して3年目。「自らの素直さや他者への誠実さ、そして粘り強い努力は、すべての可能性への扉を開く」



**教科統括領域主任 池邊良介** いけべりょうすけ  
教職歴30年。同校に赴任して2年目。国語科「生徒とともに学び、生徒とともに成長する教師でありたい」



**教務領域主任 西裕一郎** にし ゆういちろう  
教職歴21年。同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科。「人は魂の耕作者なり。一授業者として、日々の研鑽を忘れずにいたい」



**進路領域主任 中原久典** なかはら ひさおり  
教職歴20年。同校に赴任して16年目。数学科「『立たされた所で泉を掘る』。どのような状況でも前向きに挑戦する生徒を育てたい」

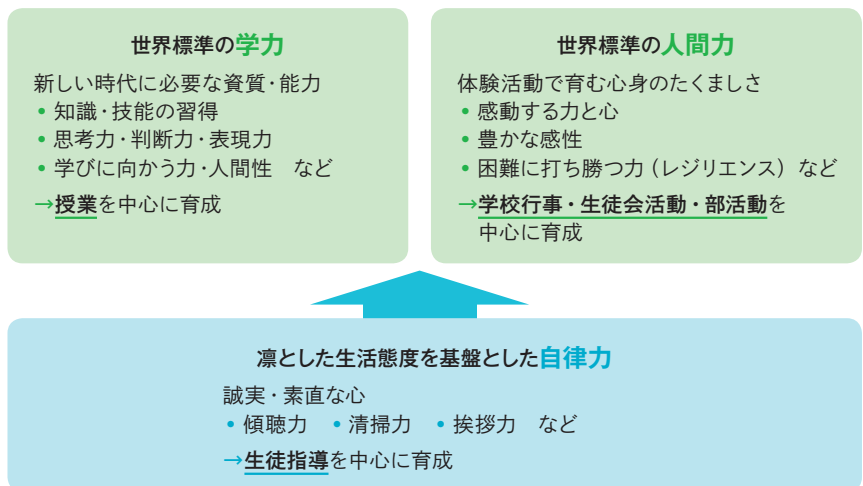
界標準の学力」の育成を強化。全校体制で指導改善を推進することにした。

### 中・高の教師が互いの指導の強みを学び合い、新しい授業づくりを推進

生徒の思考力・判断力・表現力を育成できるように力を入れているのが、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりだ。全学年の全教科・科目の授業で、生徒に深い思考を促したり、話し合いや発表をさせたりする場面を積極的に設定している。ICTの活用も推進したことで、教師による解説や板書の時間が短くなり、生徒の協働学習などにより多くの時間を充てられるようになった。自分の授業スタイルを変えることに戸惑う教師もいたが、次第に前向きになっていったという。その要因としては、週1回、教科ごとに中・高の全教師が集まる合同教科会議など、中・高が連携して指導を検討する機会が充実していることが大きかったと、教務領域主任の西裕一郎先生は振り返る。

「中・高の教師が協働することで、中学校籍の教師は、高校籍の教師の強みである専門性の高い指導を、高校籍の教師は、中学校籍の教師の強みであるきめ細かな指導を学び合えます。また、ほかの教師の発問の仕方やICTの使い方などを見る機会も少なくありません。そうした中で、教師一人ひとりに自分の指導を改善していこうという意識が醸成されていきました」

図1 大分豊府中学校・高校が大切にしている3つの力(2019年度)



\*学校資料を基に編集部で作成。

新しい授業づくりにあたっては、思考力・判断力・表現力の評価の基準や観点を確立する必要があった。そこで、合同教科会議で議論を重ね、各教科・科目のルーブリックを作成した。「ルーブリックの検討を通して、教科団として生徒にどのような資質・能力を育成したいのか、共通理解が深まりました。そうした根本的な議論を行ったことで、指導のノウハウだけでなく、『育てたい生徒像』も共有

図2 2018年度3学年1学期末考査の国語(現代文)の問題と解答例・採点基準(抜粋)

問い[6点]

課題文の冒頭では、「誰かとつながりたい」という思いを持つ人々が電車の中で携帯電話をチェックする姿が取り上げられているが、この現象についてAさんが次のように疑問を述べた。その疑問に対して筆者の立場から50字以内で答えよ。

**Aさんの疑問** 「誰かとつながりたい」という思いを持っているのなら、実際に会って話をすればよいのではないか。携帯電話でつながろうとするから、一層うわべだけのつき合いになって自己存在感が得られないのではないだろうか。

解答例・採点基準

◎解答例

●自己存在感の危機を恒常的に感じているので、<sup>a</sup>うわべだけでも、常に誰かとつながっていたい<sup>b</sup>と考えるため。

◎採点基準

- a…生活上のコンテクストの喪失、自己存在の危機・喪失という状況を踏まえている。
- b…携帯電話の特質(「常時」「手軽に」「遠くの人と」「幅広く」つながることができる)が、実際に会うことより有効であることが示されている。

※ a・b各3点。bがなければ全体0点。aとbの論理的齟齬は2点減。文末不備は1点減。

\*学校資料を基に編集部で作成。

生徒の思考力・判断力・表現力を客観的に把握し、指導改善に生かす

授業づくりの進展に伴い、定期考査でも思考力・判断力・表現力を測る問題を課すようになってきた。現在は、全教科・科目で毎回必ず出題して

され、中・高の教師間で目線の合った指導改善の実現につながりました」(西先生)

いる。国語では記述式問題を工夫していると、教科統括領域主任で国語科の池邊良介先生は話す。

「以前の定期考査でも記述式問題を出していましたが、授業での学習内容を覚えていけば対応できる問題が多かったと思います。そこで、授業で扱った内容に関連する別の内容を出題するなど(図2)、生徒にその場で考えさせる問題を取り入れています」

思考力・判断力・表現力を客観的な指標で把握できるよう、アセスメントも活用している。具体的には、中学校で「中学総合学力調査」(＊4)を導入し、その結果を指導に反映させている。さらに、17年度からは、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語の各教科の合同教科会議で独自のアセスメント「JETテスト」の開発に着手。18年度に、中学3年生～高校3年生を対象として1回実施した。19年度からは全学年で年1回実施する予定だ。

「思考力・判断力・表現力がより求められる『大学入学共通テスト』に向けて、さらなる指導改善を図るため、生徒の実態把握を強化したいと考えました。同テストの試行調査の問題を分析しながら、『JETテスト』の開発を進めています」(池邊先生)

探究学習で課題発見力を育み、生徒に将来の目標を考えさせる

18年度からは、「世界標準の学力」のさらなる向上を図るために、2つの取り組みを始めた。

1つめは、課題発見力と問題解決力を身につけられるよう、中高6年間をかけて行う探究学習「ミラゾギ」だ。「総合的な学習の時間」を中心に、中学1年次～高校2年次までは、「大分県」「地域との共生」といった段階的なテーマの下、グループで文献調査やフィールドワークなどに取り組み、地域や社会の課題を探りながら、自分たちにできる具体的な方策を考える。その内容は定期的にレポートなどにまとめ、クラスや学年集会で発表する。

「社会に出れば、他者からの指示に従うだけではなく、主体的に課題を見つけ、問題解決を図る必要があります。そこで、生徒自身が『問いを生み出す』練習を積めるよう、『ミラゾギ』を始めました。生徒はグループ活動を通して、1つのテーマでも、問いの立て方によっていくつもの見方ができることに気づき、視野を広げていきます」(池邊先生)

学校行事の内容も、「ミラゾギ」の趣旨に応じて見直した。例えば、高校2年次にカナダに行く修学旅行では、文化の違いや国のあり方などについて考えを深められるよう、現地の大学生や高校生との交流活動などを取り入れた。

そして、高校3年次には、生徒一人ひとりがそれまでに探究した内容をまとめ、自分の指す社会貢献についての論文を作成する。それには、広い視野から社会を捉え、将来の目標を考えさせようというねらいがある。

\*4 ベネッセのアセスメントの1つで、「教科の思考力・判断力・表現力」を測定し、レベル別・段階別評価を行うテスト。国語・数学・英語に加え、教科融合型のテストも含まれる。

## スケジュール帳を改良し、主体的学習にこだわらせる

2つめの取り組みは、高校において主体的に学習する姿勢を身につけるための、学習計画作成指導だ。

「本校の生徒は、教師に指示された学習にしっかりと取り組みますが、指示を受けて動くだけでは、国際社会のリーダーは務まらないでしょう。本校が目指すのは『世界標準の学力』です。生徒には、学習の必要性を自覚し、学習を通して、自分の強みを伸ばしたり、苦手を克服したりすることができるようになってほしいと考えています」（曾根崎校長）

18年度には、全教科・科目で課題の分量を減らすとともに、生徒が自分で時間を管理する習慣が身につくよう、学校オリジナルのスケジュール帳「きせきノート」に毎週の学習計画を立案させた。それは、生徒が自己管理の一環として以前から活用していたもので、週ごとに自分の目標を書く欄や、毎日の学習時間を記録する欄などから成る。毎朝のホームルームで担任が回収し、内容を点検してコメントを書いた後、生徒に返却している。19年度からは、生徒が自分に必要な学習をより意識できるように改編し（図3）、毎日の学習で主体的に取り組みたい教科・科目とその内容を書く欄などを新設した。進路領域主任の中原久典先生は、「きせきノート」の役割をこう述べる。

図3 「きせきノート」(2019年度版)

理科	地歴公民	合計	主体的学習時間
0 分	200 分	370 分	390 分
10 分	240 分	725 分	725 分
45 分	290 分	740 分	740 分
0	20	305	2

毎日の学習時間を記録する欄には、自分で見つけた課題に取り組んだ時間を記入する「主体的学習時間」の項目を新設した。

\*学校資料を基に編集部が一部改編。図3に示した「きせきノート」のページの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp>)でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

「『きせきノート』には、担任と生徒とのコミュニケーション・ツールとしての役割もあります。生徒の変化を早く、適切に把握し、頑張っていれば褒め、課題があれば励ます担任が目立ちます。担任からの声かけにより、学習に意欲的になる生徒も少なくありません。そうした関係を生かし、見えにくい資質・能力である『学びに向かう力』の向上を図りたいと考えました」

19年度からは、各学年の単位数を以前の35単位から32単位へ変更し、生徒が自由に使える時間を増やし、高校の全学年で毎日の始業前8時00分～8時20分に設定されている「Hofu Time」の内容も工夫した。具体的には、週に1回、NIE(\*5)を取り入れ、高校1年次には、英語のスピーキング活動に力を入れるが、高校2・3年

次には、「きせきノート」に計画を立てた教科・科目の主体的学習を中心に取り組ませることにした。金曜日は、全学年で翌週の計画立案の時間とし、「きせきノート」に目標の達成状況や日々の学習の中で感じた課題を書くとともに、翌週の目標と学習計画を立てさせている。

「以前から、自分の強みと課題を踏まえて学習計画を立て、実践する生徒もいました。全生徒がそうした主体的な学習を確立し、メタ認知を深められるようになることを目指しています」（中原先生）

## 生徒や社会の変化に応じながら、よりよい指導を追究していきたい

一連の指導改善を通して、生徒には多様な資質・能力が育まれている。例えば、自分の考えを整理し、堂々と述べられる生徒が全学年で増えた。高校では、休み時間や放課後に教師に質問をしたり、始業前や放課後に自習をしたりする生徒が多くなり、主体的な学習が定着しつつあることがうかがえる。今後は指導改善をさらに発展させていく決意だと、曾根崎校長は語る。

「指導改善は、生徒や社会の変化に応じて続けていくことが大切です。現在のように変化が急速に進む社会では、その必要性がさらに高まるでしょう。本校には、中・高の教師が協働して指導力を高めるといった文化が根づいています。よい伝統を継承し、今後も先生方と力を合わせていきたいと考えています」

\* 5 News paper In Education の略。新聞などを教材として活用する教育活動。

沖縄県立久米島高校

地域と連携した学校づくり

「選ばれる学校」を目指し、  
学校と地域が一丸となつて  
魅力ある教育活動を実現

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 地域の人口減少の影響により、入学者の定員割れが常態化する中、久米島町教育委員会、議会、商工会などの有志と学校が連携し、同校の魅力化を図る改革に着手

### 実践内容

- **魅力ある授業づくりの推進** 地域と連携し、魅力ある授業づくりに力を入れた。その1つとして、生徒の視野を広げ、進路意識を醸成できるよう、地域についての探究学習「まちづくりプロジェクト」やインターンシップなどを推進
- **「離島留学」の実施** 島外の中学校から同校への入学者を募集する「離島留学」を実施。離島留学生は、町営寮に住んだり、久米島町内の住民の家庭にホームステイをしたりしながら同校に通う
- **町営塾「久米島学習センター」との連携** 町営塾と連携した教科指導や進路指導などを展開し、生徒一人ひとりへのきめ細かな指導を強化

### 成果と展望

- 生徒の地域への関心が深まった
- 同校の魅力が伝わり、離島留学生が増加

島内外からの入学者を増やすため、  
魅力ある学校づくりを図る

普通科と園芸科から成る沖縄県立久米島高校は、沖縄本島から西へ約100kmの場所に位置する久米島で唯一の高校だ。久米島は、海岸にサンゴ礁が生息するなど、豊かな自然に恵まれていることもあり、毎年多くの観光客が訪れる。一方、島内の少子高齢化や人口減少は深刻化しており、同校では入学者の定員割れが続くようになった。そうした中、2009年度には、同県教育委員会から、募集定員を縮小するための、園芸科の廃科が提案された。「園芸科がなくなれば、地域の衰退に拍車がかかってしまう」と、当時の同校の教師たちは大きな危機感を持った

## PROFILE



沖縄県立糸満高校久米島分校として設立。校訓に「剛健進取・忍耐持久・自律協和・誠実勤勉」を掲げ、地域社会に貢献できる人材を育成できるよう、豊かな人格の完成と個性に応じた能力の伸張を重視した教育活動を行っている。

設立 1946(昭和21)年

形態 全日制/普通科・園芸科/共学

生徒数 1学年約70人

2019年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、和歌山大、琉球大、名桜大に3人が合格。私立大は、玉川大、早稲田大、関西外国語大などに延べ22人が合格。短大、専門学校進学30人。就職22人。

住所 〒901-3121 沖縄県島尻郡久米島町字嘉手苅727

電話 098-985-2233

Web site <http://www.kumejima-h.open.ed.jp>

と、園芸科で農場長の宮城栄先生は言う。

「久米島では、サトウキビや菊などの栽培が盛んで、地域経済の中軸に位置づけられています。そうした中、本校の園芸科は、地域の農業を支える人材を育成する役割を果たしてきました。園芸科がなくなれば、地域の基幹産業の担い手が思うように育たなくなり、島のさらなる衰退を招くと考えられます」

また、園芸科は、以前から地域に親しまれる取り組みを多く行ってきた。毎年10月に開催さ



沖縄県立久米島高校校長  
**石原 啓** いしはら・あきら

教職歴31年。同校に赴任して1年目。「互いの違いを認め、尊重し合えることが『格好よい』ことだと、生徒に気づかせたい」



沖縄県立久米島高校  
**宮城 栄** みやぎ・さかえ

教職歴19年。同校に赴任して3年目。農場長。「実習を通して知識や技術を身につけさせ、社会で通用する生徒を育てたい」



沖縄県立久米島高校  
**西銘 伸悟** にしめ・しんご

教職歴7年。同校に赴任して2年目。離島留学担当。「『師弟同行』。生徒と苦楽をともにし、生徒の成長を最大限支援していきたい」



沖縄県立久米島高校  
**大工 廻朝陽** たくえ・あさひ

教職歴5年。同校に赴任して2年目。「総合的な学習の時間」担当。「生徒たちの能力を最大限に引き出せる教師でありたい」



久米島学習センター塾長  
**新井 直樹** あらい・なおき

文系科目、小論文、推薦入試指導を担当。「深い対話を通して、生徒も自分も成長していくのが教育」

れる「久米島マラソン」のコース沿道に、園芸科の生徒たちが育てた花を飾ったり、校内で栽培した野菜などの販売を実施したりしているのは、その代表例だ。地域産業へのデメリットに加え、そうした取り組みへの支持もあり、地域で廃科反対の署名活動が行われた結果、廃科案は保留となった。

園芸科が廃科の危機に直面したことをきっかけに、同町の教育委員会や議会、商工会などの有志から成る「久米島高校の魅力化と発展を考える会」が発足。同会と連携した学校改革に着手したと、石原啓校長は語る。

「私は1989年度から3年間、教諭として本校に勤務していました。当時は5クラスを設置した学年もありましたが、現在は生徒数が減り、各学年で3クラスしか編成できない状況です。島内外から入学者を増やし、学校に以前のような活気を取り戻せるよう、地域と力を合わせ、魅力的な学校づくりを推進したいと考えました」

## 生徒の地域への関心を高める 「まちづくりプロジェクト」

同校の改革には、3つの柱がある。

1つめの柱は、魅力ある授業づくりだ。その一環として、週1回ずつの「総合的な学習の時間」とLHRでは、3年間を通して生徒の視野を広げるとともに、進路意識を醸成する取り組みを行っている。

まず、1年次から2年次の1学期までは、探究学習「まちづくりプロジェクト」を通して、地域の課題と向き合わせる。そして、2年次の2・3学期には、地域企業へのインターンシップに加え、農家や観光協会など、地域の特色ある産業分野で活躍している人たちが自らの職業のやりがいを語る「久米島キラ人講話」などを行い、将来を具体的な職業と結びつけて考えさせ、3年次には、大学入試対策や就職対策など、生徒の希望進路に応じた指導に力を注ぐ。「総合的な学習の時間」担当の大工廻朝陽先生は、取り組みのねらいをこう説明する。

「島内の小・中学校では、久米島についての調べ学習を行っています。そこで学んだ知識を活用し、地元への理解をさらに深められるよう、1年次には地域についての探究学習を行うことにしました。そして、2年次からは、地域の課題と向き合った経験を生かして地域の産業や経済などへと関心を広げ、生徒が社会で自分のやりたいことを考えられるよう、段階的なカリキュラムを策定しました」

「まちづくりプロジェクト」では、生徒が数人ずつのグループになり、人口減少や産業の乏しき、観光業振興の必要性といった同島の課題の中から、自分たちが探究したいテーマを設定。地域でのアンケート調査やインタビューなどを通して、問題の解決策を練り上げていく。

「探究学習に取り組む中で、生徒は地域の現状を改めて見つめ、自分たちにできる地域



写真「まちづくりプロジェクト」では、何のために、どこで、どのような調査をするか、すべて生徒が話し合っ  
て決める。久米島の特色を明確に意識できるよう、地域  
住民だけではなく、観光客らにもインタビューを行  
うグループもある。

貢献を考えます(写真)。地域の課題を自分事  
として捉えられるようになれば、地域への愛  
着も深まり、地域を支えようとする意欲につ  
ながると考えています(大工廻先生)

探究内容を発表する機会も定期的に設け、1  
年次2月の中間発表会では学年全体、2年次7  
月の最終発表会では全校生徒に対して、地域の  
問題解決策についてのプレゼンテーションを行  
う。最終発表会では、同町の町長や教育長らを  
審査員として迎え、1グループに優秀賞を贈る。  
18年度には、地域振興策として、地元の伝統工  
芸品である久米島紬(\*1)を用いたスマート  
フォンのケースの製作・販売を提案したグル  
ープが同賞に輝いた。

今後は、他地域との交流も視野に入れていく。  
その1つとして、19年度の優秀賞を獲得したグ  
ループを「全国高校生マイプロジェクトスタ

トアップキャンペーン(\*2)に派遣する予定だ。

「他地域で行われている地方創生の取り組  
みを知ること、生徒は刺激を受け、地域  
への関心をより深めるでしょう。そうした  
生徒が増えていけば、『まちづくりプロジェ  
クト』はさらに充実していくと期待していま  
す」(石原校長)

### 離島留学生から刺激を受け、 学びを深める生徒たち

2つめの柱は、島外の中学校から同校への入  
学生を募集する「離島留学」だ。生徒数を増や  
したいと、2013年度に始めた。離島留学生  
の選考では、同町役場の職員による書類審査や  
面接により十数人に絞られた後、同校の入学試  
験(一般入試)を行う。現在では、東北地方や  
関東地方といった様々な地域から数十人の応募  
があり、毎年10人前後が合格している。大工廻  
先生は、離島留学生を迎える意義をこう話す。

「島内出身の生徒は、幼少期から人間関係  
がほぼ固定されているため、ものの見方や  
考え方が単一になりやすい傾向があります。  
しかし、全国から集まった離島留学生とも  
に学ぶ中で、価値観の多様さに気づいていき  
ます。また、久米島に広がる自然や点在する  
遺跡は、島内出身の生徒にはあたり前のもの  
ですが、離島留学生は貴重なものだと感じま  
す。それらに強い関心を示す離島留学生の姿  
を見ることをきっかけに、地域の魅力に目を

向けるようになる島内出身の生徒も少なくあ  
りません」

離島留学生は、町営寮「じんぶん館」(\*3)  
に住むか、町内にホームステイをする。親元を  
離れて生活しているためか、「自分のことは自  
分です」といった自立心を持つ生徒が多いと  
いう。東京都などで中学3年生を対象に実施し  
ている離島留学の説明会では、そうした留學生  
の生活を紹介していると、離島留学担当の西銘  
伸悟先生は述べる。

「説明会に参加した中学生と話していると、  
『自分は親元を離れてやっていると分かってい  
る』といった不安を抱えていることが分かりま  
す。また、寮での人間関係を心配する中学生  
も少なくありません。そこで、中学生が島で  
の生活を具体的にイメージできるように、離島  
留學生の卒業生を説明会に招き、寮やホーム  
ステイ先での経験を語ってもらっています」

### 町営塾とともに生徒を見守る体制を 確立し、きめ細かな指導を強化

3つめの柱は、「じんぶん館」に併設された  
町営塾「久米島学習センター」との連携だ。同  
センターには5人の専任講師が常駐し、離島留  
學生を含む同校の生徒を対象に、平日は毎日、  
授業の補習や定期考査対策、大学進学や就職対  
策などの個別指導を実施している。同校では、  
小規模校の強みを生かし、きめ細かな教科指導・  
進路指導を行っているが、同センターと力を合

\*1 15世紀に始まったとされる、久米島産の紬による織物。天然染料による染色や手織りなどの技術に、琉球王朝以来の伝統が受け継がれており、それらの技術は国の重要無形文化財に指定されている。

わせることで、そうした特色をさらに強めるねらいがある。例えば、具体的な進路についての検討が本格化する2年次後半からは、同校の進路指導部の教師や担任団と、同センターの専任講師全員が集まり、生徒一人ひとりについての指導方針を議論している。同センターの役割を、新井直樹塾長はこう語る。

「生徒には、一人ひとり違った強みがあります。それらを適切に把握し、伸ばしていくためには、なるべく多くの大人の目で生徒を見るのが欠かせません。そこで、指導してみていることは同校の先生方とこまめに共有しています。また、推薦・AO入試などで求められる志望理由書や小論文の添削指導には、時間がかかります。本センターの講師もそれらを担当することで、先生方の負担を減らすとともに、生徒へのフィードバックを充実させられると考えています」

講師がファシリテーターとなり、「あなたが理想とするかっこいい大人」など、様々なテーマについて生徒同士が議論する「ちゅらゼミ」も、月1回実施している。地域住民や島外の大学生らを特別講師として招き、議論に参加してもらうこともある。

「生徒の視野をより広げられるよう、多様な見方・考え方を知る場をつくりたいと考えました。そこで、『ちゅらゼミ』では、答えが1つではないテーマについて、生徒たちに考えさせています」(新井塾長)

生徒・卒業生が語る

久米島高校で得られた **成長実感**

普通科2年 **田場成海**さん

挑戦することの大切さを学んだ

私たちのグループは、「まちづくりプロジェクト」で、久米島の観光業をより活性化させる方策を探究しています。

課題を設定する時に、観光客や地元の方に「久米島のよさ」についての聞き取り調査を行ったところ、「のんびり過ごせる場所」という回答が多く得られました。そこで、その魅力を生かした観光のあり方をグループで検討した結果、自然の中でのんびり過ごすために行う「グランピング」によって観光客の誘致を図るというアイデアが出ました。

探究学習を通して、久米島に様々な仕事があることを知っただけではなく、資金の集め方などを自分たちの力で考えて実践したことで、久米島への理解がさらに深まり、自分の進路検討にも生きています。知らない人に聞き取り調査をするのは、とても緊張しましたが、新たなアイデアにつながるヒントを得ることができたので、やってよかったと思っています。勇気を出して挑戦することの大切さを学びました。

和歌山大学観光学部1年 **大澤こみち**さん(2018年度卒業生・離島留学生)

本当にやりたいことを見つけ、積極的になれた

東京都出身の私には、広い空や青い海があり、琉球王朝の古跡が豊富な久米島での生活は、感動の連続でした。そうした中、「久米島の素晴らしさを多くの人に伝えたい」という思いが次第に強くなっていったことをよく覚えています。

そこで、沖縄県による観光促進事業に参加し、沖縄本島からの観光客と島内を巡るツアー企画を立案しました。自分のお勧めスポットを盛り込みながらコースを決めるのが面白く、また、久米島の魅力をPRするお手伝いができるというやりがいも感じました。それがきっかけで、大学で観光学を学ぼうと考えるようになりました。

東京都で生活をしてきた中学時代までの私は、自分のやりたいことを見つけ、その実現に向けて積極的に動くようなタイプではありませんでした。そうした私が変わったのは、久米島で本当にやりたいことに出会えたからだと思っています。

生徒から選ばれ続ける学校づくりを  
今後とも推進していきたい

3つの柱による改革は、着実な成果を上げている。その1つが、生徒の変化だ。未知のことに挑戦をしたり、本当に進みたい道を選択したりする生徒が増えた(左コラム)。また、生徒の地域への関心も高まっているという。

「以前は、『島外に出た時に久米島について聞かれても、何も答えられなかった』と話す生徒が少なくありませんでした。しかし、現在の生徒たちは、それぞれが知っている久米

島のこと、抱いている久米島への思いを語れます」(大工廻先生)

離島留学の希望者の増加も、大きな成果だ。以前は数人だったが、前述した通り、現在は全国各地から数十人の応募がある。同校の魅力が発信できていることの表れであると言えよう。

今後について、石原校長はこう語る。

「地域と連携することで、本校には様々な教育活動を実現しやすい環境が整いつつあります。今後もしやそうした環境を生かし、多くの生徒に選ばれ続ける学校づくりに力を入れていきたいと考えています」

\* 2 認定特定非営利活動法人カタリバが全国の高校生を対象に実施している探究型学習プログラム「全国高校生マイプロジェクト」の活動の1つ。「マイプロジェクト」とは、自分の「こうあってほしい未来」を実現するための計画のこと。  
\* 3 「じんぶん」は、「知恵」という意味の沖縄方言。



# 2年生 2学期 ポートフォリオ

## After



### ■ポートフォリオ

能代高校で身につけてほしい資質・能力

①学力・教養 ②思考力 ③提言力(課題発見力・課題解決力) ④質問力 ⑤協働力(コラボレーション力) ⑥自己管理能力(自律力) ⑦向上力 ⑧自己肯定力(自尊心)

上記8つの資質・能力を身につけた上で、さらに獲得してほしい2つの資質

①キャリアデザイン・キャリアマネジメント ②シチズンシップ

振り返りの参考となる資料

授業や行事の振り返りシート、探究学習の振り返りシート、部活動ノート

### 改良ポイント

#### 1 学校が育成を目指す資質・能力と、振り返りに活用できる資料を示す

自分が身につけるべき資質・能力を意識して振り返りができるように、学校が育成を目指す資質・能力を明記。また、振り返りに活用できる資料も示して、様々な場面で書きためてきたポートフォリオを見返すように促す。

#### 2 主体的に取り組んだ活動について、そのプロセスを振り返りながら自己評価させる

プロセスも含めて活動を振り返らせることで、活動前後の自分の変容をメタ認知させる。さらに、振り返りを踏まえて将来を考えさせ、次年度の展望を描かせる。

#### 関連する指導ツール

- ▶ 2017年度2月号「志望理由シート」
- ▶ 2018年度10月号「学期リフレクションシート」  
こちらもご活用ください

#### ■教科学習

自分が主体的に学習に取り組んだ教科・科目	それを通じてできるようになったこと、成長したことは何ですか。上記の資質・能力を意識して書きましょう。	左記の資質・能力が高まった、成長したと思う根拠を書きましょう。

#### ■探究学習

自分が主体的に取り組んだ内容	左記を通じてできるようになったこと、成長したことは何ですか。上記の資質・能力を意識して書きましょう。	左記の資質・能力が高まった、成長したと思う根拠を書きましょう。

#### ■特別活動(学校行事、ホームルーム活動、生徒会活動)

自分が主体的に取り組んだ活動	左記を通じてできるようになったこと、成長したことは何ですか。上記の資質・能力を意識して書きましょう。	左記の資質・能力が高まった、成長したと思う根拠を書きましょう。

振り返りの項目はほかに、「部活動、課外活動」「進路にかかわる課外活動」

◎上記の成長を踏まえて、自分が将来どのように生きたいのか、どのようにありたいのかを、理由も踏まえて書きましょう。

次ページでは、  
3人の先生方の  
検討の様子を  
ダイジェストで紹介!

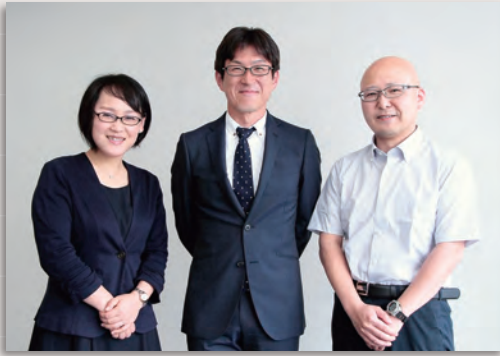
主体的に取り組んだ成果を  
プロセスも踏まえて振り返る

今回のツールは、2年次の2学期での活用を想定。高校3年間の折り返し地点で何ができて、何ができていないのか、生徒に自身の成長を、プロセスを踏まえて言語化させることで、高校生活の後半で希望進路に向けて何をすべきか、自覚を促すツールに改良した。生徒のメタ認知能力を高めるため、記入する活動を自分で選べるようにした。ただ、改良前は、「宿題」といった学校が課したことも記入できたが、改良後は「主体的に取り組んだこと」とハードルを設けた。また、シートの上には、振り返り時に意識できるように、学校が育成を目指す資質・能力を示し、経験を漏れなく掘り起こせるよう、振り返りの参考となる資料も提示した。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

## 2年生 2学期 ポートフォリオ



## 活用の流れ

- 1 生徒各自に  
これまで書いた振り返りシート、  
ポートフォリオなどを持ち寄らせる
- 2 生徒にシートを配布し、記入させる。  
必要に応じて、  
生徒間で相互評価を行う
- 3 生徒が記入した内容を担任が確認。  
面談指導などで、  
今後に向けたアドバイスを

成長のプロセスの言語化が、  
自信と今後の行動につながる

まず議論したのは、ツールの役割だ。各活動のポートフォリオは既にあるため、総合的な振り返りが必要な時期を話し合った結果、3年生0学期の志望校決定に向けて学びを整理させようと、2年生2学期での活用を想定。さらに、大学入試のためだけでなく、生徒が自身の成長をメタ認知するためのポートフォリオであることを踏まえ、活動の前後での成長とそのプロセスを言語化する書式とした。そして、自身の成長と将来を結びつけて考える項目を入れた。記入する活動については、自発的にかかわった事柄について考えさせたい

と、「自分が主体的に取り組んだこと」に表現を改めた。書くことが少ない生徒がいても、進級前に志望を考えるための材料が乏しいことへの危機感を促した方がよいという認識で一致した。そして、資質・能力の成長を可視化できるよう、学校が育成を目指す資質・能力、または学力の3要素を示すこととした。ツールの活用については、教師との面談、生徒間での相互評価など、他者評価を取り入れる必要性が提案された。3年生での担任もこのツールによって生徒の学習履歴や希望進路が把握でき、指導しやすいといった声も上がった。このツールを機に、プロセス評価の重要性を理解し、評価観の意識転換が図ればといった期待も寄せられた。

## 検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

## プロセス重視の指導にもつなげたい

秋田県立能代高校 吉田英亮 よしだ・ひであき



本校では、2年次11月の探究学習が一段落した時にシートを記入させたいと思います。1年半の自己の成長を認識させた上で、将来について掘り下げて考えさせ、面談ではこのシートを基に自己評価と教師による評価の結果との違いを伝え、3年生ですべきことを言語化させます。自己評価という具体的な材料があるので、担任も生徒が今後取り組むべきことを指摘しやすいはずです。また、生徒が身につけたと考えている資質・能力を記入することで、学校教育目標の到達度も可視化できるでしょう。さらに、シートの記入に向けて、授業や行事などの日々の振り返りの徹底を図っていきます。探究学習の指導では、先生方にプロセスの重要性を伝えてきました。このシートを評価の核とすることで、指導はよりプロセスを意識したものとなるはずです。その考え方が浸透したら、育成を目指す資質・能力のルーブリックを作成したいと考えています。活動と資質・能力の結びつきを教師や生徒に意識させ、活動の質を高めていきたいです。

吉田先生プロフィール 教職歴20年。同校に赴任して14年目。進路指導主事。探究活動推進委員長。「生徒に良質な『対話』と『出会い』を」学校プロフィール 全日制/普通科・理数科/共学/1学年約2300人/2019年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、北海道教育大、弘前大、東北大、秋田大などに67人が合格。私立大は、東北学院大、青山学院大、東海大、東京理科大などに延べ182人が合格。

## 振り返りを基に、思考を深めさせる問いかけを

静岡県立下田高校 稲葉 渉 いなば・わたる



3年生進級時までには志望校を決めるとなると、2年生2学期は重要な時期です。その時期は、自身の将来に向き合い切れていない生徒もまだいますから、このシートの記入を通して自分の学びを整理させ、自分が主体的に取り組んだことと志望校で学べることに食い違いがないかを、3年生になる前に考えさせます。志望校のアドミッション・ポリシーとも関連づけて振り返りをさせれば、大学入学後の学びがより有意義なものになるはずですが、振り返りには材料が必要です。入学後、生徒にこのシートを配布し、1年半後に記入できる経験や気づきがあるように高校生活を送ることが重要だと説明し、日頃の振り返りの必要性を認識させることにつなげたいです。

シートの活用では、生徒に深い思考を促す問いかけを、教師がいかにできるかが重要です。成長につながる経験をしていても、生徒が気づいていないこともあるからです。ポートフォリオの活用においては、教師のコーチングの役割が一層重要になるでしょう。

**稲葉先生プロフィール** 教職歴24年。同校に赴任して2年目。進路指導主事。地理歴史・公民科。「生徒や学校を、地域など様々なものとつなぎながら、生徒の確かな成長を実現させたい」

**学校プロフィール** 全日制、定時制/普通科・理数科/共学/1学年約210人/2019年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、千葉大、横浜国立大、静岡大、奈良女子大、広島大などに45人が合格。私立大は、法政大、明治大、早稲田大などに延べ218人が合格。

## プロセスを評価し、努力する姿勢を育む

奈良県立青翔中学校・高校 生田依子 いくた・よりこ



高校で理数科のみの本校では、SSHの指定校として中学3年次〜高校3年次に探究学習を行っています。ノートに活動を記録させ、自身の成長を振り返らせていますが、今回の先生方との議論を通して、プロセス評価の重要性を改めて認識しました。研究や試験の結果が思うようにならなくても、諦めずに粘り強く頑張る生徒を育てるため、努力の過程を評価していきたいです。

シートの活用時には、「教科学習」「探究学習」を中心に、学力の3要素に照らし合わせた振り返りをさせたいと思います。自身の学習と志望校を結びつけて、希望進路実現への努力の過程を言語化させるのです。2年次12月の三者面談で、生徒が根拠を持って自分の志望を保護者に伝えれば、保護者の進路に対する理解も深まるでしょう。

自分では感じていなくても、周りが成長を認めている場合もあります。生徒同士の指摘の方が心に響くこともあるので、グループでシートを見せ合って相互評価を行うと、生徒の様々な気づきにつながりそうです。

**生田先生プロフィール** 教職歴14年。同校に赴任して11年目。中学校副統括。進路指導部副部長。理科(生物)。「夢は必ずかなう。志を高く持ち、挑戦し続けられ」

**学校プロフィール** 全日制/理数科/共学/1学年約40人/2019年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、山形大、三重大、滋賀大、岡山大、高知大、大分大などに8人が合格。私立大は、中央大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ70人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

### 指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ピフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①〜④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認ください

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ピフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時〜21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。

# 好きなこと、苦手なことを認め合い、 個に応じた学びを深める

## 通信制高校の授業



「怒り」をコントロールするための心理トレーニング「アンガーマネジメント」のワークショップ。カードゲームを通して、怒りの経験を語り合い、自己理解や他者理解につなげる。

自分の興味・関心を踏まえながら、教師や支援員と相談して学ぶ内容を生徒自身で決める。一斉授業の代わりに、ネット授業を視聴する。成績評価は、ペーパーテストだけではなく、学習成果物（ポートフォリオ）などを通じて多面的に行われる。



### 私が訪問しました

群馬県立高崎東高校  
高橋真人

たかはし・まさと



◎教職歴16年。同校に赴任して2年目。数学科担当。少人数での学び合い、学び直しに力を入れた小規模校勤務を経て現任校へ。これまでの指導経験を土台に、生徒が自己肯定感を高めながら、それぞれの希望進路実現のために、意欲的に学習に取り組めるような支援のあり方を日々模索している。

### 群馬県立高崎東高校

全日制／普通科／共学／1学年約200人／2019年度入試合格実績（現役のみ）：国立大は、弘前大、群馬大、埼玉大、東京外国語大などに17人が合格。私立大は、獨協大、芝浦工業大、東京農業大、法政大、立正大などに延べ110人が合格。

### 私が案内しました

内閣府認定特区高等学校  
明蓬館高校  
日野公三

ひの・こうぞう



◎明蓬館高校理事長・校長。2000年に国内初のインターネットを使った通信制高校を開校。NPO日本ホームスクール支援協会理事長、NPOソーシャル・ビジネス・ネットワーク理事、新しい学校の会理事などを務める。著書に『発達障害の子どもの進路と多様な可能性』（WAVE出版）。

### 内閣府認定特区高等学校明蓬館高校

全国広域通信制高校である明蓬館高校は、SNEC（スペシャルニーズ・エデュケーションセンター）と呼ばれるサポートセンターを全国に設置。SNECでは、発達障害の支援スキルを持った支援員と臨床心理士などの心理職が相談員として常駐し、各教科の教員とともに生徒の支援にあたる。

**日野** 明達館高校のSNEC（スペシャルニーズ・エデュケーションセンター）には、得意・不得意の凸凹が大きいなど、発達上の特性を持つ生徒が多く在籍しています。発達障害の生徒は、「自分の努力が足りないから、ほかの人にできることができない」と考える傾向にあります。しかし、発達障害は、本人の努力不足や保護者の育て方が原因で起きるものではありません。また、どの生徒も、それぞれの特性に応じた学習環境が整えられれば、豊かな学びを実現することができます。

**高橋** 個別学習用のブースの様子を見ましたが、支援員の先生に質問しながら、科学的なテーマの探究学習に取り組む生徒、高度な数学の問題を黙々と解く生徒など、各自の学習に取り組んでいます。

**日野** 時間割は、生徒が教師や支援員と相談して作ります。不登校を経験した生徒には、好きな学習、得意な学習に安心して取り組むことで、学びへの意欲や自己肯定感を取り戻させることが大切だと考えています。そして、困った時には、すぐに仲間や教師にヘルプサインが出るようになることを目指しています。

臆せずに先生に質問をしたり、生徒同士で教え合ったり、人とのかわりを大切にする生徒の姿が印象的でした



コミュニケーションで苦労してきた生徒だからこそ、人との接し方に対して関心を持つ生徒は多いです



**高橋** 選択授業として行われた「アンガーマネジメント」のワークショップは、自分や他者を理解することを通じて、社会で自立する力を養う時間でしたね。生徒の1人が、「中学生の時に、周りの大人に自分のことを分かってもらえず、イライラして椅子を投げってしまったことがあった。その時はスッキリしたけれど、今は、それでスッキリした自分の感覚に怖さを感じる。その時の自分は壊れていたような感じだった」と深く内省していたことに驚きました。



**日野** 聴覚が過敏で大勢の生徒が集まる教室に入れなかったり、視覚的な処理が苦手な教室の掲示物に気を取られたりしたことがきっかけで、不登校になった生徒が本校に入学してきます。本校に登校できるようになるまでに何か月もかかる生徒もいますが、安心できる環境をつくってあげれば、どの生徒も必ず自分の学びたいことを見つけ、前に進んでいきます。料理に興味があったある生徒は、生物では食中毒、日本史では日本料理の起源を学習のテーマとし、意欲的に学んだ結果、管理栄養士を目指して大学に進学しました。子どもたちのセーフティネットとして「未来の自分が好きになれる学校」であり続けたいと思います。

今日の学びを  
自校の指導につなぐ

生徒一人ひとりが  
安心して学べる学校に  
ついて考え続けたい



発達上の特性を持った生徒の支援は、全日制の高校においても重要なテーマです。しかし、発達障害の生徒とどのように向き合えばよいのか、その理解はまだ十分ではありません。私も、クラス目標として「安心のできる集団」を掲げることがあります。日野先生の学校と同じことを自校ですることとは難しいかもしれませんが、それでも、一人ひとりの生徒が安心できる人間関係の中で、自分の興味・関心を追究し、各教科への学びにつなげ、深めていくような指導のあり方を考えたいと思いました。



思考力は高いが、考えたことを文章化することが苦手など、生徒の特性は多様だ。教師が生徒の話を丁寧に聞きながら、生徒が自分の考えをまとめることを支援する。特性に応じた学習環境が、一人ひとりに豊かで深い学びをもたらす。



# 地域を元気にする仕組みや人のつながりをデザインする力を育成

## 東北芸術工科大学 デザイン工学部 コミュニティデザイン学科

### 山形市役所の若手職員と協働し、未来シミュレーションゲームを実施

「デザイン思考演習」では市役所の課長になりきり、限りある税金をどの政策に使うかを考えました。政策を考える際にクリエイティビティが必要なことに気づいたり、行政職員の日々の苦労を実感したりしました。(中川さん)



### 地域住民と同じ目線での語り合いで、自分の発想を試し、高められます

シェアハウスの創業準備をしている地域団体に「地域留学」した際、団体のロゴをデザインしました。団体の結束力を高められるよう、地域の魅力やメンバーの想いを込めて制作することで、チームづくりに貢献できたと思います。(本間さん)

### メンバーの長所を生かし、プロジェクトを前進

私が所属する地域プロジェクトは、6人チームで進行します。自然と役割分担が生まれ、私は場の雰囲気づくりや話し合いの進行役が得意だと気づきました。(中川さん)



### 地域の問題解決に必要な力を身につける

山形県にある東北芸術工科大学(＊1)デザイン工学部コミュニティデザイン学科では、地域を持続させる仕組みやコミュニティをつくる人材を育てている。

同学科では、「デザイン思考」(＊2)の手法を用いて、課題発見能力と解決能力を身につけるだけでなく、人と人とを結び、問題解決に立ち向かう人材や、コミュニティを育成する力が必要であると捉えている。こうした力を、1年次から徹底したアクティブ・ラーニングを通して育成している。

「コミュニティデザイン演習」で



デザイン工学部  
コミュニティデザイン学科3年  
**中川 繁輝**  
なかがわ・しげき  
東京都立千早高校卒業。  
同学科のイベント参加がきっかけとなり、入学。



デザイン工学部  
コミュニティデザイン学科3年  
**本間 真生**  
ほんま・まさき  
新潟県立新発田商業高校卒業。同学科のスタジオ活動にひかれて、入学。

\* 1 芸術学部とデザイン工学部の2学部が設置されている。芸術とデザインの力で社会問題を解決できる人材の育成を使命としている。

\* 2 ①共感、②問題定義、③創造、④プロトタイプ(試作品)、⑤テストという順序で思考を深め、イノベーションを実現させる問題発見・問題解決の方法論。アメリカの世界的コンサルティング会社IDEOによって提唱され、世界を先導する数々の企業に取り入れられている。

は、コミュニケーション形成に必要な基礎的な知識や技術を学ぶ。3年生の本間真生さんは、こう振り返る。

「まちづくりの基本は、住民の声を聞いて課題の本質を明確にすることです。授業では、住民へのヒアリングの場を想定し、役割を決めてロールプレイングを行い、話し合いの手法や進め方を学びました」

一方、「デザイン思考演習」は、製品デザインの過程を応用して、解決策を見出す手法を学ぶ科目だ。3年生の中川繁輝さんはこう語る。

「身近な問題を解決する演習として、スケジュール帳のデザインをしました。実際に地域に入り、まちづくりを実践する中で、製品でも地域でも、問題解決のためのデザインをするプロセスは同じだということを強く実感しました」

## 1年次から地域にかかわり 問題解決に取り組む

地域の中で実践的な学びを展開する点も、同学科の大きな特色の1つだ。1年次の春季休業には、全学生が約1か月間の「地域留学」を体験。学生は、希望する地域に入り、問題を解決する手法を学ぶ。

「地域活性化を目的としたシェアハウスの運営方針やルールづくりに携わりました。シェアハウスの住民の心地よさだけでなく、周辺住民への影響やまちの将来像を踏まえて話し合うことで、シェアハウスは地域にあり続けてほしいものになったと思います」（本間さん）

2年次は、学科の教員がそれぞれ設定した「スタジオ」と呼ばれる地域プロジェクトの中から関心のあるものを選び、所属する。3年次前期までの1年半、じっくり地域に入っ

て、問題解決の実践に取り組む。中川さんは、西山形コミュニティセンターの依頼で、若者の転出について調査・対策を検討している。

「調査を進めるうちに、若年層と高齢者層の考え方に隔たりがあると気づきました。現在、各世代を集めたワークショップを実施するなど、互いを理解しあい、住民が一丸とされる方法を模索しています」

本間さんは、山形県大江町から委託され、銀行だった建物を地域住民の交流施設にリニューアルさせるプロジェクトにかかわった。

「私たちの代では、リニューアルした交流施設で活動してくれる人材

を育成しました。対象は子育てママにし、彼女たちが本気でやってみたいことを発見し、実施するまでをサポートしました。学科で学んだアイデア発想法やプロセスデザインを地域の人たちに身につけてもらうことで、継続してチャレンジしていける人材を生み出しました」（本間さん）

## 集大成の卒業研究は、個別に コミュニティデザインを実践

スタジオ活動と並行し、講義や演習でコミュニケーション形成の知識を深めたり、地域課題の取り組み事例を学んだりすることで、理論と実践を往復し、学びを深化させていく。

「スタジオ活動を通して、私は論理的に説明する力が弱いと痛感し、現在、『ロジカルライティング』を履修しています」（本間さん）

そうした学習や体験を基に、3年次後期からの卒業研究では、個別に地域に入り、自ら設定した課題に取り組んで、その成果をまとめたプレゼンテーションを行う。

「閉村などが増えている状況下で、いかに前向きな気持ちでコミュニケーションを閉じるかという手法も研究したいと考えています」（中川さん）

## 大学の思い

### 手法を知り、人を動かせる コミュニティデザイナーに



デザイン工学部  
コミュニティデザイン学科長  
岡崎エミ  
おかざき・えみ

住民自らが地域の問題を解決することが求められる時代になりました。そうした地域の活動を支えるのが、本学科が輩出するコミュニティデザイナーです。

コミュニティをデザインするために、問題解決の事例や手法を知るだけでなく、住民のモチベーションに働きかけたり、住民同士をつなげたりと、人へのアプローチが欠かせません。その両面を理論と実践から深く学べるのが、大きな特徴です。

また、人を動かすには、論理の正しさだけでは不十分で、本間さんのように活動団体のロゴをデザインするなど、感性で地域の方の心を揺さぶることも大切です。

そのため本学科では、グラフィックデザインや冊子編集も必修科目に設定しています。芸術大学という環境も大きなメリットです。

卒業後は、起業する者から、行政、教育、デザイン、福祉、組織開発などを通して地域課題に取り組む者まで様々です。多くの分野で、本学科で学んだ力が生かされています。



# 1年次からデジタル領域を横断して学び、 未来を生き抜く力を身につける

デジタルハリウッド大学 デジタルコミュニケーション学部  
デジタルコンテンツ学科



## 1年次から演習で、 スリーディメンション 3DCGの最新技術を学べます

「3DCG 演習」は、プロの使うソフトを用いて作品を完成させる達成感のある内容で、自分もプロに1歩近づけた気がしました。(小田切さん)



## 現役の映画監督など、 プロから指導してもらえます

「映画制作演習」では、自分が主演するホラー映画を制作。現役の映画監督である先生から、より良い作品にするにはどうすべきか助言をいただき、創作意欲が高まりました。(鈴木さん)



## 3年次にドローン空撮まで幅広く行う 映像制作の会社を起業しました

大学で学んだ3DCGや映像の知識を生かして、ドローン空撮まで幅広く行う映像制作の会社を興しました。多様な専門知識を持つ友人にも協力してもらっています。(小田切さん)



東京にあるデジタルハリウッド大学は、2005年にデジタルハリウッド株式会社<sup>＊1</sup>が設立した大学だ(＊1)。自由自在な表現を可能にする専門性を持った人材育成を目指し、デジタル領域を横断して学べるカリキュラムを用意している。

1年次は、初年次教育として、デジタルコミュニケーション分野の概論とセルフディベロップメント科目を学ぶ。後者は、多彩な人々と創造的な活動する上で必要なコミュニケーション能力を育成する科目で、代表的な授業が、「アクティブラーニング」と「社会人力」だ。4年生

## 創造的な活動を支える コミュニケーション力を育成



デジタルコミュニケーション学部  
デジタルコンテンツ学科4年

### 小田切元太

おだぎり・げんた  
埼玉県・私立浦和実業学園高校卒業。3DCGを学びたいと考え、同大学に入学。



デジタルコミュニケーション学部  
デジタルコンテンツ学科4年

### 鈴木 夢

ずずき・ゆめ  
東京都・私立女子美術大学付属高校・中学校卒業。映像に興味があり、同大学に入学。

＊1 デジタルコミュニケーション学部デジタルコンテンツ学科のみの単科大学。

＊2 3DCG・VFX、ゲーム・プログラミング、映像、グラフィック、アニメ、Web、VR・メディアアート、広告・起業。

の鈴木夢さんは、次のように振り返る。

「毎回異なるメンバーと、愛や平和といった抽象的なテーマや社会問題などについて話し合いました。どのようなテーマでも、自分なりの意見を言えるようになりました」

英語の授業でもグループワークなどが多く取り入れられているほか、映画やゲーム、アートなどにかかわる専門用語を英語で学ぶ授業もある。

## 1年次から演習がスタート 好きな分野の制作に挑戦

初年次教育に加え、1年次から自分の好きな分野の演習を履修できるのも同大学の特徴の1つだ。1年次前期の「基礎ツール演習Ⅰ」でデジタルグラフィック制作の基礎を学んだ上で、後期は8つの専門分野（＊2）に関連する演習を最大2つ履修できる。4年生の小田切元太さんは、「3DCG演習Ⅰ」を選んだ。

「入学当初は、ローマ字入力さえできませんでしたが、自分のモニターの脇には、先生が作業する内容も映し出されたため、手順を詳しく理解できるようになりました。自分の好きな生き物など、思い描いたも

のをCGで形にすることができて面白くなり、授業外でも寝る間を惜しんで制作するようになりました」

## 2年次から人類の英知を 身につける教養科目を履修

2年次になると、創作活動の土台となる教養科目の履修が始まり、4年次まで続く。1年次に演習に取り組んだ後、自分に必要な知識に気づいてから教養科目を履修する方が、意欲的に取り組めるからだ。

「『世界の神話』という授業では、神話が映画やマンガ、ゲームに与えている影響を実例から学びました。自分も企画を考える際、神話や日本の昔話をストーリーのヒントにすることがあります」（鈴木さん）

2年次後期〜3年次前期は専門性を深めたり、新たな領域を学んだりして応用力をつける。

## 4年間の学びを基に、自分 ならではの表現手法を模索

実践的な専門教育を行う同大学では、大学在学中に起業する学生も少なくない。小田切さんもその1人で、3年次に知人からの依頼で映像制作を始め、しばらくして起業した。

「最初は自分1人で活動していましたが、仲間とものづくりの喜びを分かち合いたいと考え、会社を興しました」（小田切さん）

3年次後期からは、ゼミに入り専門性をさらに深めていく。小田切さんは仕事の幅を広げたいと考え、ロボット製作を行うゼミに入り、ロボットによる撮影も計画中だ。

「ケニアで野生生物を4KカメラやVRカメラ、ドローン、ロボットなどの最新機器を用いて撮影し、その映像素材を安価に提供するサービスを企画中です」

鈴木さんは、先端メディアゼミに入り、卒業制作として、観客体験型演劇であるイマーシブ・シアター（＊3）の開催を目指している。

「テーマパークの体験型おぼけ屋敷に着想を得て、観客と演者が一体となって楽しめる演劇を卒業制作展で実施する予定です。企画を立ててシナリオを書き、演者を集めて打ち合わせを行いました。今後は、舞台セットや上演中に流す映像の制作に取り組み予定です。やるべきことが山積みですが、4年間の学びの総決算として成功させたいです」（鈴木さん）

## 大学の思い

表現に深みを持たせるには  
幅広い教養が必要



デジタルハリウッド  
大学 准教授  
栗谷幸助  
くりや・こうすけ

「デジタルハリウッド」という大学名には、自分の専門技術をプロジェクトごとに発揮するハリウッドの映画界のような働き方を、デジタル業界で実現できる人材になってほしいという願いが込められています。

そうした人材を育成するため、デジタル領域を幅広く学びながら、主体的に自分の専門性を磨けるよう、カリキュラムを組んでいます。教員が授業を行う際に心がけているのは、自分の専門分野で一番面白い部分を教えることです。私の専門はWebですが、学生の関心の高いデザインに関する知識や技術を授業で紹介しています。

1年次に演習に取り組みさせるのも、動機づけを優先するからです。本学は目的を持って入学する学生が多く、意欲的に課題制作に取り組めます。ただ、2年次後期以降、分野の枠を超えて自由に制作してよいと伝えると、手が止まってしまう学生も目立ちます。そこで必要なのが教養です。歴史や文化、自然科学などを学ぶことで、発想が広がり、表現の深みが増し、独自の世界観をつくることにつながります。

\* 3 イマーシブとは「没入」という意味で、観客自身が劇の登場人物の1人となり、役者と同じ舞台上で楽しむ演劇手法。アメリカ・ニューヨークのオフ・ブロードウェイで誕生したと言われていた。

## これからの会議・研修のあり方、作り方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる一助となるよう、今号も、対話の場づくりに取り組む実践者に話を聞く。

# 丁寧な準備と進行で、校内会議に対話の文化を醸成

## 茨城県・私立明秀学園日立高校

◎全日制普通科には、生徒の希望進路に応じた特進S T、特進S、特進Aの3コースを設置。全生徒を対象にした海外修学旅行、希望者から選抜されるオーストラリア交換留学や語学研修などの国際教育を充実させている。サッカー部、野球部、女子バスケットボール部、男子・女子卓球部などが全国大会に出場するなど、部活動も盛ん。

◎設立 1925(大正14)年 ◎形態 全日制・通信制/普通科/共学 ◎生徒数 1学年約360人(全日制) ◎2019年度入試合格実績(浪浪計) 国公立大は、東北大、福島大、茨城大、東京学芸大、茨城県立医療大などに79人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大などに延べ383人が合格。 ◎URL <http://www.meishu.ac.jp/>



特進STコース主任  
特進推進部副部長  
杉山和則

すぎやま・かずのり  
教職歴24年。同校に赴任して25年目。国語科。「学びの力を信じ、生徒とともに自らが学び続ける」



特進推進部部長  
特進S T・S統括部長  
綿引隆

わたひき・たかし  
教職歴25年。同校に赴任して7年目。英語科。「若い世代と『生きる』ことである『学ぶ』『働く』『遊ぶ』をともに探求していきたい」

### 学年・教科を超えて 教師が語り合う会議に つくり直す

明秀学園日立高校では、2018年度から最難関大学合格を目指す特進STコースと、国公立大学・難関私立大学合格を目指す特進Sコースの授業を担当する教師を対象とした「特進推進戦略会議」(以下、戦略会議)を立ち上げた。同会議は、大学入学共通テストなどを始めとする大学入試改



特進STコース副主任  
英語科主任  
特進推進部、1学年担任  
中村達

なかむら・さとし  
教職歴21年。同校に赴任して12年目。英語科。「高校3年間が生徒一人ひとりの生きる力につながるように」



特進推進部副部長  
教務部、3学年担任  
高橋大

たかはし・まさひろ  
教職歴13年。同校に赴任して5年目。英語科。「協同で問題解決に取り組む姿勢と手段を伝え、自らの長所を生かす大切さを伝えたい」

革への対応や、アクティブ・ラーニングの導入などに向けた授業改善に組織的に取り組むため、毎月1回、50分間を使って、模擬試験の結果の振り返りなどを行っている。学年・教科の異なる教師たちが定期的に集まって、指導力向上を目標に語り合い、語り合った内容をその場で共有するという点が特徴の会議だ。

戦略会議で理想として描かれたのは、各教科で教師たちがお互いの価値観や考え方を共有しながら、「私たちの教科では、こんな工夫やチャレンジをしてみよう」と具体的に語り合う会議の姿だった。だが、2018年5月

に始まった戦略会議では、そのような姿は残念ながら見られなかったと、英語科主任の中村達先生は振り返る。

「新しい会議に対して『どんな雰囲気、何を語り合うのだろうか』と不安を感じていて、内心は、『この教科がほかの教科の足を引っ張っている』などと、教科間の対立が発生するような場にならないかと心配でした。ほかの先生方も、少なからず身構えた状態で、会議に参加していたと思います」

50分間の会議は、模擬試験の結果を確認することが中心となり、結局、「これからどうすべきか、何から取り組んでみるか」といったことを教科団として自由闊達に語り合う時間にはならなかった。そして、それは6月、7月の会議も同様だった。

このままでは、毎月の戦略会議は各教科が組織的に授業改善に取り組むきっかけにはならないのではないかと……戦略会議を企画・運営する特進推進部のメンバーは危機感を募らせた。何より、不安そうに会議に臨む同僚の姿を見るのがつらかった。教師が語り合うことで元気になるような会議、自分たちの言葉で目標や課題を語り、具体的な行動につなげていく会議をつくりたい。そう考えた特進推進部のメ

ンバーは、校内の会議・研修の改善のサポートを希望する学校を募っていたVIEW21編集部と協働して、戦略会議の進め方の見直しに着手した。

## 場所と導入を変えただけで 会議は大きく変わった

VIEW21編集部の助言を得て、11月の戦略会議で特進推進部が取り組んだのは、プラス思考で語り合いに臨



アイスブレイクとして、生徒の成長の様子という前向きな気持ちになれるテーマで語り合うようにしたことで、会議に参加した教師の緊張や不安が軽減され、会議の活性化にもつながった。

める雰囲気づくりだったと、特進推進部部長の綿引隆先生は説明する。

「模擬試験の結果を分析する際に、各教科の改善点からではなく、よかつたところを先に確認し合う時間を設けようということになりました」

事前準備として特進推進部が模擬試験の結果を分析して、教科ごとによかつた点を洗い出し、参加者の教師がすぐに共通認識を持てるようにシートにまとめていった。会議では、そのシートを基に各教科の指導の成果を全員で共有した上で、「現状のよさを土台にして、次に取り組むべき課題は何か」を各教科で語り合ってもらい、発表するという構成にしたのだ。

また、本題の前に、戦略会議に対して不安を抱いている参加者の気持ちを解きほぐすためのアイスブレイクも導入することにした。会議の冒頭からすべての教師が笑顔で語り合うことができれば、会議の本題にもリラックスした気持ちで臨めると考えたからだ。そうして選ばれたアイスブレイクのテーマは「生徒の成長」。「最近、特に成長したと感じる生徒」について、参加者が1人ずつ語ってから会議を始めるようにした。さらに、戦略会議の会場も、机や椅子が教壇の方向に固

定して設置されている階段教室から、机・椅子が自由に配置できる会議室へと変更し、各教科がグループになって話しやすいような「アイランド形式」とした。

それまでと大きく雰囲気を変えた11月の戦略会議の様子を見て、特進推進部副部長の杉山和則先生は、「会議の場所を変更し、アイスブレイクを導入しただけで、これだけ雰囲気が変わるとは」と驚いたという。

「会議の場所を変えたことで、特進推進部と参加者の先生方が対峙するような雰囲気がなくなりました。そして、アイスブレイクとして成長の手応えを感じている生徒について語り合った時は、先生方が本当に楽しそうに語る声が会場に響きわたりました」(杉山先生)

## グラウンドルールを 繰り返し伝えることで、 会議に臨む姿勢が整う

戦略会議の様子は一変した。しかし、各教科で授業改善に向けた工夫や

チャレンジを具体的に、しかも年齢やキャリアの違いを超えて闊達に語り合う場になったかという点、それはまだまだだった。

「これからの課題を話し合う段階になると、教科団として具体的に組み立てることを話すのではなく、ややもすると抽象論や、現状に合っていない『ベキ論』にとどまっているケースも少なからずありました」(中村先生)

学校に限らず、どのような組織の会議でも、次第に主題としていた論点からそれていってしまうことはよくあり、また、ほかの参加者の意見に耳を傾けることなく、自分の主張を繰り返してしまっているものも多かった。ただ、語り合いの際に守るべきグランドルールが会議の参加者に定着していけば、会議の質は徐々によくなっていく……VIEW21編集部がそうした助言を受けて、特進推進部は12月の戦略会議で「会議の心得」を参加者に浸透させようと考えた。

「私たちは、対話型の会議へと変えようと思いましたが、語り合う際の心得やグランドルールがまだまだ先生方に定着していなかったと痛感しました。心得やグランドルールが自分のものになるには、それなりに時間がかか

ると思いましたが、焦ることなく、丁寧に浸透を図っていかうと考えました」(綿引先生)

12月、3年生の入試対策について語り合った戦略会議では、「頑張る3年生の姿」をアイスブレイクのテーマとした。その際、戦略会議で司会・進行を担当する特進推進部副部長の高橋大先生は、どのような頑張りが見られて、どんな伸びがあったのかをできるだけ具体的に紹介するように呼びかけた。その場で何を、どのように話してもらいたいのかを、これまで以上に明確に、アイスブレイクの段階から参加者に伝えるようにしたのだ。

「本題に入ってからでも、『1人1回は発言してください』といったグランドルールを繰り返し伝えるとともに、『それは、より多様な意見を出すことを目的としているからです』と、グランドルールを提示する理由もきちんと説明するようにしました」(高橋先生)

どのような姿勢で会議に臨んでもらいたいのかが司会・進行から丁寧に伝えられたことで、12月の戦略会議では、ベテラン教師がそれまで発言が少なかった若手教師に意見を述べるように促すなど、参加者の態度にさらなる変化が見られた。また、語り合っ

図1 戦略会議1週間前に配布する資料

**7月戦略会議の目的** (推進部用)  
 Keyword: 大学入試センター試験、指導  
 ・2020年度大学入試センター試験への対策を考える(方針・手段・計画など) **【決める会議】**

7月4日(木) 16:20~16:55(終了予定) 第一会議室

形態: 教科ごととする

会議における対話について  
 ・教科ごとの「対話」の時間では、一人一人が「目的を達成させるために建設的な意見を出す」ことをルールとする

【推進部準備】15:20- 会場設定 WB:中村  
 ・各テーブル、feedback用の付箋  
 ・各テーブル 会議の流れA3シート / 個人A4シート  
 ・チャイム・Speaker・Camera: 杉山  
 ・対話①記入用A3シート(各教科分7部)

活動	所要時間	形式	内容	備考
導入	5	ランダム共有 (1人1分程度)	前回の大学入試センター試験の分析を振り返り、今回のテーマと結びつける。グループ内のメンバーと自由に語り合う。7分で全員が話せるように、グループ内でコントロール。	【事前説明】 ①今回は共通シートにまでは触れず、2020年センサ試験に絞る ②前回の分析をふまえて授業・教員外の方向性を考える。個別の意見では無い
対話①	20	教科内共有 (1人1分程度)	■前回の分析をもとに今後の授業・課外にどのような観点で指導していくかを議論 教科で共通した重点目標・方針に関して議論し、各科のスタッフ全員が一致した目標で授業・課外に臨めるようにする。	
発表の準備	3	発表の準備		
対話① 全体共有	10	全体共有	優秀での勤務が2nd Ripe(熟練)な先生が、2分程度で発表する。 発表は、対話①で書き込んだA3用紙を全体に示しながら説明	
まとめ	2	全体共有		
合計	40	(写真撮影)	対話①で作成したA3用紙を持って、教科ごとに写真撮影	

備考  
 ・必要であれば飲み物を各自持参してください。  
 【会議評価】①教科から評価の発言が出されたか(全体共有) ②建設的な話し合いがなされたか(対話①)  
 ※数学科はセンター試験+d(共通テスト)  
 ※理科、地歴・公民は事前に絞ってもらった方がいい/大問を絞っていく(地歴公民)

戦略会議1週間前に特進推進部がClassi(\*)を活用して全体に配信する会議資料。会議の目的、時間、場所、そして「1人1回は発言する」「結論を出すのではなく、多様な意見を出す」といった、会議のグランドルールが明示されている。分刻みで会議の流れを示し、アイスブレイクのテーマも事前に伝えるようにしたことで、戦略会議への出席に不安を感じていた参加者も安心して出席できるようになったという。

\*学校資料をそのまま掲載。

ほしい主題を丁寧に伝えることで、抽象論や「ベキ論」も少なくなっていく。それまでの戦略会議では、授業改善のアイデアを話す同僚に対して、『それは分かるけれど、忙しいから実現は難しい』などと、ややもすると否定的

に感じる反応を示す参加者もいました。しかし、12月の戦略会議では、相手の意見を受け止めて『忙しい中でも、出されたアイデアをどうすれば少しでも実現できるか』を考えようとする姿勢が見られました」(杉山先生)

\*株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社 が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

## 会議のあり方が変わり、 教師の結びつきが より強固になった

戦略会議の雰囲気が大きく変化  
する中で、特進推進部のメンバーが痛感  
したのは、「会議の準備の重要性」だ。

「戦略会議の議題は年度当初に提示  
していましたが、1週間前に改めて、  
アイスブレイクのテーマとともに参  
加者に告知しています（図1）。多く  
の先生方がそれを机に貼ったり、手帳  
に挟んだりしてくれていて、会議の内  
容に合った資料を自発的に持ってき  
てくれる先生もいます」（綿引先生）

「司会・進行の原稿も会議の数日前  
に作成し、特進推進部内でリハーサル  
をして、『この言葉は誤解につながる  
かも』『ここでもう一度会議のグラン  
ドルールを確認しよう』などと練り直  
しています」（高橋先生）

戦略会議のあり方が変わってから、  
会議終了後もその場で語り合いを続  
ける教師が現れ、さらに「私たちの教  
科ではこんな取り組みを始めること  
にした」などと、会議の成果を自ら報

告に来る教科団も出てきた。

「先日、定期考査廃止というテーマ  
で語り合いをしてみたいというリク  
エストがありました。現場から議題の  
提案が出てくるのはすごい変化だと  
思います」（綿引先生）

会議に参加できなかった教師にも

会議の内容や様子が伝わるように、A  
4判の報告書を作成し始めたが、18年  
度最後の会議ではA3判で報告書を  
作り（図2）、生徒、さらには学校を  
訪れた保護者にも見てもらえるよう  
に職員室前の廊下に掲示した。

「戦略会議の存在が周知され、最近

図2 戦略会議後に配布する報告書



2018年度のセンター試験の分析結果を踏まえた今後求められる指導について、各教科で語り合い、教科団としての指導方針を決定した。40分間という短い時間の中、各教科では、2020年度から導入される大学入学共通テストを始めとする新傾向の問題を念頭に置いた、様々な意見が出された。教科内共通の目標を宣言するという、「語り合いを通して決める」会議が実現した。「廊下に掲示したこの報告書を見た生徒が、『先生たち、カッコいいですね』と言ってくれたのですが、うれしかったですね」（杉山先生）

\*学校資料をそのまま掲載。

は、『最後の5分だけでも』と顔を見  
せてくれる出張帰りの先生や、『担当  
外の芸術科だけでも参加したい』と  
自ら参加を申し出てくれる先生も現  
れるようになりました」（杉山先生）

19年度、戦略会議は、さらなる進化  
を遂げている。7月には、センター試  
験の結果分析から、各教科が今後の指  
導のコンセプトを決め、全体で共有し  
た。各教科が会議で1つの結論を「決  
める」ことができたのは、それまで「出  
し合う」ことが中心だった同校の戦略  
会議の大きな転機となった。

また、事務局である特進推進部内で、  
毎回の会議の評価と改善策の検討も  
始めた。目的に合った語り合いが行わ  
れたか、その達成度を、事前に定めた  
基準で特進推進部のメンバーが評価  
した上で、次の会議に向けた改善点を  
洗い出している。

「この1年で、戦略会議に対話の土  
壌が育まれました。ただ、授業改善と  
いう目的において、会議はあくまでも  
通過点に過ぎません。各会議での気づ  
きをつなげて、大きな変化へと結びつ  
けていくことが重要です。戦略会議を  
通して、それぞれの教師が潜在能力を  
最大限に発揮できる集団づくりは今  
後も貢献していきます」（綿引先生）

## 次期学習指導要領に向けた埼玉県の取り組み

# 多様な資質・能力の育成を目指す 指導と評価の確立に 小・中・高合同で取り組む

2020年度に小学校、21年度に中学校、22年度に高校の次期学習指導要領が実施される（高校は年次進行）。小・中・高で一貫している点の1つが、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力といった資質・能力の育成だ。埼玉県立総合教育センターでは、多様な資質・能力の育成を目指す指導と評価の確立に向けて、小・中・高合同の調査研究を推進している。調査研究の概要と、その成果を反映させた同県立鴻巣女子高校（こうのす）の実践事例を見ていく。

## 調査研究事業の概要

## 指導主事と現場の教師の協働により、 先進的な調査研究を行う体制を整備

### 思考力・判断力・表現力の 育成を目指した指導改善

埼玉県立総合教育センター（所長・羽田邦弘氏）では、県内の小・中学校、高校の教師の指導力向上を目指した事業を推進している。その1つが、教育課程担当や情報教育推進担当といった同センターの各部署がテーマを設定し、2年間をかけて行う調査研究事業だ。同センターから委嘱された小・中・高の教師が研究協力委員となり、同センターの指導主事と協働しながら、調査研究に取り組んでいると、同センターの古川治夫副所長は述べる。

「指導主事は、現場の課題をよく理解しています。また、全国的な研修等に参加する機会に恵まれており、そこで先進的な事例に出合うことも少なくありません。指導主事が研究協力委員と力を合わせれば、質の高い調査研究になると考えています」

教育課程担当の調査研究を見ていく。2018年度からは、「新しい時代に求められる資質・能力を育むための、『目標、内容、指導、評価』の一体化」をテーマとする調査研究を行っている（図1）。取り組みを始めるにあたっては、教科ごとの部会を小・中学校合同で10、高校で7つ設置し、各部会に所属する研究協力委員を委嘱した。テーマ設定に込めた思いを、教育課程担当の篠田俊文指導主事は次のように語る。

「小・中・高の次期学習指導要領では、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力といった多様な資質・能力の育成に重点が置かれています。小学校の次期学習指導要領が全面実施される20年度までに、それらの資質・能力を適切に育成する指導や評価の方法を確立し、現場の指導改善に貢献したいと考えました」

1年目である18年度には、思考力・判断力・表現力の育成と評価を重視



埼玉県立総合教育センター  
副所長  
**古川治夫** ふるかわ・ちかお

埼玉県立総合教育センター  
教育主幹・主任指導主事  
**山崎正義** やまざき・まさよし

埼玉県立総合教育センター  
指導主事(高校・数学科)  
**篠田俊文** しのだ・としふみ

埼玉県立総合教育センター  
指導主事(中学校・外国語科)  
**賛田悠** さいだ・ゆう

し、研究協力委員は自校での指導計画を練り上げるとともに、思考力・判断力・表現力を評価するためのパフォーマンス課題とルーブリックの作成を目指した。各部会では年5〜6回の研究会を設け、進捗状況や取り組みの工夫、課題などを共有し、相談し合う機会とした。教育課程担当の賛田悠指導主事は、こう話す。

「研究会では、児童・生徒にどのような資質・能力を身につけさせたいのかといった根本的な議論から始まり、指導や評価の具体的な方法の検討に進んでいきました。研究協力委

## 図1 教育課程担当の調査研究の概要

### ◎目的・目標

- (1) 児童・生徒の資質・能力の育成に向け、次期学習指導要領の方向性を十分に踏まえながら、「目標、内容、指導、評価」を一体化させた実践を目指す。
- (2) 研究会などを通して、同センターの指導主事と研究協力委員が、国や県の最新の動向や研究協力委員の勤務校(研究協力校)の課題などを共有し、協働しながら、研究協力校の課題解決を目指す。
- (3) 同調査研究で得られた成果や知見を県全域・全国へと発信し、教育改革の一翼を担う。

### ◎実施計画

- ・期間 2018～19年度の2年間。
- ・研究協力委員の委嘱 同センターが、指導改善などに意欲的に取り組んでいる教師61人(小・中・高合計)に研究協力委員を委嘱。

### ◎部会の構成

- ・小・中学校の10部会 ①国語/②社会/③算数・数学/④理科/⑤音楽/⑥図画工作・美術/⑦技術・家庭/⑧体育・保健体育/⑨外国語活動・外国語/⑩道徳  
※各部会には、小・中の研究協力委員2人ずつと指導主事1人の計5人が所属。
- ・高校の7部会 ①国語/②地理歴史・公民/③数学/④理科/⑤保健体育/⑥外国語/⑦家庭  
※各部会には、研究協力委員3人と指導主事1人の計4人が所属。

\*埼玉県立総合教育センターの資料を基に編集部で作成。

「研究協力委員は、本センターでの調査研究の成果を自校での指導改善に生かしています。研究協力委員の実践が原動力となり、全校体制での指導改善につながる学校も少なくありません。そうした学校を増やすことで、先進的な取り組みを県内全校へ浸透させ、よりよい教育を実現していきたいと考えています」

調査研究事業の展望をこう語る。

「研究協力委員は、本センターでの調査研究の成果を自校での指導改善に生かしています。研究協力委員の実践が原動力となり、全校体制での指導改善につながる学校も少なくありません。そうした学校を増やすことで、先進的な取り組みを県内全校へ浸透させ、よりよい教育を実現していきたいと考えています」

## 19年度の目標を共有すべく、全部会合同の研究会を実施

2年目となる19年度には、思考力・判断力・表現力に加え、知識・技能、学びに向かう力などを総合的に育成する指導や評価の方法の確立を重点目標として掲げた。

「可視化しにくい資質・能力を育成・評価するためには、児童・生徒に外化(アウトプット)させることが重

員は、互いの実践について議論をする中で刺激を受け、自校での調査研究の工夫につなげていました」

要です。思考力・判断力・表現力の育成・評価の研究を通じて得た18年度の成果を生かし、外化(アウトプット)の方法や機会を充実させていきたいと考えています」(篠田指導主事)

そうした目標を研究協力委員間で共有し、研究の目線合わせを図るため、19年5月に全部会合同の第1回研究会を同センターで実施した。最初に、篠田指導主事が19年度の調査研究のねらいを改めて説明した後、特別講師として招かれた桐蔭学園の溝上慎一理事長が基調講演を行った(写真)。溝上理事長は、科学技術の発展などに伴って急速に変化してい



写真 溝上理事長による基調講演では、主体的・対話的で深い学びの重要性も述べられた。その視点を取り入れた指導改善を推進するポイントの1つとして、管理職のリーダーシップが挙げられた。

# パフォーマンス課題とルーブリックで生徒の実態把握を強化し、指導改善を推進

## 保育科の実習を生かし、生徒の学習意欲を高める

埼玉県立鴻巣女子高校は、普通科・家政科学科・保育科から成る学校だ。生徒の多様な希望進路を実現できるように、全校を挙げて教科指導の改善などを推進している。そうした中、数学科の東條滋先生が、18年度、埼玉県立総合教育センター教育課程担当の調査研究の研究協力委員となり、数学における思考力・判断力・表現力を測るためのパフォーマンス課題とルーブリックの作成に取り組んだ。

18年度の高校の数学部会では、ファシリテーターである篠田指導主事と研究協力委員全員が集まる研究会での合議により、2つの方針を打ち出した。1つめの方針は、パフォーマンス課題とルーブリックによる評価を行う学年や単元は、研究協力委員が自校の現状や課題に応じて自由に決めること。東條先生は、保育科の

3年生が2学期に学習する「数学Ⅰ」の「データの分析」を選んだ。

「本校の保育科の3年生は、『数学Ⅰ』で『データの分析』を学ぶ時期に、近隣の幼稚園で『保育実習』を行います。そこで、実習前から園児の身長・体重のデータを提供してもらい、それらを用いて標準偏差や相関係数を求める活動を授業に取り入れることにしました。自分が交流した園児のデータであれば、生徒の学習意欲は大きく高まります。そうした状態にした後、パフォーマンス課題に取り組みせようと考えました」(東條先生)

2つめの方針は、ルーブリックの作成にとどまらず、改善し、評価の妥当性と信頼性を高めること。それには、そのルーブリックを誰が用いても同じ評価結果になるよう、評価の尺度や基準が客観的で適正なものになっているかどうかを検証する「モデレーション」が欠かせない。そこで、各校でパフォーマンス課題を実施し

図2 数学科のパフォーマンス課題(上)とルーブリック(ともに抜粋)

4 下の表はバスケットボールの練習で10回中何回シュートを決めたかまとめたものです。あなたが監督だとしたらAさんとBさんのどちらをレギュラーにしますか。今まで勉強してきた知識を用いて、理由もあわせて答えなさい。

セット	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Aの回数	7	3	6	4	8	7	7	5	7	6
Bの回数	9	7	2	8	6	3	4	7	9	5

問4は、考えの根拠を述べさせる問題。分散や標準偏差といった既習内容を活用し、論理的な説明ができるかどうかを測るために出題した。

	数学的概念	数学的モデル化	数学的表現
観点の説明	数量や式に関する基礎的な概念や原理・法則などについて理解し、知識を身につけている。	問題が理解できている。	数の計算、目的に応える。
3	・指定された語句を適切な表現で説明することができる。	・複数の代表値や散布度を用いて2つのデータを比べることができる。特に、標準偏差を用いて比べることができる。	・結論を導くために分布度の計算が正しい。
2	・指定された語句を適切な表現で説明しようとしているが、一部誤りがある。	・複数の代表値や散布度を用いて2つのデータを比べることができる。	・結論を導くために分布度の計算を行っている。

\*学校資料を基に編集部が一部改編。数学科のパフォーマンス課題とルーブリックの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」でご覧ください。

## 研究会での議論の中で改善したルーブリック

東條先生は、研究会を通じて、思

た後、研究会でモデレーションを行うことにした。

考力・判断力・表現力を客観的に測るための課題や評価の尺度、基準を検討しながら、パフォーマンス課題とルーブリックを練り上げていった。パフォーマンス課題は、基礎的な用語の意味を説明させる問題から、既習内容を組み合わせる考えたり、



東條 滋 とうじょう・しげる  
数学科・2学年担任  
数学部会研究協力委員  
教職歴6年。同校に赴任して5年目。



須田敦子 すだ・あつこ  
保育科長・2学年主任  
教職歴31年。同校に赴任して16年目。



亀山典幸 かめやま・のりゆき  
校長  
教職歴33年。同校に赴任して2年目。

### 埼玉県立鴻巣女子高校

◎目指す学校像に「自立した女性の育成」「スペシャリストの育成」を掲げ、生徒一人ひとりの学力向上対策や自己実現への支援を充実させている。

◎設立 1966（昭和41）年

◎形態 全日制／普通科・家政科学科・保育科／女子校

◎生徒数 1学年約200人

◎2019年度進路実績（現役のみ）浦和大、十文字学園女子大、実践女子大、大東文化大などに延べ21人が合格。短大、専門学校進学99人。就職37人。

◎URL <http://www.koujo-h.sped.jp/>

考えの根拠を述べさせたりする問題へと段階的な構成とし（図2の上）、「データの分析」を出題した2学期の定期考査の答案を返却した後の授業で実施した。

「パフォーマンス課題では、知識・技能そのものではなく、それらを活

用できるかどうかを測ります。そこで、生徒が学習内容を覚えている時期に行いたいと考えました。また、生徒が前向きに取り組めるよう、パフォーマンス課題の結果は成績に反映させると伝えました」（東條先生）

モデレーションでは、東條先生を含む研究協力委員と篠田指導主事が、パフォーマンス課題の生徒の答案をループブリックに基づいて採点。採点結果にばらつきが出たり、評価基準の解釈に食い違いがあったりすれば、その原因を議論し、全員の採点結果が同じになるよう、ループブリックの改善点を挙げていった。

「研究会での議論を通して、評価基準が分かりにくいという課題が出てきました。生徒の状態を正確に書くうと思うあまり、私は評価基準を詳細に書き過ぎていたのでしょう。簡潔な説明になるようループブリックを改善しました（図2の下）」（東條先生）

### 多面的・総合的評価を 全校体制で推進していきたい

同校における18年度の調査研究の成果は、パフォーマンス課題やループブリックによる評価の実施を通して、

生徒の実態をより適切に把握できるようになったことだ。例えば、定期考査での得点は高くなっても、パフォーマンス課題では高得点を上げる生徒が多く、知識・技能を中心に測る試験では見えにくかった生徒の強みに気づけたと、東條先生は話す。

「モデレーションの際、部会の全員が満点と評価した生徒が1人いましたが、それは成績上位層の生徒ではありませんでした。その生徒の答案は記述量が多く、記述に論理的な整合性も見られたことから、数学への興味・関心の高さや学習内容への本質的な理解の深さがうかがえました」

一方、自分の考えを思うように述べられない生徒もおり、アウトプットに課題があることも分かったため、東條先生は19年度の授業で、学び合いなど、生徒が自分の考えを他者に伝える活動を強化することにした。

今後は、18年度の取り組みをさらに発展させていく。例えば、前述した保育科での「数学Ⅰ」の「データの分析」と「保育実習」との連携や、パフォーマンス課題とループブリックによる評価の実施を継続するとともに、保育科の他教科・科目との連携も強化しようと計画 중이다。保育科長

の須田敦子先生は、こう語る。

「保育科の専門教科・科目では、子どもの発達を数値として捉える機会はまだありませんでした。そこで、『数学Ⅰ』の『データの分析』での学習内容を生かし、『保育実習』の振り返りなどで子どもの発達を数値の面から考察する活動を行えないかと考えています」

また、普通科の1学年でもパフォーマンス課題やループブリックによる評価を実施する予定だ。資質・能力の3つの柱を総合的に測るといふ19年度の調査研究の重点目標を達成できるように、パフォーマンス課題を実施する単元の選定を進めている。

亀山典幸校長は、今後について次のように語る。

「パフォーマンス課題やループブリックを活用することで、見えにくい資質・能力を多面的・総合的に評価できるようになります。東條先生が取り組んでいる調査研究は、本校の教育活動をさらに充実させていく原動力になるでしょう。今後は、その成果を全校で共有し、教師一人ひとりが授業改善できるよう、校内研修などをさらに整備していきたいと考えています」

国際シンポジウム「教育を科学する  
——エビデンスやデータで考える、2030年の教育の姿——」開催

# エビデンスやデータを基にした 教育改革の推進が必要

2030年のあるべき教育の姿をエビデンスやデータに基づいて考える国際シンポジウムが、2019年6月、東京大学で開催された。OECD 教育・スキル局のアンドレアス・シュライヒャー局長の基調講演や、実践報告、パネルディスカッションを通して、急速に変化する社会の中で教育に求められる役割や教育改革の方向性について議論を深めた。



## プログラム

### ◎基調講演

OECD 教育・スキル局  
アンドレアス・シュライヒャー局長

### ◎実践報告

OECD アナリスト ツィチスン 謝智森氏  
埼玉県新座市教育委員会 金子廣志教育長  
ベネッセコーポレーション商品企画開発本部  
服部奈美子本部長

### ◎パネルディスカッション

#### ●パネリスト

OECD 教育・スキル局  
アンドレアス・シュライヒャー局長  
聖心女子大学 ますかわひろゆき 益川弘如教授  
埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課  
八田聡史課長  
東京都・私立広尾学園中学校・高校  
医進・サイエンスコース コース長 木村健太先生

#### ●進行

ベネッセコーポレーション教育イノベーション推進課  
小村俊平課長

**エビデンスやデータを基に  
未来の教育のあり方を語り合う**

AIなどの科学技術の発展やグローバル化といった社会の急速な変化を受け、今、未来の教育のあり方が問われている。「EdTech（エドテック）」を活用し、いかに個別最適化された学びを実現するかなどの議論が進められる中で、それに対応した未来の教育に期待される役割は、ますます大きくなると考えられている。

今回のシンポジウムではまず、基調講演として、PIISA（学習到達度調査）を始めとした様々な調査分

析を統括し、70以上の国や地域において科学的なアプローチで教育改革に取り組んできたOECD教育・スキル局のアンドレアス・シュライヒャー局長が、豊富なデータに基づいて2030年を見据えた教育の展望を語った。

続く実践報告では、OECDアナリスト、埼玉県新座市教育委員会教育長、ベネッセコーポレーションの社員が、それぞれの視点から「PSA for School」の取り組みを紹介した。

最後のパネルディスカッションでは、シュライヒャー局長を囲み、大学、高校、教育委員会の教職員が、これからの教育改革の方向性を語り合った。

# データに基づく教育改革を推し進め、急速な社会の変化に対応する

シュライヒャー局長は、OECDが実施するPIISAやTALIS(国際教員指導環境調査)などの各国のデータを示しながら、子どもの実態や現行の教育システムの課題、今後の教育改革の方向性などを語った。

最初に、データを基にした教育改革に取り組む必要性について、「データを持たないことは、意見を持たないことと同義です。これからの教育は、アートであると同時に科学でなくてはなりません」と強調した。

さらに、ここ数十年間の科学技術の目覚ましい発展に対して、多くの国で、教育現場の対応が追いついていない実情を示した。その上で、教育改革に積極的な国では、PIISAの結果が向上していることに言及した。

「従来の教育方法をただ継続するの



登壇者  
OECD教育・スキル局 局長  
アンドレアス・シュライヒャー

ではなく、どのような教育が成果をもたらすのか、常にデータを確認して教育実践することが大事になります」

今後求められる資質・能力については、目に見える学力も必要だが、社会情動的スキル(\*1)がますます重要になると指摘。一例として、日本では、科学のテストの成績はよいが、科学者になりたいという子どもの割合が低いという事実を課題として示した。

「テストの成績だけでなく、科学という学問へのこだわり、科学関連の仕事にかかわりたいという思いを高めることが大切です。そのためには、子どもが楽しみながら学びを深められる学習環境の質を高めることが欠かせません」

特に、社会情動的スキルを伸ばすためには、教師の専門性の向上が不可欠であると、TALISなどのデータに基づいて説明した。鍵となるのは、「知識」「自律性」「教師ネットワーク

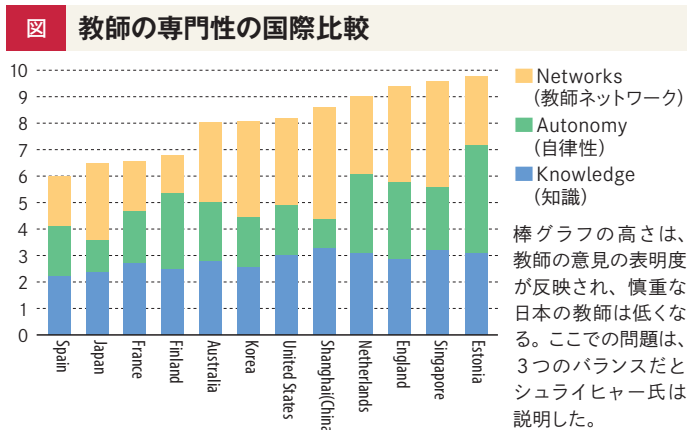
ク」の3つであり、日本の教師は「知識」と「教師ネットワーク」が強みである一方、教師がクリエイティブに学習環境をデザインできるといった「自律性」に大きな課題があると指摘した(図)。それに関連して、教育施策の意思決定者が国によって異なることも説明され、他国に比べて日本は、学校の権限が非常に弱いことがデータで示された。

そして、シュライヒャー局長は、過去から未来への教育の変化について、3つの方向性を提示した。

1つめは、「分断から統合」だ。従来は教科ごとに教育を行ってきたが、これからは学問分野や学習内容、さらに子ども同士を統合させる学びが中心になるという考え方だ。

2つめは、「標準化から独創へ」。「教育制度にいかにも独創性を取り込めるかに、教育の未来はかかっています。TALISの結果では、『イノベティブな教育により、成果が得られる』と考える教師は4分の1に過ぎません。そうした認識を変えることから始めて、改革を進めていくことが大切です」

3つめは、「あらゆる場所で学ぶ続ける」だ。過去には、学ぶ場所が



\*シンポジウム配布資料を基に編集部で作成。

限定されてきたが、科学技術の進化によって、学校と外部を結びつけることが容易になった。また、学びとアセスメントを同時にできるようになったことも重要な変化だという。

「データ分析によって、教育のさらなる可能性が発見でき、コンフォートゾーンから抜け出して挑戦することができます。ほかの国や学校の実践から学び、教育システムを効率化し、よりよい学習者を育てられるよう挑戦を続けましょう」と参加者にメッセージを伝え、講演は終了した。

\*1 一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、学校教育または学校教育外でも学習体験によって発達させることができ、個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力。忍耐力、自己抑制、目標への情熱、社会性、敬意、思いやり、自尊心、楽観性、自信など。

# 学校や自治体の教育改革を支える 「PISA for School」の可能性

実践報告ではまず、OECDアナリストの謝智森氏が、「データとグローバルネットワークによる生徒の学習とウェルビーイング（\*2）の向上」をテーマに「PISA for School」の

活動について説明した。それは、学校ごとの生徒の学習到達度を他国の生徒と比較できるツールで、すべての生徒に質の高い教育と学習を提供することをミッションとしてOECDが開発した。現在、日本の埼玉県を含む12か国・地域が参加している。



登壇者  
OECDアナリスト  
謝智森  
ツイ・チスン

登壇者  
埼玉県新座市教育委員会  
教育長  
金子廣志  
かねこ・ひろし

登壇者  
ベネッセコーポレーション  
商品企画開発本部 本部長  
服部奈美子  
はっとり・なみこ

「国際的に比較できるデータとグローバルネットワークを通して教育関係者を支援し、生徒の学習とウェルビーイングを向上させることを目標としています」（謝氏）

「PISA for School」の参加校には、国際比較が可能なデータをまとめた報告書が提供される。学力に関する多様なデータに加え、質問紙調査を基に、授業の雰囲気、生徒と教師の関係、自己効力感、学習が将来役に立つという信念など、ウェルビーイングに関するデータも含まれる。

「そうした客観的なデータを基に、適切な教育方針を作成し、それらに沿って協働しながら行動し、評価して改善するというサイクルの確立を実現することで、学校教育の改善に寄与するものと考えています」（謝氏）  
続いて「PISA for School」に参加している埼玉県新座市教育委員会の金子廣志教育長が、参加を決定するに至った課題意識や思いを語った。

「参加の大きな理由は、日本の義務教育に対する危機感でした。アメリカでの日本人研究者の減少や、日本製品の店頭陳列からの減少など、日本の存在感が後退しています。また、教師のエビデンス不足や教員採用試験倍率の低下などの状況から、「PISA for School」への参加を決めました」  
同市では、データの活用により、保護者や地域への説明責任も果たしたいと考えている。

「保護者や地域の要望に対し、データを基に説明することは、学校への信頼度向上の鍵となります。教師が教育をデータで捉えることが大切だと考えています」  
教員採用試験の倍率が年々低下する中、教育の質をいかに確保するかも極めて重要な課題と捉えている。

「本腰を入れて教育を変えていかなければ、日本の教育は立ち行かなくなるでしょう。データを活用しながら教育改革を推進し、教員が誇りを持って携われる教育をつくり上げたいと思います」（金子教育長）  
そして、ベネッセコーポレーション商品企画開発本部の服部奈美子本部長が、新座市内の中学校で実施された「PISA for School」トライアルの結果を基に、その利点を説明した。

「自己効力感など、学習の土台となる要素やリテラシーを可視化できるため、学習環境の改善をより多角的な視点で行えるようになります。国内のみならず海外の学校とも比較でき、参加校によるコミュニケーションを利用して活動事例などを共有しやすいことも、大きな利点でしょう」

## パネルディスカッション

### 自治体や学校で データに基づく教育改革が進展

パネルディスカッションでは、埼玉県教育局市町村支援部義務教育指

導課の八田聡史課長が、教育行政におけるデータの活用事例を紹介した。

\* 2 well-being。身体的・精神的・社会的に良好な状態にあること。

埼玉県では小学4年生〜中学3年生の約30万人を対象に、独自の学力・学習状況調査を実施している。

「IRT（項目反応理論）に基づき、子ども一人ひとりの学力を継続して把握し、非認知能力や学習方略を調査しています」（八田課長）

同調査の結果から、学力や非認知能力が高まりやすい学校の条件といった示唆を多く得ている。

「分析結果に基づき、児童・生徒の



パネリスト  
OECD教育・スキル局 局長  
アンドレアス・シュライヒャー



パネリスト  
聖心女子大学 教授  
益川弘如  
ますかわ・ひろゆき



パネリスト  
埼玉県教育局市町村支援部  
義務教育指導課 課長  
八田聡史  
はちだ・さとし



パネリスト  
東京都・私立広尾学園中学校・  
高校 医進・サイエンスコース  
コース長  
木村健太  
きむら・けんた



進行  
ベネッセコーポレーション  
教育イノベーション推進課 課長  
小村俊平  
こむら・しゅんぺい

現状を把握して改善につなげる施策、及び教師の授業力を向上させる施策を検討し、教育改善のPDCAサイクルを機能させています」（八田課長）

八田課長の報告を受け、シュライヒャー局長はこうコメントした。

「埼玉県の取り組みは、世界の中の好例として数年前より注目しています。IRTを活用し、データを学習や指導の改善に生かしている点、社会情動的スキルを統合した全体的な評価を行っている点が、高く評価している理由です。それに加えて、私は、教師がデータサイエンティストになることを提案します。教師自身が調査結果を見て、指導改善ができるようになる」と素晴らしいです」

さらに、聖心女子大学の益川弘如教授は、次のように語った。

「埼玉県では、指導改善のPDCAサイクルに真剣に取り組んでいることが分かりました。同県の学校を訪問した際、データを基に教育を変えたいという先生方の意識が伝わってきました。埼玉県に限りませんが、今後は、生徒のコンピテンシーをどう育てるかという視点から、テストの問題内容を検討する視点も大切になるでしょう」

東京都・私立広尾学園中学校・高校の医進・サイエンスコースの木村健太コース長は、同校のデータを活用した教育改革の事例を説明した。高校1年生では、ベネッセの模擬試験やGTZ（\*3）のデータを活用し、生徒自身にパソコンで成績や学習時間を入力させ、その相関関係に気づかせることで、自主的に学習に向かわせる指導をしている。ただ、高校2年生になると、成績と学習時間に相関が見られなくなると言う。

「生徒には、高校2年生は量より質を担保する段階だと伝え、学習内容や学習法、教科バランス、主体性などを個別に確認し、支援しています」（木村コース長）

続いて、ポートフォリオによる質的評価の事例として、推薦入試での生徒の推薦文を紹介した。

「生徒が蓄積したポートフォリオを基に、教師が具体的に推薦文を記述することで、生徒個々のよさや強みが伝わりやすくなります」

木村コース長の報告について、益川教授は次のように述べた。

「同校では、自分自身の学びのために学習記録を管理する文化が生まれています。勉強を何時間したかといっ



た量的な記録にポートフォリオの記録を関連づけて、生徒自身の振り返りに生かすことが今後一層大切になると改めて感じました」

シュライヒャー局長は、木村コース長の報告を踏まえ、将来の評価データのあり方について展望した。

「今後、データは定性・定量の区別がなくなり、もつとクリエイティブなものになるはずですが、生徒の顔つきや感情、行動などもデータ化されるようになるでしょう。それらをテクノロジーを活用して取り込むことで、質の高いフィードバックができるようになるに違いありません」

\* 3 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」の15段階で評価される。

## 2019年6月号へのご意見

### カリマネに取り組む糸口が見えた

カリキュラム・マネジメントに取り組まなければならないとは分かっていたが、どのような切り口で、どのように取り組めばよいのか、悩んでいた。6月号の特集を読み、カリキュラム・マネジメント推進にあたっての具体的なヒントをいくつも得ることができた。まずは、学校の現状を分析し、学校教育目標の設定から始めたい。

兵庫県 匿名希望

### 柱となる課題を見つけたい

6月号の特集は、カリキュラム・マネジメントをどのように進めればよいのかを考えさせられた記事だった。学校内で柱になる課題を1つでも立てられれば、そこから先はいろいろなやり方や取り組みを検討できると感じた。

三重県立いなべ総合学園高校 郡 正樹

### カリマネで大切なのは教師が変わること

6月号の特集を読み、私たち教師が変わることが大切なのだと痛切に感じた。関西大学の森朋子教授が「ワークショップを終えて」で言われた「カリキュラム・マネジメントは、社会変革への先生方の挑戦」という言葉が、心に響いた。

栃木県立真岡北陵高校 阿久津 功

### 教育に今日的な課題を取り入れる迅速性が必要

6月号の『『学校教育デザイン』を描く道標』で取り上げられた佐賀県立佐賀西高校は、2015年に掲げられ

たSDGsという今日的な課題を、探究学習の軸として迅速に自校の教育活動に取り入れていた点が素晴らしいと思った。本校では、全校朝礼の話題としてSDGsを取り上げたことがあるので、同校の方法を参考にして、SDGsを本校のカリキュラムに生かしていきたい。

鹿児島県 匿名希望

### 幼稚園の自由遊びに「学び」の本来の姿を見た

6月号の「高校教師 study-tour」で取り上げられた幼稚園の自由遊びについての記事は、「学び」の本質について改めて考える機会となった。何かに「没頭する」こと、そして「童心」に帰って純粋な気持ちで目の前の課題に取り組むことに、「学び」の本来の姿があるのかもしれないと思った。ルーブリックに代表される「学習成果」として測ることのできない「学び」を忘れてはならないと痛感した。

滋賀県立草津東高校 堀 浩司

### 若手時代の苦い経験が成長の糧に

6月号の「教師を育てた言葉たち」の記事で、新潟県立長岡高校の山崎健太先生が前任校で同僚の教師から受けたアドバイスが衝撃的で、その言葉に救われたという体験談は、新鮮な内容だった。そうした若い時の経験は、ともすれば独り善がりに陥りやすい教師にとってとても大切なものだった。

長野県 匿名希望

## お詫びと訂正

『VIEW21』高校版2019年度6月号「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」で掲載をいたしました、福岡県・私立福岡女学院中学校・高校の柿原寿人先生のプロフィールの中に、下記の誤りがございました。

### 〈対象ページ〉

『VIEW21』高校版2019年度6月号p.45中段・柿原先生プロフィール2行目

(正) 凛として花一輪プロジェクトリーダー

(誤) 凛として花輪プロジェクトリーダー

製作段階で柿原先生から上記修正のご指摘をいただいていたにもかかわらず、編集部がそのご指摘を見落とし、修正をせずに発刊してしまいました。柿原先生、学校関係者の皆様、そして読者の皆様大変ご迷惑をおかけいたしましたこと、深くお詫び申し上げます。再発防止策を徹底して参りますので、今後とも、ご指導のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

『VIEW21』高校版編集部

VIEW21 高校版 2019 10 月号

次号は10月15日発行(予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

## 教師を育てた 言葉たち

No. 015

### 秋田県立秋田高校 土門高士先生 どもん・たかし

◎教職歴22年。同校に赴任し10年目。2年間の進路指導主事を経て、現在1学年主任。国語科担当。高教研国語東北大会(2012年)授業公開・全国大会(2018年)研究発表。秋田県高体連サッカー専門部総務委員長。東北100人会(東北地区進学学習会)幹事。



**私** はこれまで小規模校に何度か赴任し、学年全クラスの国語の授業を受け持つことも度々ありました。そのため、恥ずかしながら、自分の力で生徒全員の希望進路を実現させるという意識を強く持っていた時期がありました。生徒が自己の課題に向き合わないと、希望進路は実現しません。そこで、目標や課題を明確にし、生徒を希望進路に挑戦させようと、「**目標 - 現状 = 課題**だ」と言い続けました。

自分が頑張れば合格実績につながると、指導に自信を持ち始めた頃に赴任したのが、県トップの進学校である本校でした。当然ながら、それまでとは異なり、自分の力だけで生徒全員を指導するには、人数的にも教科的にも限界がありました。志望校に進学できずに涙を流す生徒を目の前にして、自分はどうすべきだったのかを問い直した時、課題を抱え込みすぎたこと、もっと周りの先生方と話をしなければならなかったことに気づきました。私自身が、現状認識が甘く、課題に向き合えていなかったのです。

**苦** い経験を経たからこそ、自戒を込めつつ、担任・進路指導主事・学年主任という立場に応じて、生徒には「**目標 - 現状 = 課題**」を強く意識して話すようになりました。加えて、それが行事や部活動などにあてはまることも、事あるごとに伝えています。

最近では、目標が、達成できたらよい「最高目標」なのか、絶対達成したい「最低目標」なのかも意識させています。今年の文化祭では、私が学年主任を務める1学年で、多くのクラスの出し物が全校順位で上位に入賞しました。ただ、その大半が計画的に

準備を進められず、最後に何とか完成させたものでした。そこで私は、学年集会で、「目標は全校1位ではなかったのか。この結果に満足してよいのか」と生徒に尋ねました。そして、「目標への考え方は、大学入試でも同じ。君たちの力なら、入試直前からでも本気で勉強すれば、どこかの大学に入れるかもしれない。でも、それは、本当に目指していた目標なのか。譲れない目標を考え、現状と課題を把握し、日々を過ごしてほしい」と話しました。

**生** 徒は未来の宝であり、だからこそ、泣く生徒をつくらないというのは、常に胸にある目標です。1人でその目標は達成できません。先生方、特に学年団と、個々の進路行事や学校行事が目指す目標について話しています。それが明確にならないと、生徒が行事を通してどう成長したのか、生徒も教師も振り返りができませんし、学校の取り組みも本来の理念を失い、簡単に形骸化してしまいます。伝統の精神すら、ただのかけ声に墮してしまう可能性があります。目標を共有し、課題をチームで明確に持って生徒を育てる雰囲気、学年団、学校全体に醸成される。それが、新たな目標でもあります。

ある講演会で、「**目標 - 現状 = 課題**」の重要性を講師が強調していました。また、県内外の先生方と話す機会に、言葉は違えど似た考えを持つ先生方にたくさん教えていただき、勇気づけられました。伝えたい内容や込める思いが言葉の中で深化していくように、これからも生徒や同僚と一緒に成長していきたいと思います。

秋田県立秋田高校 全日制/普通科・理数科/共学/1学年約270人/2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、秋田大、東京大、京都市大などに238人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ251人が合格。

# VIEW21

ビュー21 高校版 Volume 3 2019年8月号  
2019年8月20日発行 / 通巻第377号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング  
©Benesse Corporation 2019

お客様  
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17

9K VOL3

 Benesse